四十二歳の異世界冒険記

ショウキン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仕事も恋人もない四十二歳のブッサイクな底辺男ニシは、不幸にも得体のしれない世界に来てしまう。

その世界にはデビレンという危険な生物がいて、弱者が生き残れることは決してない。

戦闘力など皆無のニシの運命は？

※この小説は小説家になろう様、アルファポリス様にも掲載しています。

目次

第一話「悪夢の幕開け」 1
第二話「絶望の先に」 9
第三話「試される勇気」 17
第四話「異世界生活ってホントに大変だ」 22
第五話「デビレンの強さの事」 28
第六話「ボクが日本で歩んだ道」 34
第七話「毒使いとの激戦」 42
第八話「砂丘の過酷な大連戦」 49
第九話「東の間の平穏と新しい武器」 57
第十話「海の怪物たち」 63
第十一話「凶獣との死闘」 70
第十二話「マンジイを救え」 77
第十三話「旅は道連れ」 82
第十四話「迫るレベルフォーの影」 88
第十五話「恐怖の時間」 94
第十六話「一発逆転の大イベント」 102
第十七話「最初の鬼門」 108
第十八話「アジト潜入」 114
第十九話「デビレンたちの悪しき計画」 121
第二十話「名コンビ復活」 127
第二十一話「不気味な声に導かれ」 136
第二十二話「デビレンたちのボス」 143
第二十三話「非道な実験施設」 150
第二十五話「私刑王」 158

第二十六話「波乱の誘拐事件」 163
第二十七話「裏切りの果てに」 169
外伝一「狂気の復讐者」 178
外伝二「私刑屋結成物語」 186
第二十八話「全力の仇討ち」 193
第二十九話「魔獣の森」 205
第三十話「地上へ続く道」 212
第三十一話「恨みの鬼神ギルゴム」 217
第三十二話「レベルファイブの壁」 226
第三十三話「悪夢の果て」 233
第三十四話「決戦に向けて」 241
第三十五話「チィトとデスビル」 247
登場人物紹介 255
第三十六話「決着の時」 257
最終話「未来のために」 263

第一話「悪夢の幕開け」

ボクの名前はニシ。
メガネとそばかすが特徴のデブでのろまな四十二歳のブ男だ。
職を転々としながらある人物を探す生活を送っていたのだが、最近はまったく進展せずにイライラする毎日だ。
今日は面接に行った工場で若い面接官に罵倒された挙句、見事に不採用になった。
再就職に不利になるであろうブランクの期間は広がる一方だ。
激高してやけ酒を飲みながら歩いていたら、追い打ちをかけるように帰りの夜道で迷ってしまった。
その後、いくら歩いても、周りは来た時と違う景色ばかり。
足もかなりふらついてきたし、これは野宿するしかなさそうな感じだ。

「はぁ、ついてないなぁ。せめて、車でも通れば、ん？　待てよ」
そういえば、道路を歩いているはずなのに、さっきから車とまったくすれ違わない。
それ以前に標識らしきものもないし、下のコンクリート部分はやけにボコボコしている。
わけが分からず、不安が消えずに歩いていると、目の前に自動販売機を発見。
少しほっとしたのも束の間、そのラインナップに驚愕した。
右からナイフ、弾丸、メリケンサック、ガスマスク。
しかも価格はどれも万単位で、売り切れが半数をしめていた。
「ナイフ一本が五万って高すぎるよ。あ、いやいや、突っ込むのはそこじゃない。なんでこんなものが自販機で売られて、しかもこんなに売れてるんだ！」
困惑しながら立ち尽くしていると、ある事に気づいた。
自販機の所々には血が付着しており、横面には何かがひっかいたような痕もあった。

急にこわくなったボクは全速力で逃走した。
「これは夢だ。夢に決まっている」
祈りながら走っていると、ドンと何かにぶつかった。
「ん？　これは、あ、あああああ！」
ボクの目の前にいたのは、見たことのない黒くて目つきの悪い謎の化け物だった。
あんなに勢いよくぶつかっても目が覚めない辺り、これは夢ではないだろう。
もはや、言葉にできなかった。
ボクはおそらく、日本ではないどこか別の場所に迷い込んでしまったようだ。
「い、いつからだ。いつから、あ、あああああ！」
考えるヒマすらなく、化け物が襲い掛かってきた。
さっきぶつかったのを怒っているんだろうと必死に謝るボクだったが、聞き入れてくれる様子はない。
そもそも人間の言葉が通じているのかすら分からなかったが、このままでは殺されてしまう。
ボクは持っていたバッグを振り回しながら抵抗するが、化け物は左手をナイフに変えてさらに攻撃を激化させた。
「がるるるる」
「う、うわぁぁぁ！」
ボクはナイフによる一撃で後ろへと吹き飛ばされた。
幸いにもバッグが盾になってくれたおかげで傷は負わずに済んだが、腰が抜けて立てなくなってしまった。
「う、うう、どうすれば、ん？　ああ！」
振り向くと、そこには別の化け物が立っていた。
姿が似ている点から考えて、仲間がやってきたといったところか。
絶体絶命かと思われたが、何と化け物たちはボクそっちのけで戦い始めてしまった。
獲物をめぐる仲間割れかどうかは定かではなかったが、好都合なのは確かだ。

ボクは気づかれないようにそーっと移動し、何とか逃げのびた。
しかし、それから一分と経たないうちに別個体と思われる化け物がこちらへと近づいていた。
「は、あ。も、もう無理だよ。いい加減にしてよ」
無我夢中で動き続けたボクの体力は、限界に達していた。
そうでなくても、下手に進んだり戻ったりすれば化け物たちにまた遭遇してしまうので、近くの草むらに身を隠すことにした。
その後、こちらへ迫っていた化け物たちはボクに気づかずに行ってしまったが、ここはしばらく身を潜めていた方がよさそうだ。
とはいえ、寝るのはさすがに危険すぎるため、睡魔と空腹に耐える辛い戦いがはじまった。
正直、ここまで時間がたつのが遅く感じるのははじめてのように思う。
しかし、そんな必死の持久戦もむなしく、おなかの鳴った音が原因で化け物に発見され、再び追い回される羽目になった。
もはやダウンしてもおかしくない状態だったが、とにかく走り続け、ようやく見つけたボロ小屋に身を隠した。
「はぁ、はぁ。こ、ここなら、う！」
小屋の中はそれはもうひどいニオイが充満し、暗くて完全には目視できないが、虫のようなものも飛んでいる。
奥には汚れた食器も散乱しているし、誰かが生活しているのかもしれない。
ボクは拾い上げた食器を盾にしながら、さらに奥へと進んでみた。
「ここだけはやけに明るいけど、ん？」
部屋の隅を見ると、体中にケガをした青年がろうそくの横に寝ころんでいるのを発見した。
化け物ばかり見てきたボクにようやく希望の光が差し始めたようだ。
「はぁ、やっと人間に会えた。よかった」
「フフ、俺も同じ気持ちだよ。人間を見たのは本当に久しぶりだな」
「あの、キミはこの家の住人なの？」

「いや。はぁ、俺を助けに来てくれたというわけじゃなさそうだな。そりゃ、そうか」
青年はしばらく黙り込んだ後に体を起こし、話し始めた。
彼もあの化け物たちに追い回されて、ここにたどり着いたのだそうだ。
そこに至るまでの経緯もボクとほぼ同じ。
会社の同僚と居酒屋で酒を飲んだ後、夜道を歩いていたら、いつの間にか知らない場所に迷い込んだのだという。
同僚の人はあの化け物たちに殺され、彼自身もまともに歩けないほどの深手を負い、この小屋で一週間も助けを待っているのだそうだ。
「一週間もか。　ん？　あ、キミ、スマホを持っているじゃないか。なぜ、それで助けを呼ばなかったのさ？」
「とっくにやってみたさ。だが、どこにも繋がらない上にマップすら表示されないよ。少なくとも、ここは日本でない事は確かだろうな」
「日本じゃないとしたら、外国？　い、いや、ただ歩いていただけで日本から出れるわけがない。ここはどこなんだよ？」
頭の中を整理しようとしていると、あの化け物たちが横壁を壊して入ってきた。
ボクは青年を背負い、裏口から外へ出るが、とても走れる状態ではない。
あっという間に化け物たちに追いつかれてしまった。
「う、あ」
「おっさん、もういい。俺を置いて逃げてくれ」
「そ、そんな、でも……」
「でもじゃねぇ。二人とも殺されるよりマシだろうが」
「がるるるる」
化け物のうち一体が青年を踏みつけて動きを拘束すると、ナイフの柄についた口のようなもので吸い始めた。
そして、残るもう一体はボクの方へと迫ってきている。
「がるる」
「ボクは、ど、どうすれば……」

「とにかく走れ！　走って走って……　そして、日本へ帰れたら、俺の家族に伝えてくれ。あい、あああああ！」
　青年は化け物のナイフに吸収されてしまった。
　ボクは崩壊しかけそうな精神を支えつつ、落ちていた石を夢中で拾い、化け物たちに投げつけた後、逃走した。
「う、あああああ」
　目の前で人が一人死んだ。
　ボクの人生の中ではじめての経験だった。
　そして、化け物たちに捕まれば、ボクにも同じ末路が待っているのだ。
「嫌だ、嫌だ。ボクにはやらなきゃいけないことがあるんだ！　あの男を見つけるまでは！」
　ボクは目の前に何があるかなど確認もせずに、ただ走り続けた。
　だが、それが祟り、落ちていたバナナの皮を踏んでしまい、転倒した。
「だ、誰がこんなところに。あ、あ、こんなみじめな死に方、う、うう」
　化け物たちが迫ってくる音が近づいてくるが、もうどうしようもない。
　目が霞んでいき、ボクは意識を失っていった。

「う、うう。ここは？」
　目を覚ましたボクはベッドの上に横たわっていた。
　横にはおばあさんがニコニコしながら座っており、これまでの経緯を話してくれた。
　倒れていたボクは、偶然通りかかった親切な人に助けられ、近くの村に運ばれたのだという。
　すでにケガの手当てもされており、横には食事も用意されていた。
「あ、ありがとうございます」
「いいんじゃよ。うちは宿屋じゃ。あんたはお客さんなんじゃから、ゆっくりしていきなさい」

まさに、地獄に仏だった。
ボクは食事をいただきながら、おばあさんに何度もお礼を言った。
「う、うう。本当に感謝してもしきれないです」
「お礼はもう十分じゃよ。しばらく寝ときなさい」
おばあさんは、仕事があると言って退室した。
ボクは深呼吸しながら、やっと訪れた平穏を心から喜んだ。
この世界が何なのかという疑問は残っているが、今はゆっくり体を休めるのが先決だ。
まぁ、ケガの具合もそれほどではないみたいだし、これなら回復に何日もかからないはずだ。
「あのおばあさんには何かお礼をしないとね。ええっと、ん？　あれ？」
ボクはここで、持っていたバッグがなくなっている事に気づいた。
その中には、二十万以上の現金が入っていて、失くしでもしたらシャレにならない。
必死にベッドの周りを探すも、見つかる事はなかった。
少なくとも、バナナの皮で転んだ時点では持っていたはず。
ボクは外で洗濯物を干しているおばあさんに聞いてみることにした。
「化け物にやられた傷痕がついている古いバッグです。見ていませんか？」
「ん？　ああ、それなら前払いとしてもらっておいたよ」
「前払い？　え？　どういう事です？」
「何を驚いてんだい、お前は。善意で助けてやったとでも思ったのかい？」
「ま、まさか」
ここでボクはようやく状況を理解した。
助けておいて、金目の物をすべて巻き上げるのがこの店のやり方だったのだ。
どの道、お礼はしようとは思っていたけれど、さすがに全財産をとられては困る。

せめて、一万くらいでいいので、返してほしいと手をついてたのんだ。
「何とか、何とか。お願いします」
「あ？」
さっきまでニコニコしていたおばあさんは急にドスの利いた声でキレはじめた。
そして、宿屋の中に戻った後、屈強な男たちを数人連れて戻ってきた。
「さぁてと！」
「お、おばあさん、何する気ですか？」
「この生きるか死ぬかの世界でね、ただで何かしてもらおうなんて甘いんだよ。お前たち、やっておしまい」
おばあさんに命じられた男たちは一斉にボクに襲い掛かった。
無抵抗なケガ人相手だというのに容赦は全くない。
次々と激しい拳の雨が降り注いだ。
「フー。オーナー、こんなもんでどうでしょうね？」
「よかろう。お前たちはもう戻ってよいぞ」
「う、うう、お願いです。せ、千円でもいいから返して」
「きぇぇぇぇぇ！　まだ言うか、この死にぞこないのブタ野郎が！」
おばあさんはボクの顔を足蹴にし、散々に踏みつけまくった後、宿屋に戻っていった。
結局、ボクはここに来たことでさらなるケガを負う事になったのだ。
何だか、いろいろショックで立ち上がる気力すらない。
なんて思っていると、おばあさんが戻ってきて、罵声と共に冷水をかけてきた。
とりあえず、ここを離れた方がよさそうだ。
その後、辺りを見渡しながら村の中を進み、店や民家を回った。
せめてケガの手当てだけでもしてもらいたいとたのむも、門前払いされるか、罵声を浴びせられるかのどちらかだった。
最終的にはすべての村人に拒絶されたため、村のはずれにある木に

もたれかかり、ケガの手当てを始めた。
服を破って止血に当てていたが、疲れから途中で手が止まってしまい、しだいにうとうとしはじめてしまった。

第二話「絶望の先に」

「う、ううう。はっ」

目を覚ました時、ボクは木に寄りかかっていた。

つまり、眠りに落ちる前と全く同じ状態。

ほっぺたを思いっきりつねっても何も変わらないので諦めはついていたのだが、やはりこれは夢ではないようだ。

化け物に襲われ、この村でリンチされ、無一文という現実。

これからどうしようかと途方に暮れていると、いきなり近くの民家から怒鳴り声が聞こえ、傷だらけの少年が飛び出してきた。

ボクがその様子を見ていると、少年はしばらく歩いた後に倒れ、動かなくなってしまった。

「う、うう」

「あ、キミ、大丈夫？」

「だ、大丈夫です。こんなことしょっちゅうですから。ハハ、やっぱりこの金額じゃ無理だったか」

この少年、勤めている酒場から肉を買ってくるように言われたのだが、少ししか金を持たせてもらえなかったため、肉屋から激怒されて追い返されたのだという。

村中回ってみた限りでは、どこの店も売る側と買う側の一歩も引かない戦いが日常となっているようだが、板挟みになってしまうこの少年のような者は本当に不憫だ。

「そうか。キミもこの村の人に助けられたんだね？」

「はい。空腹で倒れているところを酒場の主人に拾われました。でも、俺が無一文だって分かると、急に怒り出して、半年間ただ働きさせられることになったんです」

「は、半年間ただ働き！」

「でも、ご主人は俺の仕事に難癖つけて一年以上の間、一日に十五時間以上働かせているんです。食事は朝に一度だけで病気しても休ませてもらえない」

「う、ボクはまだましな方だったのかもしれないね」

「でも、俺はへこたれませんよ。この世界で生きていくためには甘えていられないんですから」
「この世界か。キミはこの世界の事について何か知っているの？」
「聞かない方がいいと思いますよ、多分」
嫌な予感しかしなかったが、ボクは覚悟を決めて話を聞くことにした。
少年はうつむいたまま、今まで酒場で聞いた情報を話してくれた。
この世界の事、あの化け物たちの事、元の世界に帰る方法があるのかという事。
それらをすべて聞き終えたとき、ボクは恐怖のあまり、震えが止まらなくなっていた。
「あ、あああ、そんな、そんな……」
「だから聞かない方がいいって言ったでしょ。俺を恨まないでくださいね」
そう言い残すと、少年は逃げるように去っていった。

「う、うう」
少年からこの世界の事を聞いたボクは村を出て、どこに繋がっているかも分からない道を歩いていた。
もはや、ケガの苦痛が気にならなくなるほどの重圧が今のボクにのしかかっていたのだ。
しばらくすると歩く気力すらなくなり、地面にドンと座り込んだ。
「どうすればいい。ボクはどうすればいい。うう」
ボクは少年から聞いた話を思い返していた。
今更だが、本当に聞かない方がよかったのかもしれない。
まず、ボクを絶望させたのは、この世界が地球上のどこでもなかったという事。
ここは、イノグチ博士という科学者が作った転移装置によりたどり着く事が出来る異世界リャリャジアだった。

イノグチ博士は違法な発明ばかりをしてお尋ね者となったため、誰にも追われることなく研究や発明が出来るこの世界へやってきたと伝えられる。
彼のその後の動向は分かっていなかったが、問題は地球に残された転移装置の方だった。
秘密裏に回収されたそれは、裏社会の人間たちの手に渡ってしまい、悪用され始めたのだという。
その手口は人間を捕えて装置に入れ、このリャリャジアに送るというもの。
被害者たちの共通点は、おもに夜中に殴られて気絶した後、もしくは泥酔していた後にこの世界にいたという事。
たしかにボクもひどく泥酔し、夜道を歩いていたところ、気がついたらこの世界に来ていた。
つまり、あの夜道でボクは知らないうちに転移装置に入れられていたという事になる。
謎は解けたが、なぜボクが選ばれたのか、それ以前にこの世界に人間を送り込む目的は何なのかは不明だ。
さらに理解に苦しむことに、中には自分から転移装置に入ってこの世界に来た者もいるというのだ。
だが、これは元の世界に戻る方法があるかもしれないという事だ。
こんな得体のしれない世界に帰る方法もなく進んでくるとは思えないし、可能性は十分にあるとも思える。
もっとも、その方法を得られるまでこの世界で生きていられるかというのが重要な点だ。
ボクがいた日本のような平和な世界ならまだしも、この世界にはあいつらがいる。
ボクを襲ったあの不気味な化け物たちだ。
奴らはデビレンといって、この世界に太古から住みついている生物で、人間を理由もなく襲い、所有する武器についた吸引口で捕食する習性をもっているのだという。
知性や理性はほとんどなく、目の前の者を攻撃し、時には同族同士

で殺し合う事もあるほど凶暴なのだそうだ。
こんな奴らがうろついているというだけでも絶望的だったが、それだけではなかった。
奴らの数は、いまやこの世界に住む人間の数を上回っているという。
さらには、前にボクを襲った個体は単なる雑兵であり、はるかに別次元の強さを持ったデビレンもいるらしい。
故にこの世界では、金を使って強い者を雇うか、自分自身が強くなるしか生き残る道はない。
あの村人たちがとんでもない守銭奴だったのも、強い者たちを常駐させていたのも納得のいく話だ。
だが、分かったところで、今のボクにはどうしようもない。
ボロボロの服を着て一文無しでさまよう四十二歳の戦闘能力皆無の男。
悲しいが、それが今のボクの現実だった。

「はぁ、はぁ、う」
歩き始めてどれくらいたっただろうか。
ボクは今が何時何分何秒で、どこにいるかも分からずにただ呼吸しているような状態だった。
この先で待ち受けている運命はおそらく二つ。
飢え死にするか、小屋で出会った青年のようにデビレンの襲撃におびえながら助けを待つかのどちらかだ。
そういえば、ボクはあの青年に家族への伝言をたのまれていたが、名前も住所も聞いていないため、不可能だ。
だが、それはそれでよかったかもしれない。
たとえ悲しい知らせでも真実を知りたいという人もいるだろうが、ボクが遺された家族だったら、そんな知らせは聞きたくない。
行方不明のままなら一パーセントでも生存の希望はあるが、死んだ知らせが届いてしまったらその希望はなくなってしまうからだ。

「知らぬが仏か。でも、ボクがあの青年の立場だったら、そんな事考える必要もないんだよね」
ボクには帰りを待ってくれる人間なんていなかった。
唯一の肉親だった父親とは疎遠で、友達も恋人もいない。
つまり、ここで死んだとしても、誰にも何の影響もないまま、存在が消えていくというわけだ。
そう考えると、急に情けなくなり、涙が止まらなくなった。
「ボクは、ボクは、ここで誰にも気づかれずに生涯を終えるのか。う、うう」
ボクは地面を何度もたたき、力一杯泣いた。
ここまで救いがない事があっていいのか。
いくらなんでもあんまりだ。
せめて、生まれた日本の地で死にたかった。
しかし、そんな思いを踏みにじるかのように、一発の銃弾がボクの頬をかすめた。
「う・・・・・ あ！」
振り向くと、一体のデビレンが銃を構えていた。
もはや、この状況では悪あがきなどしても見苦しいだけだ。
それにここで助かったとしても、デビレンはこの世界に数えきれないほどいるのだ。
「これまでか。さぁ、ひと思いに、う！」
急にボクの脳裏にあの男の姿が浮かんだ。
ボクの人生を滅茶苦茶にした絶対に許せない男。
奴を探し出せないまま、ここで諦めて人生を終えてしまっていいのか。
死を覚悟したボクの心は大きく揺らぎ始めた。
「や、やっぱりだめだ。ボクはこんなところで終われないんだ」
ボクは拳を握りしめ、力一杯走り出した。
体力はとう限界を迎えているはずであり、本当に気力だけで動いている状態だ。
だが、デビレンも容赦なく発砲しながら、しつこく追いかけてくる。

何とか振り切ろうとするが、無情にもボクが行きついたのは崖だった。
「はぁ、はぁ。う、うわぁぁぁぁ！」
あの男が目の前にいると思え。
そう自分に言い聞かせながら、ボクはデビレンにタックルした。
そのまま押し倒し、激しい反撃を受けながらも何とか食らいついた。
そして、しばらくもみ合った後、落下寸前の地点まで移動てしまった。
「しま、あああああ！」
ボクはデビレンと共に崖下に落下した。
ボクの方が上になったおかげで致命傷が免れたが、決着はまだ着いていなかった。
デビレンは片手を損傷してボロボロになりながらも生存しており、銃を構えながらボクにせまってきた。
おそるべき生命力だったが、さすがにもう限界だったらしく、動きが少しずつ鈍くなった後、ようやく倒れた。
「やった……　のかな。あ！」
デビレンの体はボロボロに崩れていき、その後には残骸と黒い玉が残った。
しかし、それから十秒と経たないうちに別のデビレンが二体現れた。
そう、この世界ではこれが当たり前なのだ。
「敵は待ってはくれないか。ん？　あ、目がくらむ。だ、ダメだ」
この場で倒れればどうなるかは分かり切っている。
しかし、体はもう言う事を聞いてくれなかった。

「ここは……　あの世……　ではないみたいだな」
目を覚ましたボクは、テントが張ってある河原のような場所で寝ていた。

隣には帽子をかぶった細目のおじいさんが座っている。
どうやら、彼がボクをデビレンから助けてくれたようだ。
しかし、前回の宿屋のおばあさんとの一件で懲りていたボクは素直に礼を言う事が出来なかった。
「ボク、お金持ってないですよ。この格好見ればわかるでしょ？」
「ハハ、見返りなど期待しとらんよ。まぁ、これでも食いなされ」
おじいさんは、真っ黒で怪しい模様のキノコを差し出してきた。
普通なら、食べないところだが、さすがに空腹には勝てなかった。
「じゃあ、少しだけ、ん？　うぐぐ、おえぇぇぇぇ！」
何とも口では表現できないような渋みがボクの口に走った。
それはもうまずいなんてものではなく、食べ物かどうか疑いたくなるような代物だった。
「み、水をください」
「ほれ」
「あ、あぶ、ぶーっ！　あっつ！　お、お湯じゃないですか！」
結局、このバカ騒ぎで傷口が開いて散々だった。
しかし、傷口以上に口の中に残ったキノコの渋みの方が気になってしょうがなかった。
多分、餓死する寸前でもあのキノコをまた食べたいとは思わないだろう。
「うう、はやくあの味を忘れたい。う、ええ！」
何と、ボクの横ではおじいさんがあのキノコをばくばく食べていた。
無理して食べている様子はないし、その表情はいたって普通だった。
「こ、この人、味覚あるのかな？　それとも、ボクが変なのか」
「ばくばく、ぐう」
おじいさんは目の前に会ったキノコをすべてほおばりながら、木に立ててあった槍の手入れを始めた。
それが終わると、今度は槍を手に持ち、突きの練習をはじめた。
「ふっ、ほっ！」

「あの、その槍でさっきのデビレンたちを倒したんですか？」
「いや、さっきお前さんを襲った連中は素手で倒した」
「す、素手であいつらを」
見たところ、おじいさんの体には傷らしきものはないし、傍らにあるバケツにはデビレンたちを倒した後に出る黒い玉もたくさん入っている。
これはそうとうな手練れであるようだ。
その事に安心したボクは警戒心を少しずつ解いていき、おじいさんについていくことを決めた。

第三話「試される勇気」

「う、うわ、また新手のデビレンだ」
「まったく、しつこいのう」
河原で目覚めてから三日後の朝、ボクはおじいさんと共に行き着いた森でデビレンたちと戦っていた。
ボクは逃げるので精いっぱいだったが、おじいさんは見事な槍さばきで攻撃を続けている。
途中で少し息が荒くなることはあるものの、それでも反撃は食らわずに無傷の状態。
このまま彼に前衛をまかせていれば、夜までには森を抜けられそうだ。
しかし、安心したのも束の間、新手のデビレンたちがボクの後ろから現れ、押し倒してきた。
「う、あ、た、助けて！」
「はっ！」
おじいさんは槍を振り回してデビレンたちを倒した後、ボクを連れて走り始めた。
そして、先にあった木の下まで行くと、急に真剣な表情をして言った。
「お前さん、もしかして、自分で戦う気はないのか？」
「ボクなんかが戦っても足手まといになるだけでしょ。ここは強い人にまかせるのが一番だと思って」
「そうか。そんな風に考えとるんじゃな」
おじいさんは急に押し黙ってしまった。
何かをじっくりと考えているように見える。
しかし、そのスキをつくようにさっきのデビレンたちが追いついてきた。
その後ろからはさっきいなかった長髪の個体も現れ、囲むようにしてボクたちに迫ってきた。
「がるるるる」

「もう、勘弁してよ」
「あの長髪の個体はレベルスリーじゃな。ちと手強いじゃろうな」
おじいさんは槍を装備し、身構えた。
しかし、デビレンたちが先に狙ったのはあたふたしているボクの方で、ハンマーをブーメランのようにして投げつけてきた。
「うわぁぁぁぁ！」
「危ない！」
間一髪のところでおじいさんの強烈なドロップキックがボクを蹴り飛ばし、ハンマーの直撃は免れた。
しかし、ハンマーは陽動に過ぎなかったようで、直後に大きな黒火の連弾が飛んできて、おじいさんの腕をかすめた。
「ちっ、やるの」
「う、うう。なにも蹴り飛ばす事ないでしょう」
「お前さんは重いからそれくらいした方が確実に飛ぶじゃろ。それともハンマーの直撃の方がよかったか？」
「うおおお、死ね！」
長髪デビレンがハンマーを手に取り、おじいさんに襲い掛かった。
しばらくは普通に振り回していたが、途中からは黒火をまとわせて攻撃してきた。
また、ハンマー攻撃の合間に先端がとがった鎖を懐から取り出し、連続で投げるなど器用な戦術も見せた。
しかし、その過程で周りにいた他のデビレンたちも巻き添えにして倒してしまった。
もはや、勝てさえすれば、同族がどうなろうと知った事ではないといった感じだ。
「オラオラ！　さっさと楽になれ、ジジイ」
「まだ葬式なぞ、ごめんじゃ」
「ん？　ちょっと、待って。キミはデビレンだろう？　なぜ、喋れるんだ？」
「何言ってんだ、デブメガネ。俺はレベルスリーなんだから喋れて当

たり前だろう。そんな事も知らないとは、この世界に来たばかりの輩という事だな？」
「う、いや、うう」
「図星のようだな。まぁ、いい。まずはこっちのジジイからだ」
「が、がんばって、おじいさん」
「がんばったって、時間の無駄さ。見ろ」
何と、長髪デビレンの体にあった傷がきれいに消えていた。
戦闘能力といい、さっきの黒い火といい、奴は今までの個体とは違う。
おそらくは酒場の少年が言っていたはるかに別次元の強さを持ったデビレンと見て、間違いないだろう。
「自動的に再生する力まであるなんて。は、反則だよ」
「フフ、怖気づいているな。こりゃ、早くこっちを片付けて死に顔を拝みてぇな」
長髪デビレンはさらに強い勢いでハンマーを振り回す。
おじいさんはその気迫に押されているのか、よけるばかりで反撃がない。
そして、わずかにぐらついたところを黒火つきのハンマーで攻撃され、吹き飛ばされた。
長髪デビレンは、おじいさんが再び向かってこない事を確認すると、ボクの方へせまった。
「フフ」
「あ、ど、どうすればいい。あんな巨大なハンマーを軽々と振り回す奴を。う、うう、でも、やるしかないんだ」
ボクは震える足を叩きつつ、戦闘態勢をとった。
しかし、前進し始めた直後に長髪デビレンの蹴りをくらってダウン。
すぐに立ち上がるも、流れるような体当たりを連続でくらい、地面に叩きつけられた。
そして、とうとう手足を押さえられた上にマウントをとられ、完全なサンドバッグ状態になってしまった。

「あ、ふ、ぐぐ」
「よえぇなぁ、ブタ野郎」
「ボクはやられるわけにはいかない。ボクには、ぶぶ、ぐ、げふ」
口上すら許されず、ボクはやられ続けた。
続けてハンマーでトドメをさされそうになるが、割って入ってきたおじいさんに助けられた。
「あ、はぁ、はぁ」
「なかなかガッツのある戦いじゃったぞ」
「おじいさん、ハンマーの直撃をくらったのに、どうして？」
「ハンマーが直撃する寸前に風圧を利用して自分から後ろに飛んだ。少し確かめたいことがあっての」
「確かめたい事？」
「その話は後じゃ。まずはあいつを倒さんとの」
「ジジイ！　てめぇ、俺を相手に手を抜いて戦ってたっていうのか！」
「なーに言うとる。お前さん程度の奴に本気を出すほどワシは鬼畜ではない」
「ふざけんな、ジジイ！」
長髪デビレンは怒り狂い、再びハンマーで襲い掛かる。
しかし、さっきと違い、その攻撃はもうおじいさんに見切られているようで、まったく当たらない。
しまいには攻撃そのものが雑になり、ただ暴れているだけのような状態になってしまった。
「うぉぉぉぉ、このジジイ、死ね死ね死ね！」
「スキだらけじゃな。これじゃあ、さっきの方がまだマシじゃったの」
おじいさんはハンマーを叩き落とした後、長髪デビレンの右足にローキックをあびせた。
長髪デビレンはなんとか持ちこたえようとするも、直後に左足にもローキックをあび、ついに倒れてしまう。
「ぐ、ぐぐ」
「お前さんのレベルじゃ骨折などの重大なケガまでは治せない。そうじゃったな？」

「くそ、まだだ。まだ俺は」
「そうか。じゃあ、次は首の骨を折るぞ」
「う、うう」
長髪デビレンは実力差をさとったのか、抵抗せずにお縄となった。
再開からここまでわずか一分足らずというスピード決着だった。
「ま、こんなところじゃな」
「おじいさん、か、かっこいい」
「さてと、話をするとしようかの。まずは試したりしたことを詫びねばならんな」
おじいさんは、さっきの戦いでボクに戦う意思があるかどうかを判断していたと言った。
もし、戦わずに命乞いでもしようものなら、この先の村で別れるつもりだったという。
これは、単なる厳しい発言ではなく、周りに頼りっきりではどの道生きてはけないと教える意味も込められていたそうだ。
たしかに分かる気がする。
さっきの戦いでおじいさんが本当に深手を負って動けなくなった場合、ボクが敵を倒すしか全滅を免れる方法はない。
戦闘経験やケガがどうとか、甘えは通用しないのだ。
「ここは常識の通用しない異世界だ。でも、ボクはここで終わるわけにはいかないんだ」
もはや、戦い続けなければ、日本に帰ることはできない。
迷っていたボクの心は完全に固まった。
絶対に強くなってみせると心に誓うのだった。

第四話「異世界生活ってホントに大変だ」

「どうか、よろしくお願いします」
長髪デビレンとの戦いから三日後、森の中でボクはおじいさんに正式に弟子入りした。
これからは、一緒に旅をしながら鍛えてもらえることになった。
まずは、体力と腕力を磨くための訓練からはじまった。
内容は筋力トレーニング、走り込みといった今までやったことのないものばかり。
これを繰り返していけば、下級のデビレンくらいなら余裕で倒せるようになるらしい。
しかし、四十二歳の運動音痴であるボクは思うように息が続かず、開始早々で体が悲鳴を上げ始めた。
「ぜぇ、ぐぐ、はぁ。あの、どれくらい繰り返せば強くなれるんですか？」
「気の早い事を言うでない。時間をかけてコツコツ積み上げてこそ強くなれるんじゃ」
「ひーっ！」
訓練はその後、八時間近く続き、ようやく待ちに待った食事の時間がやってきた。
しかし、食べられるのは、この前食べたまずいキノコのような強烈な味のものや触るのも嫌な虫の類ばかり。
おじいさんは、悪食も訓練の一つだと思っていればその内に慣れてくると笑い飛ばしていたから、さすがだ。
そして、食後は少しだけ休憩した後、また八時間ほど訓練し、その後に就寝の時間となる。
すでにここまで何日も体験していたが、ここでの就寝時間はまともに休めるようなものではない。
デビレンによる奇襲に備えるためにおじいさんと交替で休まなければならない上、しつこくたかってくる虫たちがことごとく安眠を妨げる。

そんな辛い時間が終われば朝が来て、厳しい訓練で自分を鍛え、まずい食事を採り、中途半端な睡眠をとる。
おじいさんによると、これがほとんどの異世界冒険者の基本らしい。
「きついじゃろうが、年寄りのワシでもこなせているんじゃ。若いお前さんがこなせないはずはなかろう。気をしっかり持つんじゃ」
「は、はい。あ、でも、足がふら、つい、て」
「しっかりせい。ほら、もう少しなんじゃから」
「もう少しって何が、ん？　おお」
ボクの視線の先には、村の入り口と出入りする人々の姿があった。
ようやく、辛い野宿生活から解放される時が来たようだ。
しかし、おじいさんが最初に向かったのは食堂でも宿屋でもなく換金所。
ここで生け捕りにしたデビレン、もしくはデビレンを倒した証である黒い玉を引き渡すと、報奨金が手に入るのだという。
今回は捕えた長髪デビレン、倒した並みのデビレン二十体分の黒い玉を引き渡し、三十万ザディン手に入った。
「明細には長髪デビレンが十万ザディン、他のデビレンは一万ザディンと書いてありますね。ん？　ところでザディンって何ですか？」
「この世界の通貨じゃ。日本円にすると、一ザディンが一円じゃな」
「へぇ、森で活動した日数を考えれば、かなり高収入じゃないですか」
しかし、実際はそうはいかなかった。
おじいさんによると、この世界の物価は現実世界の物価に比べて異様に高く、ちょっと食事や寝泊まりしただけで無一文になるケースも珍しくないのだという。
これは、この世界の資源が限られているうえ、よく採れる場所は縄張り化されて一部の人間ばかりが販売を独占しているからだそうだ。
その影響か、どのジャンルの店も店主の態度が異様にでかく、気持ちのいい接客などは元から期待しない方がいいのだとか。
そして、寝食以上にこの世界で悩みの種となっているのがケガや病

気だ。
保険などあるはずもなく、骨折一つ治療するだけで全財産が吹っ飛ぶなんて事例もあるらしく、デビレン狩りをする者にとっては大きな脅威といえる。
「ま、デビレンとの戦いに余裕で勝てれば何も問題はないんじゃがな。はっはっは」
「全っ然笑えないんですけど。はぁ、これからはうかつにケガもできないな」
なんて言っていると、さっそくスプーンのようなものが飛んできて、ボクの頭に命中した。
どうやら、近くの食堂にデビレンが攻め込んで暴れているようだ。
おじいさんは槍を装備して走り出し、ボクも後に続いた。
「お、おじいさん、こんな村の中にまでデビレンが現れるんですか？」
「奴らが現れんと保証できる場所などない。気をつけろ、この殺気はレベルスリーのものだ」
「うう。日本の漫画喫茶でうたた寝していた頃が恋しいよ」
ボクはおなかを押さえながら、おじいさんと共に食堂に突入した。
すると、いきなり燭台と共に人が飛ばされてきて、前にいたおじいさんがよけたためにボクの顔面にぶつかった。
戦闘前だというのに、鼻から大量出血し、口の中を切り、もう散々だった。
「う、うう」
「ニシくん、そんな調子じゃ命がいくらあっても足らんぞい」
「あんたがよけるからでしょう。で、この人は一体？」
飛ばされてきたのはガタイのいい色黒の男だった。
厨房やカウンターにも同じような男たちが何人も倒れており、奥に犯人らしきデビレンがいた。
外見は真っ赤な赤髪で小柄なおとなしそうな少年風といったところ。
だが、やはり他のデビレンの例に違わず、ボクらと目が合った途端に声を荒らげながら襲いかかってきた。

「てめぇら、奴の仲間か！」
「ぬっ」
おじいさんは槍を振りかざし、激しい戦闘が始まった。
しばらくは互角の展開だったが、少しずつ赤髪デビレンの方が押している感じだ。
ボクも加勢すべきかもしれないが、これほどのレベルの戦いとなると、さすがに手を出すわけにはいかなそうだ。
「うう、二人ともすごいな。それにしても、あのデビレンの異様な殺気は一体？」
「ふむ、デビレンの兄さんよ。お前さん、興奮しすぎじゃぞ。奴の仲間がどうとか言うとったが、奴とは誰の事じゃ？」
「刀を二本背負った黒髪を結った若い女だ。この村にいたという情報もあったし、お前らの仲間なんじゃないのか？」
「見てのとおり、ワシはそっちのムサイ男と二人旅じゃ。若いおなごは仲間におらん」
「おじいさん、ずいぶんはっきり言うんですね」
「うう。お前らじゃなかったら誰が知ってんだよ。俺の相棒と部下二百人を理由もなく潰しやがったんだぞ。こんなことが許されて良いのか」
「なーにを言うとる。デビレンも理由なく人間を襲っとるじゃろうが。ちょうど、お前さんがこの店の者たちにしたようにの」
「ああ。たしかにお互いさま……。なわけねーだろ！　俺らは良くてもお前らはダメなんだよ。高貴なデビレンと下等種族を一緒にするな！」
赤髪デビレンは背負っていた太い鉄パイプを手に取り、さらなる猛攻をはじめた。
ただ暴れているだけかといえばそうでもなく、床を破壊して粉塵で視界潰しを狙うなどの戦法も混ぜてきた。
そして、真正面から攻撃するふりをして下方向から蹴りを浴びせ、おじいさんをダウンさせた。
それと同時に後方からはガサガサと音がし、雑兵と思われるデビレ

ンが侵入してきた。
その後は近くにいたボクへと向かっていたが、途中でおじいさんたちの戦いをじっと見はじめ、銃を構えた。
このままにしておけば、いくらおじいさんでも対応しきれない。
ボクは近くに落ちていたナイフを拾い、雑兵めがけて突進した。
しかし、到達する前に銃弾で足を負傷し、壁際に追い込まれてしまった。
「ぐぐ」
「ん？　何だ、あの雑兵。俺の獲物を横取りする気か」
「何をよそ見しとるんじゃ」
おじいさんは赤髪デビレンの背後に素早く回りこんで槍で突くと同時に懐からナイフを取り出して投げ、雑兵に命中させた。
雑兵は残骸と化していき、赤髪デビレンも再生を終える前におじいさんに捕縛された。
その瞬間にボクの腰は抜け、滝のような汗を流しながら倒れこんだ。
「はぁ、はぁ。あ、危なかった」
「さっきは助かったぞい。礼を言わせていくくれ」
「い、いえ。は、はは」
「ほれ、行くぞ」
ボクとおじいさんは再び換金所に行き、食堂での戦い分の報酬を手に入れた。
食堂の店主からも謝礼として一万ザディン受け取り、この村で得た金は計三十一万ザディンになった。
その半分はボクの取り分としてもらえることになり、ようやく無一文から解放されたのだった。
「あ、ありがたいですけど、いいんですか？　ボク、そんな大した働きはしてないですけど」
「そう謙遜するな。仲間が一人いるというだけでワシは目の前の強敵に集中できる。こんなに心強い事はないじゃろう」
「おじいさん」

「ん？　ああ、そういえば、まだ名を言っておらんかったの。ワシの名は管（かん）マンジロウ。マンジイとでも呼んでくれ」
「はい。マンジイ、これからもよろしくお願いします」
「うむ。さぁ、また長い旅がはじまるんじゃ。心してついてくるんじゃぞ」
　こうして、村にほんの半日足らず滞在しただけで、ボクはまた苛酷な旅へと突入する事になった。
　本当はもらったお金をパーッと使いたかったが、今はその時ではない。
　おいしい食事やあったかい布団が欲しければ、強くなって稼げるようになるしかない。
　そう自分に言い聞かせながら、振り向かずに足を進めるのだった。

第五話「デビレンの強さの事」

「な、なかなか手強いな」
赤髪デビレンとの戦いの翌日、ボクとマンジイはたどり着いた雪原でデビレンたちと対峙していた。
今回の敵は丸刈りのレベルスリーが一体と雑兵が二体。
レベルスリーの方はそれなりの名のあるデビレンらしく、赤髪デビレンと戦った食堂に手配書が貼ってあったのを覚えている。
「鎖使いのテポット。たしか、五十万ザディンの賞金首でしたよね？」
「うむ。これはなかなかいい稼ぎになりそうじゃ」
「上から目線はやめろ、ジジイ。年寄りだからって手加減してもらえるなんて思うなよ」
テポットは鎖を二本取り出して雑兵たちに巻き付けて固定し、鎖鉄球のように振り回してきた。

軽快な鎖が相手だとばかり思っていたボクは驚愕し、パニックになった。
そうしているうちに重い一撃が足元に命中し、地面を大きくへこませてしまった。
「な、なんて威力だ」
「フン、同族たちを何の躊躇もなく武器として使うとはの。大した外道ぶりじゃ」
マンジイは槍を装備して前進し、テポットの重い一撃を回避していった。
そして、地面に重い一撃がヒットして止まったスキをつき、雑兵たちを槍で倒した。
しかし、テポットは雑兵たちが残骸と化す前にすばやく鎖を戻し、ボクの方に投げつけて巻き付けてきた。
「フフ、お前は重そうだから雑兵共よりもいい威力が期待できそうだな。さっきみたいに倒して解決ってわけにもいかないしな」
「ぐ、うう」

ボクは近くの木にしがみつき、何とか耐えようとした。
しかし、すごい力でぐいぐいと引っ張られ、鎖がぜい肉に食い込み始めた。
「お、ごごご」
「このデブが。手を放しやがれ」
「あ、あああああ！」
手が木から離れようとしたその直後、マンジイがテポットの後ろをとって槍を突きながら、拘束した。
「お前さんといい、この前の赤髪といい、簡単にスキを作り過ぎじゃ。賞金首になったのは、強さよりも殺した人間の多さが影響しているようじゃの」
「うう、ちくしょうが」
「さてと。ニシくん、ごくろうじゃったの。さっきの戦いじゃが、何か変化は感じられたかの？」
そういえば、ほんの少しだったが、前よりも全身が軽くなって速く動けていた気がする。
それにあんな馬鹿力でぐいぐい引っ張られたのに、それなりに耐えきる事が出来た。
肉体が強化しているという何よりの証拠かもしれない。
しかし、その後に行ったマンジイとの手合せでは速攻で腹に飛び蹴りをガーンとくらい、倒れてしまった。
さすがに勝てるだなんて慢心はしていなかったが、少し自信がついていただけにショックは大きかった。
「はぁ。まだまだみたいですね」
「そうじゃな。しかし、とっさに手を下にやって防ごうとしたのは見事じゃった。もう少しはやい対応じゃったならダメージを軽減できたじゃろうな」
「え？　じゃあ、強くなっていると思っていいんですね？」
「ちっとはの。まだ不安な要素はあるが、次のステップに進んでもいいかもしれんの」
マンジイはそう言うと、赤髪デビレンから奪っておいた太い鉄パイ

プをボクに渡した。
何というかずっしりと重たく、両手でめいっぱい力を込めてやっと振り回せるといったところだ。
それだけに威力はかなり期待できるそうなので、使う価値は十分にあるといえるだろう。
「たしかに素手だけでデビレンとやり合うには限界がありますからね。ありがたく使わせてもらいます」
「うむ。じゃが、それはあくまでもちゃんとした武器を手に入れるまでの繋ぎと考えておくんじゃぞ。いつまで使えるという保証はないのでの」
「え？　どういう意味ですか？」
「魔性具なんじゃから、当然じゃろう。その辺の事情は知らんのかの？」
「ええ、あまり詳しくは。この鉄パイプもその魔性具なんですね？」
「そうじゃ。雑兵から上級までのすべてのデビレンが持ち合わせておるのが魔性具じゃ。形は一つ一つ違えど、共通点が一つだけある。それが人間を取り込んでしまう機能じゃ」
マンジイは鉄パイプの下部にある丸い吸引口のようなものを指さした。
それにより思い出したのは、動けなくなった人間が無残に吸い込まれていくあの光景だった。
もし、村での戦いでヘマをして自分も鉄パイプの中に取り込まれていたかもしれないと思うと、寒気がしてしょうがなかった。
「この鉄パイプに一体何人の人間が取り込まれたんだろう。本当に使って大丈夫なんですか？」
「人間を取り込む機能だけは本来の持ち主であるデビレンでないと使えんよ。あくまで武器として使用するんじゃ。ただし、魔性具は正確にはデビレンの分身体のようなものじゃから、デビレン本体が死ねば、魔性具も消滅するという事を忘れんようにの」
「つまり、村で引き渡したあのデビレンが処刑されるまでの間しか使えないってわけか。んー、あの、いい機会なんでデビレンについて

もっと詳しく教えてくれませんか？」
「うむ、これから必要となるじゃろうからの。大変よい心がけじゃ」
マンジイは今までに集めていたデビレンに関する詳しい情報を話し始めた。
まずはデビレンの階級に関する話。
階級は大きく四つに分かれており、強さはピンキリ。
もっとも低いレベルワンは、誕生して間もない状態の事を指し、空気中を漂うだけのウイルスのような存在。
戦闘能力はほぼないものの、肉眼では確認できない状態であるため、捕獲や駆除はまず不可能。
そして、野放しになった状態で一週間から一カ月ほどで少しずつ肉体が実体化していくという。
その末にたどり着くのがレベルツー。
これはボクが今迄に一番多く遭遇してきたデビレンで、一般的に雑兵と呼ばれている連中。
雑兵といっても、普通の人間を軽く絶命させてしまうくらいの力はあり、欠点があるとしたら理性や知性がほぼない事。
だが、それ故に遭遇した人間を躊躇なく襲う事がもはやお約束であり、殺害後は魔性具についた吸引口で吸収し、力を蓄えていくのだそうだ。
そして、蓄えられた力がたまっていくことでたどり着くのが、レベルスリー。
今迄に出会った中では、森で戦った長髪デビレン、村で戦った赤髪デビレンがこれにあたるのだという。
レベルツーとの外見的な違いは、髪が生え、顔立ちが比較的整っているというわずかなもの。
しかし、戦闘能力は別次元で、人語を話すなど知能も高く、この世界に来たばかりの人間にとってはもっとも最初に立ちはだかる高い壁だといえる。
そして、持ち合わせている力も厄介なものばかり。
集中力を高める事で、本来なら死角になる場所からの攻撃にも対応

できる複眼。
高威力かつ高スピードで敵を焼き尽くす黒火。
多少の傷なら自動的に再生してしまう自己再生能力。
これらを目の当たりにして心を折られた冒険者たちは数知れず、肉体よりも精神に強いダメージを負って再起不能になるパターンも珍しくないらしい。
ここまでの話をまとめると、レベルスリーがデビレン界の最高峰でも何ら不思議はないのだが、さらに上の存在があった。
それがレベルフォーであり、この世界の恐怖の象徴とも言える存在。
数多くの人間を吸収したレベルスリーのデビレンが、強い邪心を持つ人間を吸収する事で逆に肉体を乗っ取られて変異するという伝承があり、常備している能力も規格外。
集中力を高める事で、離れた場所にいる相手の動きを読み取る千里眼。
焼かれた箇所がいつまでもじゅわじゅわとうずき続ける魔性の火。
いかなる攻撃を受けても元通りに肉体を再生する完全不死。
この三つに加え、魔性具にも特殊な力が込められているらしく、マンジイはそれを身を持って体験したそうだ。
五年ほど前、仲間たちと旅をしていた時、何の前触れもなくその時は来たという。
上空から爆発音と共にマグマの塊が降り注ぎ、その場にいた半数以上が即死。
生き残った者たちも苦しみながら倒れていき、攻撃が止むまでに生き残ったのはマンジイと二人の仲間だけ。
三人共すでに満身創痍だったにも関わらず、容赦の欠片もないレベルフォーのデビレンが前に立ちふさがり、魔性具をかざしてきたという。
すると、次の瞬間、地面からマグマが噴き出して辺りを覆い尽くし、巨大化。
マンジイたちは何とか回避しながら奮闘するも、力の差を見せつけ

られ敗北。
仲間二人はマグマで焼き尽くされて死亡。
マンジイ自身もしばらく歩けなくなるほどの火傷を負ったという。
このときまでマンジイたちはほぼ負けなしで旅を続けていたらしく、与えられたショックはそうとうなものだったと思われる。
仮に戦闘能力で上回っていたとしても、完全不死なんていかれた能力がある以上、もうどうしようもない。
つまり、レベルフォーと戦った場合、それまで血反吐を吐くような猛特訓をしてどれだけ鍛えていたとしても、敵を倒すという選択肢自体が存在しないという事になる。
それを考えたとき、ボクは全身を震わせながら放心状態となっていた。
ついさっきまで持っていた自信はすっかり消え、デビレンの力を舐めきっていた事をただ痛感するのだった。
「強いうえに不死身だなんて、そ、そんなの反則だよ。ずるいよ」
「ふむ。聞かない方がよかったかの？」
「も、もう聞いちゃったじゃないですか」
「まぁ、そう悲観せんでよい。前もって聞いておいた方がいきなり実体験するよりはショックが小さかろう。はっはっは」
「はっはっはじゃないですよ。てか、なんでそんなに平然として話せるんですか。戦意喪失するのが普通でしょ？」
「たしかにあの戦いの後はそうじゃった。仲間を失った絶望感を含め、どうにかなりそうじゃった。じゃが、いくら嘆いたところで過去はなかったものにはできん。前に進むしかないじゃろう」
「う、ううう」
ボクはマンジイの話を聞き流しながら、近くの木にもたれながら地面に倒れた。
訓練をする気はなれず、ただ震えるだけの時間を過ごすことになった。

第六話「ボクが日本で歩んだ道」

「よし、そろそろ行くかな」
マンジイからレベルフォーの話を聞かされた翌日、ボクは立ち上がっていた。
昨日と同じように筋力トレーニングと走り込みをこなし、さらには新しく手にレた鉄パイプの素振りも行った。
それはもう昨日さぼってしまった分を取り戻すかの如く、汗びっしょりになってうちこんだ。
これに対し、マンジイは驚いた表情で話しかけてきた。
「こんな雪原でそこまで汗びっしょりになるとはの。一体何があったんじゃ？　あんなにレベルフォーに震えておったのに」
「え？　マンジイが言ったんじゃないですか。前に進むしかないって」
「それはそうじゃが、一晩でレベルフォーの恐怖を払拭したというのかの？」
「いえ、今でも内心では死ぬほどびびってますよ。でも、いくらびびったって何の進展にもならないって分かりましたから」
「そ……　うか」
「マンジイ？」
「いや、いいんじゃ。続けながら聞いてくれ」
マンジイはその場に座り込み、ボクが九割の確率で逃げ出すと思っていたと語った。
それは何もボクを軽視していたからではない。
今まで弟子にした者たちがみんな逃げ出す道を選んだからだという。
「ある者は訓練の厳しさに耐え切れず、ある者はレベルフォーの話に怖気づき、一カ月もせずに行方をくらましおったよ」
「逃げたとして、その後はどうするっていうんです？」
「お前さんも見たかもしれんが、どこぞの店に奉公するという手がある。まぁ、奴隷のようなひどい扱いを受ける事にはなるじゃろうが、

一定の安全と生活は保障される」
「いくら保障されたって、日本に帰る事には何も直結しないじゃないですか。それじゃあ、意味がないんです」
「フム。お前さん、どうしてそこまで日本にこだわるんじゃ？　レベルフォーの恐怖を押しのけてまで帰ろうとする理由は何なんじゃ？」
「捜している男がいるんです。そいつはボクの人生を滅茶苦茶にして今も逃げ回っているんです」
「よかったら、くわしく聞かせてくれんかの」
「そうですね。話せば少しは気が楽になるかもしれませんしね」
ボクは鉄パイプを置いて座り込み、封印していた忌まわしき記憶を話し始めた。
はじまりは四十二年前の十二月二十六日。
この日、ボクはサイタマにあるニシ家の長男として生を受けた。
父親はエリートサラリーマンで、十分な経済基盤を持っている。
本来なら親子三人での、何不自由ない楽しい毎日がはじまるはずだった。
しかし、翌年の秋、母はまだ一歳にもならないボクを置いて家を出ていった。
父はそれがボクのせいだと言わんばかりに冷たく当たるようになり、家庭環境はみるみる悪化。
暴力や罵倒は日常茶飯事で、情愛の絆なんて欠片もない。
それはボクが成長していろいろ理解できるようになってからも同じで「ブタが。お前は本当に太る才能を持っているな。それなら、何も持たない人間の方がまだマシだ」や「気持ち悪い顔しやがって。面をかぶるくらいの気づかいをしろ」など聞くに堪えない暴言が家の中を飛び交い続けた。
父はあくまで厳格で少し口が悪いだけの人間。
そう自分に言い聞かせながら、ボクは耐え続けた。
しかし、高校二年の夏、久しぶりに会った伯父から非情な事実を聞かされた。
実は、ボクの父は息子よりも娘が生まれる事を切に願っていたとい

うのだ。
理由は、仲のいい会社の重役との間に「娘が生まれたら息子さんに嫁がせる」という約束があったから。
早い話が重役と親戚関係になるための政略結婚を企んでいたのだ。
しかし、生まれてきたのは男であるボクだった。
その時の父の落胆ぶりはそうとうなものだったという。
さらに追い打ちをかけるように、少し後に生まれた同期の娘に座をとられてしまい、目論見は完全に破綻。
そのせいで、母は父の八つ当たりに近い暴力を受ける羽目になったという。
妊娠中には「必ず女の子を産め」と過度なプレッシャーをかけられ続けたせいで、精神面もすでに限界に近い状態。
そして、とうとうボクを置いて逃げる道を選択してしまったのだ。
これを聞いたとき、ボクは頭の中がカアッとなり、父と大喧嘩した末に家を飛び出していた。
自分は愛されてなどいなかった。
ただくやしくてくやしくて涙が止まらなかった。
しかし、悲しんでなどいられない。
家を出た以上は自分の力で生きていかなければならないのだから。
仕事を求めて歩くも、何の資格も長所もないボクを雇ってくれるところなどなかった。
所持金はあっという間に底をつき、炊き出しやデパートの試食コーナーで何とか食いつなぐ生活が一年近く続いた。
その末にようやく熱意が認められて就職できたのが、町の小さな金属加工場だった。
最初は慣れない作業に戸惑って失敗する毎日だったが、少しずつ経験を重ねて成長していった。
勤続二年を迎えるころには上司からも信頼され始め、やがて正社員になり、暗かった人生にようやく光が差し始めた。
その後は忙しくも充実した毎日を送れるようになった。
勉強して資格をとろうという余裕も生まれ、一緒に切磋琢磨する親

友もできた。
ボクより三つ年下の小柄な男で、名はカツキ。
最初は仕事の休憩時間に話すだけの仲だったが、やがて休みの日にも一緒に遊ぶほどの仲になった。
そのおかげで人脈も広がっていき、合コンなどにも参加できるようになった。

数合わせのため程度にしか思っていなかったが、何と三回目でめちゃかわいい女子大生の彼女をゲットすることに成功した。
ブサイクな容姿のせいで一生独り身だと思っていただけに、喜びは計り知れなかった。
交際して半年ほどたったころには夢のような同棲生活もはじまり、ボクは三十五歳にしてはじめて家族の温かさに近いものを手に入れたのだ。
このままいけば、三十台で結婚して親になる事も夢ではないかもしれない。
そう思った矢先、事件は起きてしまった。
カツキが不良中学生たちにからまれ、瀕死の重傷を負わされてしまったのだ。
命は助かったものの、完治するまでに時間を要し、もちろん仕事に出る事はできない。
そして、とうとう会社から解雇を言い渡されてしまったのだった。
かわいそうだが、会社の経営状態は苦しく、すでに後釜となる新人が入ってしまったため、どうにもならないのだった。
ボクはカツキを不憫に思い、何とか力になろうと決心した。
まずは貯金をくずして生活費として渡し、再起するまでのサポートをすることにした。
しかし、それがいけなかったようだ。
カツキは新しい仕事を探そうとする様子もなく、すっかり怠け癖がついてしまった。
しかも、何かと理由をつけてボクにお金を借りに来るようになり、

まじめだったころの面影はなくなっていった。
このままではカツキはダメになってしまう。
ボクは少し戸惑いながらも注意をし、これ以上はお金を貸せないと伝えた。
だが、決して突き放したわけではない。
求人情報を持って行ったり、相談に乗るなどして別の形でサポートを続けるつもりだったのだ。
しかし、カツキはボクを冷たい人間だと誤認したようで、仏頂面をして帰ってしまった。
そして、とうとう運命を分けるときは来てしまう。
十二月の寒い夜、ボクは一人で仕事場に残り、やりこのしていた仕事を片付けていた。
その途中、ふと時計を見たときに窓の向こうが少し明るくなっているのに気づいた。
すぐに外に出て確かめてみると、向かいの事務所の電気がついており、かすかに何かが動くような音も聞こえた。
その時点で泥棒が忍び込んでいるという確信はあったが、下手に突っ込んだりすれば命が危ない。
そこで警察に通報した後、仕事場に戻って武器になりそうな物を探そうとしていると、犯人が窓を開けて飛び出してきた。
ボクは勇気を振り絞り飛びかかるも、難なく避けられ、突き飛ばされてしまった。
それでも何とか奮闘して捕まえようともみ合いになるが、途中からショックで体が固まってしまった。
何と、犯人はカツキだったのだ。
信じたくはなかったが、二十年も付き合いのある親友の顔を見間違えるわけがない。
残酷だが、受け入れるしかなかった。
その後は力なく来た道を戻り、事務所内が滅茶苦茶に荒らされているのを目の当たりにした。
金庫は無理やり開けられており、中に入っていた金品はすべてなく

なっていた。
そして、本当に苦しいのはここからだった。
ボクは駆け付けた警察に任意同行されて犯人の話をすることになったのだが、あろうことか容疑者として扱われた。
理由は、事件の前日にボクの住んでいるアパートの近くに強盗を企んでいる者がいるというタレコミがあったから。
もちろん何のことだか分からなかったが、それを証明する方法はない。
結局はほとんど話を聞いてもらえず、刑事さんに大声で威嚇されたり、近くのイスを蹴って脅されたりして長時間にわたって苦痛を味わう羽目になった。
そして、疑いを晴らすこともできずに仕事場に戻ると、今度は社員たちによる疑いの目に苦しむ事になった。
あまり話したことのなかった人たちはおろか、上司や仲のいい後輩にまで「正直に話した方がいい」とか「今だったら社長に一緒に謝ってあげるよ」と言われる始末。
実を言うと、このときすでに仕事場にまでボクが犯人であるかのようなタレコミが流れていたのだ。
おそらくはすべてカツキの仕業だ。
お金を盗むだけでは飽き足らず、罪をボクになすりつけようという魂胆に決まっている。
しかし、カツキ本人は事件後にボクから逃れた後で行方をくらましたため、冤罪だと証明する事はできなかった。
打つ手のないまま時間だけが流れていき、ボクは仕事場で犯罪者のレッテルを貼られいじめを受け始めた。
それでも、いつか冤罪だと証明されると信じてがんばったが、事件から一年を迎えた日に社長から「お前みたいなやつがいたらうちのイメージが悪くなるから」と涙ながらに訴えられ、半強制的に退職させられてしまった。
その頃から彼女との関係もどんどん冷めていき、とうとう一方的に別れを切り出された。

ボクは何とか思いとどまるように言うも、彼女は「本当だったら、あんたみたいなブ男が女の子と付き合えるほど世の中甘くないのよ！
今まで一緒にいてやっただけありがたいと思いなさいよ！」と言って物をいくつも投げつけ、出て行ってしまった。
その後、わらにもすがる思いで訪ねた父親からは「こんな事になるくらいなら生まれたときにお前を殺しておけばよかった」と言われてたたき出された。
さらに、それなりに親交のあった伯父といとこからは「二度と顔を見せるな」と門前払いされた。
もはや、言葉にできなかった。
ボクは四十歳にして、仕事も信頼も恋人もすべて失ったのだ。
絶望のあまり、死んでしまおうとも考えた。
しかし、このまま死んでしまえば完全な犬死だ。
せめて、カツキを探し出して復讐を遂げなければダメだ。
その怒りの気持ちを原動力にして、ボクは残りの人生を生きていくことにした。
職を転々としながらも一日一日を必死に使い、ひたすら前に進んだ。
ここまでの話を終えたとき、ボクは鉄パイプを握りしめて興奮状態になっていた。
マンジイはその様子をしばらくじっと見つめた後、静かに口を開いた。
「辛かったじゃろうの、本当に」
「分かってくれるんですか？」
「うむ。付き合った時間は短いが、ワシは人を見る目はあるつもりじゃ。お前さんは盗みを働けるような人間ではないじゃろ」
「あ、ありがとうございます、マンジイ」
ボクは少しずつ落ち着きを取り戻していった。
事件について、何かが大きく進展したわけではない。
だが、少しだけ救われた気持ちになったのは確かだろう。
「一人でも信じてくれる人に会えるなんて。あの地獄を生き抜いて本

当によかっです」
「まったく。冤罪というのは世の中の不条理の象徴と言えるじゃろうの。裁かれるはずの悪人の罪を何の関係もない善人が肩代わりせねばならんのじゃからの」
「ええ。でも、ボクは逮捕されたわけではないし、無実を証明するためのチャンスはまだ残っている。だがら、ここで死ぬわけにはいかないんです」
「うむ。その気持ちがあれば、必ず強くなれるはずじゃ」
「はい。これからもどうかよろしくお願いします」
ボクは鉄パイプを握りしめ、訓練を再開した。
でも、内心はさっき話したように恐怖でいっぱいだった。
何しろ、これからは死に物狂いでデビレンたちと戦っていかなければならないのだから。
それが終わって日本に帰れたとしても、待っているのは所持金も仕事もないゼロからのスタート。
そして、カツキを見つけ出すまでは濡れ衣は着せられたまま。
果てしなく長い道のりだと言えるだろう。
しかし、その先には必ず本当の幸せが待っているはずだ。
その光に満ちた光景を思い浮かべながら、ボクは体を動かし続けるのだった。

第七話「毒使いとの激戦」

「そ、そろそろ、きつくなってきたな」
マンジイに過去を打ち明けた翌日の朝、ボクはようやく訓練の手を止めていた。
鉄パイプを握り続けた手はマメだらけで、目はかすみ、足はふらつく。
しかし、確実に強くなったという事だけはたしかだ。
その後に行ったマンジイとの手合せでは先制攻撃を鉄パイプのガードで防ぎ、負けはしたが以前よりは善戦する事が出来た。
「はぁ、はぁ。やっぱ強いですね」
「なかなかいいガードじゃった。訓練直後というのを考えれば、かなりいい動きじゃったぞ」
「ほ、ほんとに！　や、あ、でもまだ喜ぶような段階じゃないですよね？」
「うむ。奢らぬように自分を戒める事が出来るようになるのも成長のあかし。これから起こる戦いでもそれを忘れんようにの」
マンジイは持っていた缶の中からドロップのようなものを取り出し、ボクに渡した。
訓練のご褒美というわけではなく、これから起こる戦いで必要なものらしい。
口の中に入れてみると、げっそりするような苦みが駆け巡り、舌の感覚がなくなっていった。
すぐにでも吐き出しそうな勢いだったが、涙と汗をたらしながらなんとか耐え抜き、飲み込んだ。
「う、ふぐおっ。ぶ、はふ、はぁ」
「それはワシが調合した特性の解毒剤じゃ。これから一時間くらいの間、体内に入った毒を無害なものに変える作用がある」
「毒？　危ない場所にでも向かうんですか？」
「場所なんて動かないものなら、楽でよかったんじゃがの。それよりも厄介なものじゃ」

マンジイによると、これから向かう場所には強力な毒を使う敵が待ち構えているのだという。
先へ進もうとして餌食になった者が後を絶たず、この辺ではちょっとした噂になっているのだそうだ。
当然、デビレンによるものだと思われたが、犯人は何とれっきとした人間。
どうやら、デビレンの悪事に加担する忠実な下僕として動いているのだという。
「この手の人間は決して少なくない。特にデビレンの驚異的な力に魅せられて堕ちていったものはの」
「まぁ、デビレンの存在が大きすぎて忘れてましたけど、どこの世界でも悪い人間がいるのは当り前ですよね」
「まったく。人間たちが一致団結してデビレンたちと戦っていかねばならんというのに、嘆かわしい事じゃ」
話ながら歩いていると、さっそく異様なにおいがしはじめた。
ボクは鉄パイプ、マンジイは槍を装備し、すぐに臨戦態勢をとった。
すると、直後に痩せ型の若い男が現れ、巨大な銃で殴り掛かってきた。
マンジイはそれを的確にガードしながら耐えた後、ボクの手を引いて後退した。
「お前さんか。デビレンに加担しておるホサカとかいう毒使いは」
「フフ、俺も有名になったもんだな。知っているんなら話は早い。俺と来る気はないか？」
「仲間になれという意味かの？」
「ああ。今までここを突破しようとやってきた連中はさっきの先制攻撃であっけなくやられたが、あんたは難なく耐えた。けっこうな手練れのようだから殺すよりは仲間にしてやろうと思ってよ」
「バカにするでないぞ。デビレンに手を貸すくらいなら腹を切った方がマシじゃ」
「フン、そうかよ。高齢者虐待は趣味じゃねぇが、仕方ねぇな」

「やる気のようじゃの。ニシくん、指示をやるまで下がっておれ。さっきの攻撃を見る限り、奴の実力はレベルスリーのデビレン以上じゃ」
「わかってんじゃねぇか。じゃあ、この後、どうなるかも分かるよな！」
ホサカは巨大銃から毒液をドバッと放出した。
マンジイはそれをさっとよけると、槍で反撃を開始した。
この槍は長さ、角度が変化する機能もあると聞いているので、距離をとりつつ、防御も同時に行えるはず。
すぐに毒液と槍の激しい攻防戦がはじまった。
ホサカは毒液を広範囲に連射し、対するマンジイは槍を回したり伸ばしたりで防ぎつつ、反撃する。
互角に見えたが、マンジイの方にやや余裕があるようだ。
ホサカは使えば使うほど中の弾を消費するだろうが、マンジイの方は槍なので何も消費するものはない。
焦り顔のホサカは別の弾を補充したのち、大量の毒液をとばした。
これはさすがに槍でガードしきるのは難しい。
だが、マンジイはさらに槍を長く伸ばして円を描くように自分を包み込み、完璧に毒液をガードしてみせた。
続けて体を回転させながら槍を戻してホサカめがけて伸ばしていき、突き刺した。
ホサカは流血しながらうずくまり、勝負は決したと思われた。
しかし、マンジイの槍はその後も伸びたまま、ぴくりとも動かなくなった。
「ど、どうなっとるんじゃ。ん？」
「はっはっは、引っかかったな」
ホサカは槍の先端を手でつかんだまま立ち上がり、巨大銃から毒液を垂れ流した。
それは伸びた槍をつたいながら、みるみる前進していく。
マンジイは何とか回避するも、槍を奪われてしまった。
「はぁ、はぁ。何たる不覚じゃ」

「フフ、これで戦力半減だな。ああ、そうだ。種明かししておくと、さっきのあれは俺の血じゃねぇ。これだ」
ホサカが見せたのは、ビニールに入った大量のケチャップだった。
つまり、槍が到達する寸前にケチャップを命中予想箇所に集中させ、槍の威力を弱めると共に大量に血液が出たと思わせる。
そして、マンジイが勝ったと油断したスキに槍を奪い取るつもりだったのだろう。
さすがのマンジイも遠距離からではケチャップと血液の区別がつかなかったようだ。
「年を取ったようじゃの、ワシも」
「わかってんじゃねぇか。さて、もう出し惜しみは必要ねぇな」
ホサカは巨大銃から毒液と毒ガスを発射した。
息をとめたまま、毒液を必死に避けるマンジイだが、毒ガスは目や皮膚からもしみこんでいるようだ。
「く、が、が」
マンジイはすばやく後退すると、ホサカとの距離をとった。
その際に毒液を少し吸い込んでしまったらしく、ボクが駆け付けたときには真っ青な顔をしていた。
「はぁ、はぁ。頭がくらむ。解毒剤の効果が切れていたようじゃの。いや、それ以前にワシの解毒剤では完全には奴の毒を無毒化できておらんようじゃ」
「げ、解毒剤が効かないなんて、ど、どするんですか。こんな状態でホサカに追いつかれたら……」
「あ、慌てるでない。少し雑じゃが作戦を考えた。よく聞くんじゃぞ」
マンジイは作戦内容を手短に説明した後、ボクから離れた。
こうなっては、もうやるしかない。
ボクは鉄パイプを握りしめ、迫っていたホサカの前に飛び出した。
「あ、ははは。どうも」
「何だ、デブ。今度はお前が相手をするってのか？」
「う、うううう。ああ、そうだ。く、くるならこい」
「フン、ブタ野郎が。すぐにオロして肉屋に売り飛ばしてやんよ」

ホサカは巨大銃の後部から紫色の針を連続で飛ばしてきた。
ボクは鉄パイプで必死にガードしようとするも、あえなく失敗。
腕と腹に針が突き刺さり、倒れてしまった。
「うー、うー」
「その針にも強力な毒が仕込んである。さぁて、苦しませるのもかわいそうだし、すぐに楽にしてやるか」
「ひ、ひゃふれふあすら」
「はっはっは、とうとう頭にまで毒が回ったようだな。けっさ、ん？うお！」
突如、ホサカは横へと向きを変え、接近してきたマンジイを迎え撃った。
ぎりぎりだったが、うまくいったようだ。
ホサカはすぐに懐から解毒剤を奪われた事に気づいたようだが、すでに後の祭りだった。
「な、なぜだ。なぜ、俺が解毒剤を持っているなんて分かった？」
「お前さんの使っている毒は自分の力ではなく、武器の力。耐性などないじゃろうし、万が一の時のために持っていると思ったまでじゃ。隠している場所はさっきの戦いでお前さんの動きをよく見て見当もついていたしの」
「うう、くく」
「毒で弱ったワシの体力ではスキを見て奪い取るのは無茶じゃったが、別の何かに目を向けさせておけば、そのスキを利用できる。ニシくん、よくやってくれたの」
「ああ、はは」
「さて、仕上げといこうかの」
マンジイは解毒剤をボクに飲ませた後、残りを飲み干し、戦闘を再開した。
一方のホサカは解毒剤を奪われた動揺からか、かなり焦っている様子だ。
やけっぱちといわんばかりに毒攻撃を連発した挙句、飛び散った毒液を両足にくらい、転倒。

そのときに落した巨大銃が衝撃のせいか暴発し、毒ガスが噴き出した。
ホサカは毒液と毒ガスにより、ほぼ自滅に近い形で敗れる事となったのだった。
「う、ぐぐ」
「もう少し、毒を自分がくらったときの対策を考えておくんじゃったな」
「マンジイ、彼をどうするんですか？」
「この先にある換金所に引き渡す。生け捕りが基本という以外はという他はデビレンと何ら変わりない扱いじゃ。種族が違うというだけで悪に変わりはないのじゃからの」
「う、うう。ちくしょう、こんなジジイと肥満野郎に。う、あ、あああああ！」
突如、ホサカが胸を押さえて苦しみだした。
その直後にブザー音のよなものが鳴り響き、黒い魔法陣のようなものが出現した。
おそらくは、ホサカの体内に何らかの仕掛けが施してあったと考えられる。
「あ、ぐぐぐ」
「ま、マンジイ。どうします？」
「気の毒じゃが、ワシらにはどうする事もできんよ」
「う、ち、くしょう。日本に帰りたかった。みんなに……　あ、い」
ホサカは懐から一枚の写真を取り出し、口をパクパクとさせた後、絶命した。
マンジイはそれを見届けると、合掌しながら静かに口を開いた。
「哀れな男じゃ」
「マンジイ、さっきのって家族に別れを告げてたんでしょうか？」
「おそらくの。奴もおそらくはお前さんと同じで不本意な形でこの世界にきたんじゃろうの」
「ぐ」
「じゃが、デビレンに加担して多くの冒険者たちを殺めたのも事実。

自分の幸せのために他の誰かを不幸にするなど許されるもんじゃないよ」

マンジイの言う事は至極もっともだ。

しかし、デビレンに加担するしか生きて日本に帰る道がない状況だったら、ボクならどうするだろうか。

命と引き換えにしてでも、まっとうに生きてきた人間としての誇りを守り切れるだろうか。

答えはすぐには見つかりそうもなかった。

第八話「砂丘の過酷な大連戦」

「はぁ、本当にもう進むんですね」
「大半の店の異常な物価を見たじゃろう。贅沢の虫が起こらんうちに去るのが一番じゃ」
　ホサカとの戦いの翌日、ボクとマンジイは立ち寄った村でデビレンたちを倒した報奨金を換金所で受け取った後、すぐに先にある砂丘に入っていた。
　そのちょうど十分くらい後、今まで武器として使っていたボクの鉄パイプが消滅した。
　これは前に言われた通り、本来の持ち主であるデビレンが処刑されたという事なのだろう。
「あーあ、せっかく使いこなせるようになってきたのにな」
「ま、消えてしまったものはしかたあるまい。それよりも今度はこれを使ってみてはどうじゃ？」
　マンジイは、やや小型のハンマーをボクに差し出した。
　予想はしていたが、鉄パイプよりもずっと重い。
　つまり、鉄パイプから機動力を抜いて、逆に破壊力をプラスした武器といったところだろう。
「これも魔性具の一種なんですか？」
「うむ。鉄パイプが消えたときのためと思ってあらかじめ確保しておいた。戦えそうかの？」
「そ、そうですね。まぁ、雑兵程度の相手なら難なく倒せると……思います」
　なんて軽口を叩いていると、ジープに乗って武装したデビレンたちがぞくぞくとやってきて、ボクたちを取り囲んだ。
　先頭にレベルスリーが一人いるだけで他は雑兵ばかりのようだが、その数はざっと百人以上はいる。
「ちょうどよかったじゃないか、ニシくん。戦ってさっき言った事を証明するチャンスじゃぞ」
「え、でも、この数は……」

「何をぐだぐだ言ってんだ、人間ども。さぁ、どっちからやってほしいんだ！」
「い、いや、ボクは」
「あ、そうじゃ。この男、言うとったぞ。お前さんらより自分の方がずっと強いっての」
「ま、マンジイ、何言うんですか！」
「あれ、なんじゃ？　さっき言った事はやっぱうそじゃったのかの？」
「そのブタみたいな男がが俺たちより強いだと。言うじゃないか、だったら今からそれを見せてもらおうじゃないか」
魔性具をかまえたデビレンたちが大勢でボクに向かってきた。
ボクは青ざめていたが、やらなければやられると本能で察知し、意を決してハンマーを手に迎え撃った。
マンジイはその様子をじっくり観察する。
「そこそこ戦えるみたいじゃの。相手が大勢である事を考えれば割といけてる方か。じゃが」
「う、ぐ」
ハンマーによる攻撃は破壊力がある分、機動力に欠ける。
ボクの攻撃は鈍足過ぎてよけられたり、スキをつかれて反撃されたりする場面が多々あった。
「はぁ、ぐっ」
「どうした、ブタメガネ！　休憩するにはまだはやいぞ」
「ううう」
体力の限界からボクはしだいに押され始めた。
さらに後方ではボーガンや銃を持ったデビレンたちがボクに狙いを定めている。
ここでようやくマンジイも参戦し、後方のデビレンたちを蹴散らした後、レベルスリーのデビレンと戦い始めた。
「さぁ、ここからじゃぞ」
「はっ、ジジイなんぞに負けるかよ」
レベルスリーのデビレンは、部下たちを盾にしながら数を生かした戦法で攻め続けた。

しかし、直接戦闘力は大したことないのか、部下たちがやられていくにつれて劣勢になっていった。
その後はボクの方に狙いを変えてきたが、背を向けたスキを突かれ、マンジイの槍で倒されてしまった。
「う、くそ」
「手配書が出回っていないという時点で実力はお察しじゃの。部下たちにたよりすぎじゃ」
「ま、マンジイ。や、やりましたね」
「うむ。で、さっそくじゃが、さっきの戦いの感想言っていいかの？」
「え？」
「まぁ、甘めに判定して二十点ってとこじゃな。少なくとも雑魚の域を出ていない」
「な、なんでですか！　二十人くらいは敵を倒したはずですよ」
「うむ。じゃから二十点」
「そんな適当な判定ないでしょう。もっとどこがどう悪かったか教えてください」
マンジイが指摘したのは次の箇所だった。
まず、近くの敵ばかりに目がいっていて、遠くの敵に対して注意力散漫であったということ。
次に、敵に攻撃をヒットさせても、その後のスキが大きすぎて反撃を受けやすいということ。
最後に、動きに無駄が多いためか、体力を必要以上に消耗してしまっているということだった。
「まぁ、他にも言いたいことはあるが、まずはこの三つじゃの。そもそもお前さんにハンマーは向いてないのかもの」
「まぁ、それはね。少なくとも使いやすいとはいえなかったし」
「考えてみれば、捕縛でもいいという点を考えれば、相手を必ずしも絶命に追い込む必要はないわけじゃから、もっと振りやすい武器で十分じゃろうの。たとえば」
ちょうどこの場には、倒したデビレンたちの武器が散乱している。
この中からボクの専用武器にふさわしいものを探すことにした。

「そうじゃの。ある程度リーチがあって、小回りがきいて」
「重すぎないやつがいいよな。持ち歩くの大変だし」
「これこれ、横着言うでない。ん？　う、む」
「な、何こわい顔してるんですか。さっきのは冗談ですって」
「気のせいかの」
「あ、マンジイ。向うから誰か来ます」
「ん？」
　大勢の部下たちを引き連れて現れたのは、レベルスリーと思われる細目の男と厚化粧した女だった。
　たしか、前に立ち寄った換金所に手配書が貼ってあった気がする。
「男の方がボチャ。女の方はバヤンバ。そこそこ名の知れた奴らじゃ。少なくともさっきの奴よりは甘くないじゃろうの」
「れ、レベルスリーが二人も。さっき戦闘したばかりなのに」
「先に着いた連中は全滅か。いいさ、この結果が何を意味するのか分かっていてやったんだろうからな？」
「ボチャ、バカな事お言いでないよ。こいつら人間に物事を考える頭なんてあるわけないでしょ」
「う、うう」
「おい、ニシくん。びびっているヒマはないぞ。前の二人はワシが相手するから残りの雑魚はなんとかしろよ」
「え？　でも、どの武器を使えば……」
「知るか！　自分で考えろ！」
「そ、それはないでしょ。あーもー、こうなったら」
　ボクは足元に落ちていた槍を拾い、向かってきたデビレンたちと戦った。
　前の戦いの傷が癒えておらず、また複数の敵を相手にしなければならないのは辛かったが、泣き言は通らない。
　がむしゃらに大玉が転がるような勢いで槍を振り回し、敵を蹴散らしていった。
「やらなきゃやられるだけだ。こうなったら限界まで戦い抜くまでだ」

生存本能の強さが満身創痍のボクの原動力になっていた。
一方、その横ではマンジイがボチャとバヤンバに追い詰められていた。
「はぁ、はぁ」
「なんだ、弱いじゃないか。こんな奴にあのバカたちは負けたのか」
「う、むむむ」
ひざをつくマンジイを取り囲むボチャとバヤンバ。
ボチャは黒火をまとったトンファー、バヤンバは黒火をまとった拳で同時にマンジイに襲い掛かる。
マンジイは火傷を覚悟で両手で受けきるが、直後にがらあきになっていた腹部にバヤンバの蹴りをくらってしまう。
「ぐうっ」
ひるんだマンジイに上からボチャのトンファーの一撃が炸裂。
とうとう、マンジイはダウンした。
ボクは頭や背中に傷を負いながらも周りの敵を一掃し、何とか加勢に向かった。
「マンジイ。またボクを試しているんですか？」
「う、い、いや、今回は演技ではない。ホサカ戦でのダメージがまだ消えてなかったようじゃ。それだけならまだしも、最近メシを抜くことが多かったからの。くそ、なさけない。たかがこれくらいのハンデで」
「さんざん俺らをこけにしてくれたな。さぁ、とどめだ」
「ま、待て。その前にボクがあ、相手だ」
「そうか。まぁ、いい。どうせこいつの次にはお前を消すつもりだったからな。しかし、部下たちを一掃するとはなかなかやるじゃないか」
「へん、あんたたちもすぐにああなるんだよ。クズデビレン共が」
ボクはもうすでに分かっていた。
今の自分の実力と状態ではボチャたちには決して勝てないという事を。
だからこそ、せめて最後に言いたい事だけ言って散る事を決めたの

だ。
「さぁ、来い」
「なぁ、さっき、クズと聞こえたようだが、聞き間違いじゃねぇよな？」
「ああ、聞き間違いじゃないよ。もっと言ってやる、クズクズクズ！」
「遺言はそれだけでいいんだな？」
ボチャはトンファーで力強くボクに殴りかかった。
ボクも血がにじむくらい力強く槍を握りしめ応戦するが、押し負けてしまう。
そのままトンファーの一撃を頭部に受けたボクは押し倒され、タコ殴りにされた。
「げ、ぐ」
「蚊に刺された時の気持ちを思い出すよ！　格下にコケにされるとどんだけやり返しても気が晴れないもんなぁ！」
「へへへ。なんだ、ボチャ。くやしいのかい？」
「まだ言うかぁ！　ん？」
「かーっ！」
いきなり、横からマンジイが殴り掛かってきた。
口からは黒い物体が半分出たような感じでぶらさがっている。
何と、それは砂丘に生息するサソリたちだった。
「フン、腹が減っていると案外これもいけるもんじゃの」
「何てジジイだ。サソリを生で食うとはデビレン顔負けの悪食ぶりだな」
「選り好みできる状況じゃないじゃろ。さぁ、腹さえへってなけりゃお前さんなんかに負けはしないぞ」
たかがサソリ数匹を口にしただけでと思われたが、マンジイの動きはさっきまでとはまるで違った。
トンファー攻撃はことごとくかわして攻撃し、黒火を生成するスキすら与えない。
それでも激高はせず、一旦距離をとろうとしたボチャだったが、直後にマンジイが投げた何かに右手を刺され、トンファーを落としてしまう。

「ぐっ。これは」
「さっき除去したサソリの尾じゃ。使えるもんは何でも使わないとの」
マンジイは即座にボチャの眼前にせまると、トンファーを遠くへ蹴り飛ばし、威圧した。
「お前さんの負けじゃ」
「う、うう」
「ちっ、これまでのようね」
傍観状態だったバヤンバは退散していった。

しかし、ボチャは立ち上がり、黒火を全身にまとって前進してきた。
正直、レベルスリーの技量でこんな使い方をするのは自殺行為といえたが、彼に迷いはないようだった。
「デビレンが人間に負けるなんて事があっていいはずがない！　勝てないなら刺し違えてやる！」
「ほう、敵ながら大した覚悟じゃの」
マンジイはあえて距離をとりながら時間をかせぐ戦法はとらず、真っ向からボチャとぶつかり合った。
多少の火傷はお構いなしにボチャに向けて拳をふるい続けた。
それにこたえるかのように、ボチャはさらに全身にまとった黒火を増大させるのだった。
周りを焼き尽くすかのような黒火が周りに広がっていく。
ボチャはその勢いを保ちつつ、マンジイにつかみかかった。
マンジイを確実につかんだ時点でさらに黒火を増大させ、共倒れするつもりなのだろう。
「く、たばれ、ジジイ」
「あ、わわわ。マンジイ」
「あちち。まったく無茶しやがるの」
「フフ、この距離でもこの火力にひるまないとはな」
「この程度の熱さは経験済みなのでの」
マンジイはボチャの強力な黒火に耐えつつ、絶対につかまれないよ

う応戦した。
　そして、ボチャの死角に入った一瞬のスキをつき、背中に渾身の蹴りをあびせた。
「ぐう、まだ倒れんか」
「はぁぁぁ、あああ」
「背中はバキバキに折れたはずじゃがの」
「お前は危険すぎる。絶対にこの先には進ませない」
　不敵な笑みをうかべながらマンジイに歩み寄るボチャ。
　それでも向かっていこうとするマンジイだったが、その前にボチャはついに力尽き倒れた。
　しかし、ボクもマンジイもすでに満身創痍の状態。
　村へ引き返したところで、またデビレンたちに遭遇する可能性は否定できず、先に進むしかなかった。

第九話「束の間の平穏と新しい武器」

「はぁ、はぁ。マンジイ、しっかりしてください」
「う、うむ」
ボチャたちとの戦いから三日後の朝、ボクとマンジイは息切れしながら砂丘を進んでいた。
デビレンとの戦闘回数は今日だけで三回。
おそらく、デビレン側は砂丘という場所が人間たちにとって体力を消耗しやすいと分かっていてやっているのだろう。
それが分かったところで、現状ではどうにもならないのだが。
「はぁ、こんな異常な遭遇確立じゃ身が持ちませんよ。あとどれくらいで砂丘を抜けられるんですか？」
「そうじゃな。少なくとも半日以上は、う、うう」
「え？　どうしたんですか？」
「すまん。持病の腰痛が」
「はぁ、マンジイ、腰痛持ちだったんですか！　しかもこんなタイミングで」
ボクはどうしていいか分からずパニックになった。
その様子を遠くから一人のおばあさんがじっくりながめていた。
「ふーむ。そこのお二人、ちょっといい？」
「ん？　誰じゃ、ばあさん」
「すぐそこの町に住んでいる者よ。さっきの戦い見てたわ。あなたたち強いじゃないの」
おばあさんはなにやら渡したい物があると続け、ボクたちを近くの町へと案内した。
その町は、ここからしばらく歩いたところにある大きな町だった。
砂丘を旅する人が多く立ち寄る休憩地点ともいえる場所なのだという。
ボクは、手厚い施しを受けられるかもとわずかな希望を胸に足を勧めたが、町へ着いた途端に驚愕した。
町はすでにデビレンたちの手によって壊滅させられていたのだっ

た。
どこを見渡しても、周りは破壊された建物ばかり。
さらには血や骨の一部のようなものも散乱し、まるで地獄絵図だった。
「こりゃひどいの。まるで戦争でもあったようじゃ」
「あの、ほかに人は？」
「私一人よ。まぁ、うちにおいでよ」
おばあさんは町はずれにある自宅にボクたちを案内した。
すでにそこも無残に半壊させられていたが、彼女は今もここに住み続けているという。
家の中もやはりひどい荒れようで、ここで起こった出来事が容易に想像できた。
ただリビングにかざられている写真だけが幸せな日々の記録を刻んでいた。
「ここに写っているのは、ばあさんの家族かの？」
「夫と息子夫婦と孫たちよ。みんな、死んだわ」
おばあさんは、この町で起こった惨劇を話してくれた。
すべてのはじまりは今から一か月前の早朝。
レベルスリーのデビレンが百人近い部下たちを連れて襲来。
町人対デビレンの激しい戦いがはじまったという。
しかし、この町は優秀な保安部隊が常駐していた事もあり、デビレン側はあっけなく退散。
それで一件落着かと思われたが、半日ほどたった後に今度は退散したデビレンの上官と思わしきレベルフォーのデビレンが三人で現れ、圧倒的な力で保安部隊を蹴散らしてしまったそうだ。
その先の話は本当に地獄だった。
強者たちを失い、逃げまどう町人たちの話、次々となぶり殺され吸収されていく町人たちの話。
おばあさんの家族が泣きながら逃げまどった末にとどめを刺される話。

どれも聞くに堪えず、つい口を押えてしまった。
「う、ぐぐ。す、すいません」
「ニシくん、気にせんでよい。こんな話を聞いて平然としていられる方が無理があるからの」
「あなたたち、さっきの話を聞いても、デビレンたちと戦い続けようとする気持ちは変わらないかい？」
「いや、変わった。よりやる気が出てきた。よけいに奴らを野放しにはしとけんじゃろうからの」
「ぼ、ぼ、ボクもです。はい！」
「そう。やはりあなたたちを連れてきてよかったわ」
おばあさんは立ち上がると、リビングの奥からボロボロの箱を持ってきた。
「どうぞ、開けてみて」
「あ、はい。あ、これは」
中に入っていたのは、棍棒、小刀、小銃の三つ。
パッと見はどこにでもあるような普通の武器だ。
だが、実際に手に取って見ると、まるで生き物を抱いているような不思議な感覚がした。
「おばあさん、これは一体？」
「右からパワー強化の棍棒ガドッグ、スピード強化の小刀ザクメル、体内の水分を冷気に変えて弾丸化する小銃イアチャ。すべて覚醒丸を使って作った特製の武器よ」
「覚醒丸？　たしか、人間の中に眠っている力を強制的に引き出す太古の石じゃな。まだ残っておったとはの」
「残っているといっても、もうこの武器だけよ。元々は保安部隊にいた息子が愛用していた物なんだけど、使ってくれないかしら？」
「そ、そんな大事な物もらえません。息子さんの形見なんでしょ？」
「私が持っていても宝の持ち腐れでしょ。憎いデビレンたちを倒すのに役立ててくれればこんなうれしい事はないわ」
「ニシくん、こんないい物をもらったからには、意地でも戦い続けなければならんの」

「ま、マンジイ、プレッシャーをかけないでくださいよ」
ボクはやや恐縮しつつ、三つの武器を受け取った。
はっきり言って、そうとうな重圧だ。
何しろ、この町で無念の死を遂げていった人たちの思いを引き継いでしまったと言っても、過言ではないのだから。
しばらくは震えが止まらず、呆然と立ち続けるのだった。
「あ、あ、りがとうございます。大事に使います」
「ええ。さぁ、今日はもう遅いし、うちでゆっくりしていきなさいな」
「それはありがたい。さすがにもう限界に近かったからの」
ボクとマンジイは数日間、この町で休ませてもらうことにした。
残金を気にせずに心置きなく休めるだけでもありがたかったが、何とおばあさんは食事まで用意してくれた。
近くの畑に残っていた野菜のスープと雑穀のようなものが一品だけだったが、ゲテモノばかり口にしていたボクにとっては十分なごちそうだ。
何だか、日本でのんびり暮らしていた頃を思い出して、ホンワカした気分になった。
しかし、ホンワカし過ぎて訓練の方もおろそかにしてはいけない。
五時間ほど休んだ後は表に出て、おばあさんからもらった三つの武器を使い始めた。
最初に手に取った棍棒ガドッグは使いやすくていい武器だった。
攻撃性能はもちろん、耐久性を生かしてガードにも利用できるし、どちらかといえばパワー型のボクには相性ぴったりだ。
強力な再生能力を持つレベルスリーのデビレンにも有効打になるだろうし、メインウェポンとして使っていけそうだ。
だが、強制的に力を引き出すという性質上しかたないともいえるが、使用後に両腕を襲う反動が半端ない。
そして、次に使った小刀ザクメルは身に着ける事で超高速移動が可能になるという武器で、スピードが極端に足りないボクにとっては優秀な補完要員といえた。
ただ、反動は棍棒ガドッグ以上に凄まじく、使用後はめまいと共に

倒れてしばらくは動けなくなる。
これは複数の敵を相手にしているときは、あまりに致命的過ぎる。
強力な武器ではあるが、実戦で使うには早すぎるようだ。
「はぁ、はぁ。反動はボク自身が強くなっていけば軽くなっていくはず。が、んばらないと」
ボクは反動に押されつつも、歯を食いしばり訓練を再開した。
その後はマンジイも加わり、夜明けまでひたすら体を動かすのだった。

「えっ、今夜ですか？」
「そうじゃ。別に何の問題もあるまい」
砂丘の町で訓練を始めてから五日後、ボクとマンジイは出発のめどを立て始めていた。
長旅の疲れもとれたし、これ以上いてはおばあさんに負担をかけてしまう。
まぁ、妥当な判断と言えるだろう。
「あまりここの暮らしに慣れ過ぎてもいけませんしね」
「その通りじゃ。それに実戦を長期間やらないというのも考え物じゃしの」
出発は日付が変わった直後と決まった。
ボクたちはおばあさんにその事を伝え、今までのお礼を言った。
おばあさんの方もボクたちに感謝していたようで、深々と頭を下げてきた。
「私はね、この数日間本当に楽しかったの。食事を作ってやったり、お話をしたりで、みんなが生きていた頃のようでね」
「おばあさん」
「それにね、私はあなたたちが来なかったら一人で敵討ちに行くつもりでいたの。かなわないと分かっていても、みんなを殺した奴らがのうのうと息をしているのがどうしても許せなくて」
「そうか。じゃが、あとはワシらにまかせればよい。せっかく拾った

命じゃ。捨てたりしたらバチがあたる」
「ええ。だから、あなたたちに命を救われたも同然ね。本当にありがとう」
「それで、これからどうすんじゃ？　これからもここに住み続けるのかの？」
「まぁね。ここはみんなが眠る場所だから、はなれるわけにはいかないよ」
「そうですか。お互い、がんばりましょうね」
明るさを取り戻した町で再会する事を約束して、ボクたちはおばあさんと別れた。
ボクたちはデビレンたちとの戦い、おばあさんは町の復興。
お互いに長く険しい道を進んでいくのだった。

第十話「海の怪物たち」

「あ、海だ」
「フー、やっとかの」
砂丘の町を出た約半日後、ボクとマンジイは広い海岸へとたどり着いていた。
長かった砂丘の旅はようやく幕を下ろしたのだった。
しかし、大変なのはここからも同じようだ。
海の中では、見慣れない生物が群れでぴょんぴょんと飛び跳ねながら泳いでいる。
手前には割れたオールのようなものが浮いているし、悪い予感しかしなかった。
「マンジイ、もちろん今からここを渡るんですよね？」
「そうじゃ。ここを進めばウドブという港町に着く。まぁ、三日はかかるじゃろうの」
「み、三日！　そんなに船の上に、うう」
ボクはがっくりと腰を落とし、よろめきながら倒れた。
というのも、昔から乗り物全般に弱く、すぐに酔ってしまう体質だからだ。
数分程度ならまだしも、三日も船の上にいるなど考えただけでゾッとする。
青ざめた表情でぐったりしている自分の姿が簡単に想像できた。
「あの、酔い止めとかないですよね？」
「何じゃ、お前さん酔いやすい体質かの？　残念じゃが、この世界での丸薬は一錠万単位が普通じゃ。まぁ、どの道こんな海岸で手に入れるのは不可能じゃがの」
「ですよね。ははは」
「心配せんでも、酔ったくらいで死にはせんじゃろ。ほれ、立つんじゃ。忙しくなるぞ」
マンジイは槍で近くの木を倒し、サクサクと削って形を整えていった。

それを組み立てて船が完成とか、そういう簡単な話ではないらしい。
組み立てた後は、底面に特殊な板を張り付けて補強。
さらに、水につからない部分をひどいにおいのする液でコーティングし、海生物が近づきにくいようにする。
そこまでやって、やっと海を無事にわたり切る確率がゼロから数十パーセントにまで上昇するらしい。
たしかに海の上で戦闘にでもなれば、陸上のようにはいかない。
バランスをくずして海へ落ちたりすれば、問答無用でエサにされてしまう事だってあり得るだろう。
「う、ここでエサにされるわけにはいかない。よし、やるぞ」
「やる気になってきたようじゃの。それでいい」
ボクたちは順調に作業を進めていき、夕方になってようやく船を完成させた。
見た目はしっかりしていたが、いざ乗ってみると何だか安定した感じがしない。
結局、そのまま出航する事にはなったが、船底が気になってどうも周りに集中できなかった。
「何か、ギシギシいってますけど、大丈夫なんですか？」
「それはお前さんが重いからじゃろ。何トンあるんじゃ？」
「トンって！　たったの百三十キロですよ。あ、いや、たったって事もないですけど」
「百三十の。まぁ、思っていたほどでは、ん？」
何やら、木の塊のようなものがこちらへと流れてきた。
すれ違う直前で拾って中身を見ると、空のペットボトルや錆びた小道具、大量の万札が入っているのが確認できた。
「な、何てついてるんだ。マンジイ、見てください。ざっと百万、いや、二百万ザディンはありますよ」
「ニシくん、それニセ札じゃぞ。ほれ、描かれている肖像画が怪しいおっさんになっとるじゃろ？」

「え？　あ！　ほ、ホントだ」
「この世界にきたばかりの者をカモにニセ札による取引を繰り返しながら旅する集団がいると聞いた事がある。ま、自業自得といえるが」
「自業自得？　じゃあ、この荷物の持ち主は？」
「おそらく、凶暴な海生物に襲撃されたんじゃろうの。海をなめていた結果じゃ」
マンジイは、この海に住む生物について話し始めた。
一番強く言われたのが、ほとんどの危険生物は人間を恐れていないという事。
小舟どころか、大型船ですら平気で襲う事もあるというから驚きだ。
攻撃的である理由としては、人間による乱獲や住処の破壊に怒っての報復ではないかという伝承があるそうだ。
要するに、やられる前にやれという考えに至ったのだろう。
しかし、人間側も黙ってはいなかった。
最近では、危険生物駆除部隊なるものが結成され、激しい戦いがしょっちゅう海の上で起こっているという。
おそらく、これはデビレンとの戦いと同じで、どちらかが完全に滅びるまで終わる事はないだろう。
「うう。謝って許してもらう……　とかは無理ですよね？」
「双方ともに多くの仲間を殺されとるんじゃ。年月と共に積み重なった恨みを言葉一つで片づけられるはずもないじゃろ」
「はぁ、複雑だな。躊躇なく武器をふるえるだろうか」
「これ、戦意喪失しとる場合ではないぞ」
マンジイはオールをボクにまかせ、槍を手にした。
ウツボのような大型生物が、すぐそばまで迫っていたのだ。
船のコーティングのおかげか、なかなか攻撃はしてこなかったが、こちらとしては常に気が抜けない。
もし、マンジイが前で守ってくれてなかったら、今以上の恐怖で手が止まっていただろう。
幸いといっていいのかは分からないが、もう酔いを気にするような

状況ではなくなった。
「う、あうう」
「しっかりと漕ぎ続けるんじゃ。ワシがついとるじゃろ」
「ぐうううう、シャー」
ウツボもどきは大きく口を開け、火を吹いてきた。
マンジイは槍を回転させながら弾くも、さらに二発目、三発目の攻撃が続く。
そして、その攻防が十分ほど続いた後、ウツボもどきは下へと潜っていった。
諦めたのかと思われたが、今度はボクの後方から姿を現し、火を吹いてきた。
しかし、間一髪のところでマンジイが間に入り、槍でガードした直後に突きを繰り出した。
顔面に深手を負ったウツボもどきはゆっくりと動きを止めながら、沈んでいった。
「しゃ、あああああ」
「た、すかったのか。ふぅ。まさか海生物が火を吹くなんて」
「あれは体内の毒素を燃やして放出していると聞いたことがある。直撃せんでよかったの」
「それにしてもおそろしい目つきでしたね。とても直視できなかったです」
「仕方あるまい。ワシもお前さんも奴にとっては仲間を殺した者の同類に変わりないのじゃから」
気丈に話すマンジイの顔には、ほんの少し曇りのようなものがあった。
やはり、心の奥底に複雑な思いがあるようだ。
しかし、その後は追い打ちをかけるように海生物たちとの遭遇が続いた。
コーティングのおかげで接近はされなかったが、しつこく追いかけられたり、針や液のようなもので攻撃されたりと散々だった。
体力はもちろん削られていくし、船にも少しずつだがダメージが蓄

積しているようだ。
しかし、最悪の事態になる前に海生物たちの追跡が急にピタリと止まった。
その後は手の平を返すようにボクたちから遠ざかっていき、かわりに大きな影が近づいてきた。
「この影は？　え？　ちょっと待って。こ、この大きさは！」
「ニシくん、全力でオールを動かすんじゃ！」
「あ、はい。う、うわぁぁぁ。あ、これは」
「ぎちちちちち」
海を割るように巨大な蟹が姿を現した。
その大きさはまさに怪獣と呼ぶにふさわしく、凄まじい迫力だ。
ボクは硬直しそうな体を支えつつ、必死にオールを動かした。
「はぁ、はぁ。うう」
「その調子じゃ。きついじゃろうが捕まれば終わりじゃからの」
「い、いつまで続ければいいんですか」
「もう少し、もう少しだけ離れてくれ。んー、ん、よし！」
マンジイは持っていた爆薬に火をつけ、後方へと投げた。
しかし、巨大蟹は少し動きを止めただけでそれほど深いダメージはないようだった。
そして、予想通り怒りを増大させてしまったようで、それはもう激しい追撃がはじまった。
「ぎちち」
「ま、マンジイ」
「すまん、失敗じゃった」
「う、うわぁぁぁぁ！」
ボクはがむしゃらにオールを動かすが、怒れる巨大蟹の猛攻にはかなわず、あっという間に追いつかれてしまった。
そして、ハサミの一撃で船は半壊し、同時にオールも破壊された。
もはや打つ手なしかと思われたその時、後方から巨大魚が現れ、割り込んできた。
「こ、これは、ナマズ？　サメ？」

「ゴクドスクジラ。この海域でもっともおそろしいといわれる水陸両生の凶獣じゃ」
「く、クジラ。え？　クジラってこんなんでしたっけ？」
ゴクドスクジラの外見はクジラといえばクジラだが、ナマズのようなひげとサメのようなするどい牙、両手を持っている特徴的なもの。
左目には生々しい傷跡があり、鋭い眼光と合わさって威圧感が半端じゃない。
すぐに襲い掛かってきそうな感じだったが、なぜか手前にいたボクたちをスルーし、巨大蟹と戦い始めてしまった。
「ど、どうなってるんでしょうか？」
「分からん。しかし、こんなものを生で見れる日がくるとはの」
「ま、まるで怪獣映画ですね」
驚くボクたちをよそに巨大蟹はハサミ、ゴクドスクジラは拳で打ち合い、序盤は互角の戦いが続いた。
しかし、わずかにゴクドスクジラがよろめいた後、巨大蟹は泡を連射。
続けて、ハサミを高速で動かして振り回し、攻撃した。
ゴクドスクジラは腹から流血しながらも倒れず、飛び上がってジャンプして急降下。
その後、見事に下敷きになった巨大蟹は上半身が大きくへこんだ状態でぴくぴくしながら浮かんできた。
「ぎ、ちちちち」
「ま、まさしく怪物じゃの」
「か、勝ったのか。ああ、よかった。おかげで、え？　あ？」
「じゅるる」
ゴクドスクジラは口を大きくあけながらこちらへと向かってきた。
どうやら、ボクたちを助けたわけではなく、巨大蟹から横取りしたかっただけのようだ。
「じゅるるるる」
「ニシくん、漕ぐんじゃ！」
「あ、はい。あ、しまった。オールはさっき、あ！」

「くっ！　飛び込むんじゃ！」
「じゅるるるるる！」
ゴクドスクジラの無慈悲なのしかかり攻撃が炸裂し、船は完全に破壊された。
広い海の中での生命線といえる存在の消失。
大きな絶望と共にボクの意識は薄らいでいった。

第十一話「凶獣との死闘」

「ん？　あれ、ここは？」
　海中で意識を失った後、ボクはどこかの砂浜で目を覚ましていた。
　後方には森が広がっており、おそらくは船出した海岸とは別の場所に流されたのだろう。
　沈まなかっただけラッキーと思いたかったが、船を失い、マンジイともはぐれてしまった。
　さらには聞き覚えのあるような声が森の方から聞こえ、不安な状況に拍車をかけるのだった。
「い、今のってゴクドスクジラの声に似てたような。ま、まさかここに上陸しているのか。うう」
　ボクはどうしていいか分からず、頭を抱えながら砂浜を歩き始めた。
　そして、大岩がある場所まで進むと、若い金髪の男が釣りをしているのを発見した。
「あ、あの、ちょっといいかな？」
「ん？　何だ、あんた。さっきのじいさんの仲間か？」
「さっきのじいさん？　え！　キミ、マンジイに会ったの？」
「会ったっつーか、んー、そうだな。教えてやらんわけでもないが」
　金髪男はここで情報料をよこせと要求してきた。
　さらには森の方をチラ見しながら、圧力をかけてくる始末。
　ここは言うとおりにするしかなさそうだ。
「いくら欲しいんだい？」
「まぁ、あんた金持ってそうにも見えねぇし、三万ザディンにしといてやるよ」
「分かった、払うよ」
「よし、交渉成立だ。んー、一時間くらい前だったな。あのじいさん、ゴクドスクジラを誘導するようにして森の方へ入っていったよ。ちょうど、そこの木のあたりからな」
「ゴクドスクジラに？　そうか、やっぱりさっきの声は聞き間違い

じゃなかったんだ」
ボクは少しずつ状況を理解し始めた。
おそらく、ボクとマンジイがこの砂浜に流れ着いた直後、ゴクドスクジラが後を追ってきたのだろう。
しかし、ボクは意識を失い逃げられる状態ではなかったため、マンジイが我が身を犠牲にして危険な役を引き受けたと考えられる。
またしても、ボクはマンジイの足を引っ張ってしまったようだ。
「こうしちゃいれない。早く、う、うう」
「森に入るつもりか？　今のあんたの体力じゃ何もできないと思うがな」
「だからってここでじっとしてるなんてできないよ。マンジイはボクの大恩人なんだ」
「そうか。じゃあ、一つ提案だ。四十万ザディン払えば、手を貸してやってもいいぜ」
「よ、四十万だって！」
「どうした？　大恩人の価値は四十万以下だってのか？」
「き、キミは。マンジイが生きるか死ぬかの瀬戸際だっていうのに」
「ぷっぷー、これが俺の商売なんだよ。ここに流れ着いた馬鹿どもからうまく金を搾り取るのがな」
金髪男は挑発するような顔をしながら、タバコを吸い始めた。
正直、今まで会ったデビレンたちに負けず劣らずのクズだ。
ボクは歯を食いしばりながら怒りをこらえ、四十万ザディンを差し出した。
「もし、手を抜いたりしたら絶対に許さないからね」
「おお、こわ。こりゃ、しっかりやらねぇとな」
「マンジイ、今行きます」
ボクは森の中を全力で走っていった。
しばらくすると、巨大な足跡の他、複数の木が滅茶苦茶に倒れているのを発見した。
おそらくは、ついさっきまで激しい戦闘が行われていたのだろう。
「ええっと、マンジイは、ん？　ああ！」

ボクは見覚えのある槍が木の下敷きになっているのに気づき、急いで駆け寄った。
そして、辺りを見渡すと、少し離れた場所でマンジイが倒れているのを発見した。
「ま、マンジイ」
「う、ニシ、くんか」
マンジイは何とか立ち上がったものの、顔は青ざめていて、骨も何か所か折れているようだった。
出血もひどいようだし、このままでは危ない。
だが、少し先ではゴクドスクジラがきょろきょろしながらこちらへと近づいている。
ボクは金髪男にマンジイをまかせ、ゴクドスクジラの誘導を始めた。
「はぁ、はぁ。この先は川か。小銃イアチャを使ってみるか」
小銃イアチャは、使用者の体内の水分を冷気に変えて弾丸化する能力を持っている。
今のボクの技量では敵をカチカチに凍結させるのは無理だろうが、川の一部分を凍結させるくらいならできるはず。
まずは急いで川を渡りきった後、ゴクドスクジラの足が水に浸かったところで小銃イアチャの引き金を引いた。
「う、ぶぶぶぶ」
一気に激しいのどの渇きが襲ってきた。
これは気をつけて使用しないと、水分をとられすぎて干からびてしまう危険もあるようだ。
だが、ゴクドスクジラの足付近を凍結させることには成功し、十分な足止めをすることはできた。
「よし。はぁ、み、水を、あ！　いけない。今は早く戻らないと」
ボクはすぐに来た道を戻っていくが、その先で見たのはさっき以上に苦しむマンジイの姿だった。
金髪男は近くに中腰で座り込んで、タバコを吸いながら傍観しているだけだった。

「よぉ、意外と早かったな」
「どういう事だよ、これ。何でマンジイを手当てしないんだ。十分に時間はあったはずだ」
「俺は戦闘で手を貸してやるって言ったんだ。治療をしてほしけりゃ、ほれ、追加料金として三十万ザディン払えよ」
「あ、うあああああああ！　いい加減にしてくれよ！　何でもかんでもお金、お金って、キミはお金をもらわないと何も動かないのか！」
「ああ、そうだ。ここは生きるか死ぬかの異世界だぞ。会ったばっかのジジイを無償で手当てするわけねぇだろうが、ターコ」
「そうか、もういい。キミにたよろうとしたのが間違いだったようだ」
ボクはマンジイを背負い、移動を始めた。

だが、少し進んだ大木の前でゴクドスクジラに追いつかれてしまい、行く手を阻まれてしまった。
正直、もう逃げ切る事は不可能だ。
覚悟を決めたボクは棍棒ガドッグを装備し、ゴクドスクジラに向っていった。
真っ向からの力比べでは勝ち目はないので、狙うのはまず足。
力の限り叩きまくって、膝をつかせるのが有効だろう。
ボクはとにかく動き回り、攻撃のチャンスをうかがった。
しかし、ゴクドスクジラはパンチを前面に向けて広範囲に打ちまくり、こちらの接近を許さない。
この攻防の影響で地形はみるみる変わっていき、動き回るのも容易ではなくなっていった。
「はぁ、も、う。ま、まずい」
棍棒ガドッグの反動の影響で、両腕が少しずつ重くなっていった。
それでも、必死に力を込め続けて前進し、ゴクドスクジラの足へ向かって走った。
何とか決定打をくらわずに進み切り、渾身の一撃を叩きこんだ。
ゴクドスクジラはわずかに膝をつくも、すぐに体勢を立て直して反

撃を開始。
ボクは何とか棍棒ガドッグで受け流そうとするが、すぐに押され始め、パンチの一撃を食らって木に叩き付けられた。
限界に近かった両腕にはさらにダメージが加わり、力を込められなくなった。
もはや、戦う事も逃げる事もかなわない。
ボクは何とか倒れているマンジイの元に駆け寄り、ゴクドスクジラに頭を下げた。
「ぼ、ボクはどうなってもいいから、マンジイだけは助けて」
「ニシくん、何をやっとるんじゃ！　こんな年寄りのために命を捨てる気か」
「当り前です。元々はボクがふがいないせいでこうなったんじゃないですか」
「お前さんにそこまでされたら年長者として立つ瀬がない。下がるんじゃ」
「嫌です！」
ボクは持っていた物をすべて放し、さらに前へ出て座り込んだ。
それに対してゴクドスクジラは一度は拳を振り上げるも、それ以上動かそうとはしなかった。
話が通じたかどうかは定かではないが、しばらくは沈黙するだけの状態が続いた。
「聞き入れて……　くれるのか？　ん？」
何やら爆音のようなものが近くから聞こえた後、何かがボクとマンジイめがけて飛んできて爆発した。
そして、ゴクドスクジラにも数発の爆撃が襲い掛かった。
ボクとマンジイは爆風で吹き飛ばされて火傷を負い、ゴクドスクジラは激しく流血した状態。
それを嘲笑いながら、さっきの金髪男が姿を現した。
「特製の手榴弾の味はどうだ？　軽くて高威力。ちと値が張るのが玉にキズだがな」
「き、キミは。まさか、最初からこれを狙って、うう」

「ああ。互いにつぶし合わせて消耗させたところで漁夫の利を得る。金儲けってのはスマートじゃなきゃいけねぇよ」
「うう。キミは本当に人間のクズだ」
「何とでも言え。ははは、気分がいい。ゴクドスクジラの肉とお前らの全財産、合わせていくらの儲けになるだろうな。うはははははは」
金髪男は次々と手榴弾を投げてきた。
ボクはマンジイを抱えてよけようとするも、ケガのせいでうまく動く事が出来ない。
そんな中、ゴクドスクジラはフラフラの状態ながらも、戦意を失っていないようだった。
飛んできた手榴弾をかみ砕きながら、前進を続けていった。
金髪男はしだいに追い詰められていき、顔からは完全に余裕が消えていた。
ゴクドスクジラとの実力差を悟ったのか、動きも雑になり始め、ついには手榴弾を使い切ってしまった。
「あ、あああああ。た、助けてくれ」
後ずさりをはじめた金髪男はゴクドスクジラのパンチをモロにくらい、空の彼方へと消えていった。
しかし、戦いはまだ終わっていない。
ボクは立ち上がって、潔く前へと進んだ。
対するゴクドスクジラは、拳を振り上げようとしかかったところで動きを止め、何もせずに去っていった。
その際に見せたどこか怒りと悲しみがまじったような表情は、ボクの頭に消えずに残った。
「マンジイ、なんで見逃してくれたんでしょうか？」
「はっきりとは分からん。じゃが、元々のゴクドスクジラは自分から攻撃を仕掛ける事などないおとなしい生き物じゃったんじゃ。その名残なのかもしれんの」
「大人しい生物？　それがなぜ人間を襲うようになったんです？」
「愚かな科学者たちのせいじゃ。デビレン攻撃用の兵器として売りさばくために多くのゴクドスクジラを犠牲にしながら、実験と改造を繰

り返していったんじゃ」
「そう、だったんですか」
「しかし、改造は成功したものの、コントロールする方法が見つからずに放置され、今に至っておるというわけじゃ」
何とも、救いのない話だ。
ゴクドスクジラを改造したのも、危険だからと排除しようとしているのも人間。
デビレンのいるこの世界で一番の被害者は、人間ではなく、利用されてきた生き物たちかもしれない。
ボクはそう思いながら、寂しく海へと消えていくゴクドスクジラを見送った。

第十二話「マンジイを救え」

「はぁ、はぁ。まだまだ・・・・・だ」
ゴクドスクジラとの一件の翌日、ボクは重症のマンジイを背負いながら森の中を歩いていた。
すでにデビレンの襲撃二回と野生動物の襲撃四回を受け、ボク自身もかなり消耗した状態。
しかし、立ち止まれば、その分だけマンジイの命は消えていく。
そう思う事だけが、今のボクの原動力になっていた。
「う、が。はぁ、はぁ」
「ニシくん、たのむからもう無理はせんでくれ。このままではお前さんの方が先に死んでしまう」
「だ、いじょぶです。そう簡単に死ぬつもりありませんから」
「お前さん、本当に強くたのもしくなったの。ゴクドスクジラとの戦いといい、道中の戦いといいの」
「何を言うんです。マンジイの指導のおかげじゃないですか。ん？あれ？」
何やら、周りの草がガサガサと動き始めた。
ボクはすぐに身構えるも、直後に木からデビレン二体が飛び降りてきて挟み撃ちをしかけてきた。
そして、続くように草むらから新手のデビレンたちが次々と飛び出してきた。
「フフ、そうとうな深手のようだな。俺たちは運がいい」
「くっ！」
「おっと、下手な行動はとるなよ。まずはそのジジイが死ぬことになるぞ。はは」
剣をかまえながら笑うデビレンはレベルスリーで、周りのデビレンたちはレベルツー。
今の状態でやり合えば、ボクとマンジイのどちらかは確実に死ぬ。
最悪の状況だったが、希望はわずかに残っていた。
レベルスリーのデビレンの後方にあるかなり離れた場所から黒い

煙があがっているのが見えていたのだ。
これは村か町があるかもしれないという事だ。
ボクは祈るように小刀ザクメルを装備し、全力で走り出した。
「うおおおおおおお」
「な！　てめぇ、待ちやがれ」
「うおおおおおおお」
ボクはデビレンたちをあっという間に離し、走り続けた。
心臓が破けるかのような苦しさに襲われたが、限界を迎える寸前のところで人の行き来している地点までたどり着いた。
「はぁ、はぁ。えーっと、ここは？」
辺りを見渡すと、どこかの町の中に入り込めたという事が分かった。
しかし、小刀ザクメルの反動でまともに動けないというのに、すれ違う人たちは気に留めてはくれない。
それどころか、ガラの悪そうな男女にマンジイごと蹴り飛ばされた上に、罵詈雑言を浴びせられた。
やはり、この町にも人助けをせっせとしてくれる人間など皆無のようだ。
「はぁ。厳しいだろうけど、やるしかないな」
ボクは何とか体を起こし、マンジイを再び背負って歩き出した。
目指すのは、もちろん十分な設備のある医療機関だ。
幸いにもこの町にはいくつかの医療機関が存在していたものの、横暴な医者が大半を占めているようで、ボクの服装を見ただけで門前払いしてしまうパターンが多かった。
その後、ようやく診てくれる医者を見つけたが、すでにマンジイは危険な状態でどんどん息遣いが荒くなっていた。
「はぁ、はぁ。ニシ、くん。すまん」
「う、うう。先生、お願いです。マンジイを助けてください。どうか、どうか」
「ああ。だが、あんたもけっこうな深手じゃないか。大丈夫なのか？」
「ボクはいいんです。とにかく、マンジイを助けてください」

「分かった。全力をつくそう」
先生はマンジイを抱えて、奥の処置室に入っていった。
ボクは床に力なく腰かけ、不安な時間を過ごすこととなった。
マンジイの悲痛な叫び声が聞こえるたびに周りの空気が重くなり、最悪な未来が頭をよぎりはじめた。
「うう。まさかとは思うけど。んん、あ！」
不安がさらに強くなるように先生が暗い顔をしながら処置室を出てきた。
そして、なぜかボクと目を合わせようとせず、下を向いたまま話し始めた。
「もう大丈夫だ。傷自体は深かったが、急所にダメージがいかなかったことが幸いだったといえるな」
「じ、じゃあ、マンジイは助かったんですね。ありがとうございます。何で、そんな暗い顔してるんですか？」
「い、いや、彼な、あんたにもう会いたくないって言ってんだ。ただ、感謝だけはしているそうだ」

「どういう事ですか？　ちゃんと話を聞かないと納得できません」
ボクは制止しようとする先生をふり払い、処置室に飛び込んだ。
しかし、マンジイはただベッドに横たわり、まともに対応しようとしない状態。
そして、やっと口を開いたかと思えば、とぼけたようにして歌い始めた。
「ひゅー、ん、んん。声がうまく出んの。んん」
「マンジイ、いいかげんにしてください！　理由も言わずに別れようなんてあんまりじゃないですか！　ちゃんと話してくれるまで引き下がりませんよ」
「フー、そうか。思い通りにいかんもんじゃの。では、聞くが、今回の治療にどれだけの費用が掛かると思う？」
「えーと、まぁ、数十万くらいでしょう？　保険がないのは分かっていますし、それは覚悟してます」

「ここの治療費だけの問題ではないんじゃ。ワシに借金があるという事は知っておるじゃろ？」
「はい。前にチラっと聞きましたね。今回の事と関係あるんですか？」
「うむ。まぁ、話したところでどうにかなるものではないと思うがの」
マンジイは体を起こし、話し始めた。
すべてのはじまりは三十一年前の夏。
三十八歳のマンジイは、急死した父親が友人の連帯保証人になったせいで負った借金を返済する事になってしまい、転落の人生を歩むことになったという。
過激な取り立てや電話が続くようになり、奥さんと生まれたばかりの息子さんには出ていかれ、ほとんど寝る間もなく働くことになったそうだ。
自分が使ったわけでもない赤の他人の借金を奴隷のように返していく毎日。
それだけでもひどい話だったが、その後は年月が経つにつれて利息が増加。
とうとう、まともに働いても返せないような額になってしまったという。
ここまで話すと、マンジイは下を向いて隠すようにして泣き始めた。
「ぐ、うう。ぐ、すまん。幼かった息子の事を思い出してしまっての」
「知りませんでした。マンジイがそんな過去を持っていたなんて。デビレン狩りをはじめたのも借金返済のためだったんですね？」
「生きている間に借金返済が不可能とみなされての。脅されて、あまり詳しい事情も聞けんままこの世界に送り込まれたんじゃ。ただ指定された場所に毎月二百万送金するようにだけ言われての」
「ボクなら親父さんを絶対に許さないでしょうね。借金の連帯保証人なんかになってその後どうなるかは目に見えてますから。マンジイもそうなんでしょう？」
「いや、親父がいなかったら、ワシはこの世に生まれさえおらんの

じゃ。苦しい思いしたのも楽しい思いしたのも親父のおかげ。何を恨むことがある」
「はぁ、マジで言ってるんですか。器大きすぎでしょ」
「おだてても気持ちは変わらんぞ。さぁ、はやくここを離れるんじゃ。もう時間がない」
マンジイは、少しでも借金の返済が滞れば取り立て屋が殺し屋を率いてやってくると続けた。
そうなれば、一緒にいるボクの身も危なくなるらしい。
たしかに肩代わりや身代りを強要されることは容易に想像できる。
しかし、ボクは逃げるつもりはなかった。
「ボクはさっきの話に出てきた借金を他人に押し付けて逃げるような卑怯者とは違います。やるだけやらせてください」
「今から十日後の夜十二時までに二百万ザディンを送金しなければ、取り立て屋がワシを探しはじめるじゃろう。現実的に考えて間に合わんと思うがの」
「大丈夫です。だから、あきらめないでください。ボク、マンジイに教わりたいことがまだ山のようにあるんですから」
「ニシくん」
「必ず、戻ってきます」
ボクは荷物をまとめ、処置室を後にした。
そして、先生にマンジイの事をしっかりと頼んだ後、森へ向けて出発した。

第十三話「旅は道連れ」

「ぐ、え。ぐうう」

二百万ザディンを集め始めてから二日後、ボクは森の入り口で座り込み、傷を癒していた。

何しろ、ぶっ続けで寝食もはさまずにデビレンたちと戦い続けたため、体が言う事を聞かなくなっていたのだ。

だが、こんな調子では期間内に目標額を集めることはできない。

何とか立ち上がり、再び森の奥へと入っていった。

その後は遭遇した雑兵三体を討ち取るも、貧血と空腹に耐えきれず倒れてしまった。

「こ、ここまでに集めたお金は三十万ザディン。だ、ダメだ。全然足りない。で、でも、死んでしまっては元も子もない。い、一度、町に、ん？」

何やら、話し声のようなものが近くの草むらから聞こえてきた。

それをたよりに地面を這いずりながら進むと、レベルスリーのデビレン二体が話しているのを見つけてしまった。

一体は前に戦ったバヤンバという女のデビレンで、もう一体は長い耳たぶの太った男。

とりあえず、今の状態で何とかできる相手ではないのはたしかだろう。

「あ、後で必ず戻ってくるさ」

ボクは後退をはじめるも、バヤンバに気づかれてしまい、身動きがとれなくなってしまった。

「うう、く」

「いつぞやのデブちゃんじゃないの。私を狙ってここまできたってわけね」

「い、いや、キミを狙ったわけじゃない。ほら、ボクは怪我している。勝負はまた今度にしよう」

「そうよね。怪我人をいたぶるのはさすがにかわいそう……。とか言うと思った？　デビレン相手に泣き落としが通用するわけないで

しょ！　こんのキモブタ！」
バヤンバはボクの顔を何度も踏みつけた後、出刃包丁型の魔性具を振り上げた。
だが、直後に割り込んできた何かがバヤンバを吹き飛ばした。
そして、近くに立っていた耳たぶデビレンを威嚇するようにしてボクの前に立った。
それは一瞬だけ鬼のようにも見えたが、黒いコートを着た大柄な男性だった。
少なくともデビレンではないようだったが、その目つきは冷たく、ボクをにらみながら顔を近づけてきた。
「忠告だ、おっさん。絶対に前に出るな。死にたくなけりゃだがな」
「あ、う、ん」
「よし、じゃあ、本題に入るか。魔獣使いのギルゴムの配下ってのはどいつだ？」
「ギルゴム様？　まぁ、私は配下の一人だけど」
「そうか。てめぇがバヤンバだな。オラ！」
「やる気のようね。さっきの借りを返させてもらうわ」
バヤンバは黒火を両手にまとい、コート男に襲い掛かってきた。
続けて、耳たぶデビレンも小刀型の魔性具を装備して攻撃してきた。
しかし、コート男はそれを軽くかわし、腹に膝蹴りをあびせて倒した。
「おいおい、まさか死んだのか。そんな強く蹴ったつもりはないがな」
「死にな！」
バヤンバは、コート男が耳たぶデビレンに気を取られている隙を狙うように、背後から手をかまえた。
そして、後退しながら、黒火を連続で飛ばして攻撃した。
「接近戦じゃ分が悪いようだからね。ほらほらほら」
「けっ、低俗なレベルスリーの考えそうな事だな」
コート男はバヤンバの発する黒火をかわしながら接近し、彼女の眼前で飛び上がると、背後にまわって腕をひねりあげた。

しかし、バヤンバはしぶとく黒火を連射して暴れ、脱出。
煙玉をぶちまけた後に猛スピードで逃走した。
戦闘開始からここまでの所要時間は、わずか三十秒。
ボクは、コート男が並みの戦士ではないとすぐに理解した。
「助けてくれてありがとう。でも、キミは一体？」
「ああ、俺はショウ。あるデビレンを追って旅してたんだが、んー」
「え？　何？」
「いや、あんたじゃない。てめぇの方だ！」
ショウさんは、倒れている耳たぶデビレンを蹴飛ばし、殴り始めた。
それが一通り終わると、今度は懐からナイフを取り出し、ドスの利いた声で脅し始めた。
「俺に狸寝入りは通用しねぇんだよ。さぁ、ギルゴムの居場所を教えろ。知らないはずはねぇよな」
「し、知らないっす。ギルゴム様はバヤンバ先輩の上司で、オイラは会った事ねぇんすよ」
「会った事ねぇで済むか。ホラ、会った事あるって言え。打ち首獄門にすんぞ」
「無茶苦茶じゃないっすか。本当に会った事ないっすもん。ど、どうしろっていうんすか？」
「よし、じゃあ、バヤンバのところへ連れていけ。奴はどこに向かった？」
「そ、そこの町の港から船で移動するって言ってたっす。は、八時頃に」
「あと十分か。急いだ方がよさそうだな」
ショウさんは、ボクと耳たぶデビレンを背負うと、森の入り口へ向けて走り始めた。
その後は一気に町の中へと突入し、あっという間に港へと移動した。
「耳たぶ、どれがバヤンバの乗ってる船だ。言え！」
「お、おいらに密航の手引きをしろって言うんすか。か、勘弁してっす」

「さっさと吐いた方がいいぞ。船に乗れなかったら、てめぇを海に沈めるからな」
「な、なんだと、汚いっすよ」
「フン、お前らのやっている事とどっちが汚い？　ほら、言わねぇと、沈める時おもりをつけるぞ。二十トンくらい」
「う、あー、もう、右から二番目のやつっすよ」
「よし、あ、そうだ。これから全力で走るから舌噛まないようにしとけよ」
　ショウさんはボクたちを担いだまま助走をつけ、出航しようとしていた船にしがみついた。
　そして、そのまま船内に上がり、遭遇した雑兵二体を倒して倉庫へと入った。
「フー、ギリギリセーフだな」
「む、無茶苦茶っすよ、あんた」
「あ、あの、ショウさん。何でボクまで連れてきたの？」
「死にぞこないをあんな森に放置しちゃおけねぇだろ。とりあえず、そのタルん中の食糧でも食って回復しとけ。担ぎサービスはもうなしだからな」
「あ、ああ。うん」
　ボクは何とか身を起こし、体力回復に専念することにした。
　予想外の展開ではあったが、これはまたとないチャンスだ。
　今までの分とこれからの分も含め、とにかく食べ続けた。
「が、ぶぶ、ぐうう」
「すげぇ食欲だな。おい、耳たぶ、おっさんが回復したらこの中を案内してもらうからな。そのつもりで、ん？　耳たぶ？」
「き、気持ち悪いっす」
「気持ち悪い？　自分の顔がか？」
「ち、がうっす。よ、酔ったみたいっす」
「酔った？　ははは、デビレンが船酔いかよ。こりゃおかしい」
「笑ってないでなんとか、うっ、おぇぇぇぇぇ！」

倉庫内に耳たぶデビレンのすさまじい嘔吐物のにおいが広がり、ボクとショウさんは悶絶した。
もう食事どころではなくなり、口と鼻を必死に押さえながら倉庫のドアを開けた。
「はぁ、はぁ。ぐぐ」
「てめぇは腹にヘドロでも入れてんのか。何事にも限度ってもんがあんだろ」
「キミ、病院行った方がいいよ。ホントに」
「そ、そこまで言わなくても。あ、あああ！」
耳たぶデビレンは涙目になって震え始めた。
その視線の先には、バヤンバが雑兵たちを率いて立っていたのだ。
ショウさんはボクの前に立つと、拳をかまえた。
「この船はギルゴムのとこに向かっていると見て間違いないんだよな？」
「さぁねぇ。ところで、ここに入り込めたのはそこの耳たぶくんの手引きなのかしら？」
「そのとおりだ。こいつ言ってたぜ。この船の奴らはバカばっかりだから簡単に忍び込めるってな」
「あ、あ、あんた、なんてことを」
「向うへの未練を断ち切ってやったんだ。すっきりしたろ？」
「バカ……ねぇ。あんたの気持ち、よーく分かったわ。その人間共と一緒に始末してやるわ」
「やる気か？　そうこなくっちゃな」
ショウさんはデビレンたちに向っていき、激しい戦闘が始まった。
これはボクもじっとしてはいられない。
すぐに棍棒ガドッグを装備し、迫ってきた雑兵たちを蹴散らした。
「体力が回復した今なら存分に戦える。キミに感謝しないとね」
「そういうのは敵を全滅させてからにしろよ。まぁ、すぐそうなるだろうがな。ん？」
「ひぇぇぇ！　バヤンバ先輩、どうかご容赦を」
耳たぶデビレンは泣き叫びながら、バヤンバに追い回されていた。

しかし、すぐに追いつかれて張り倒され、顔面を蹴られた。
「い、命だけは、命だけは助けてっす」
「デビレンが命乞いとは見苦しいね。このデビレン界の顔汚しめ」
「ま、まぁ、そう言わずに、ほら、靴でも磨くっすよ」
「おっ、気が利くじゃないの、ってその手に乗るかい！」
バヤンバはノリノリで耳たぶデビレンを蹴り続けるが、少しして雑兵たちが減っているのに気づいたのか、奥の出口から逃走した。
ボクは雑兵たちを倒しつつ後を追うも、着いた先は海が広がっており、進むことはできなかった。
立ち往生するボクを挑発するようにバヤンバはゴムボートをこぎながら海の奥へと消えていった。

第十四話「迫るレベルフォーの影」

「まだ島らしいものは見えないね」
「ちっ、このオンボロ船が」
バヤンバが逃走した翌日、ボクとショウさんは周りを見渡しながら船を進めていた。
なかなか進展らしきものはなく、時間だけが過ぎるばかり。
ショウさんのイライラは増していき、船内の空気はみるみる重くなっていった。
「まだか、まだか」
「そういえば、ショウさんは何でギルゴムってデビレンを追ってるの？」
「昔、そいつに負けた上に仲間たちをやられた事があってな。カタをつけなきゃなんねぇんだ、コラ！」
「そ、そんな怒鳴らなくても、え、あ？　あれ！」
ようやく、陸らしきものが視界に入ってきた。
ボクはすぐに上陸の準備をするも、直後に大量の黒火らしきものが飛んできて、船主が大破した。
続けて甲板と舵も大破し、被害は瞬く間に広がった。
船はギシギシと音を立てながら、沈み始めた。
ボクとショウさんは負傷した耳たぶデビレンを連れて海へと何とか脱出し、陸へ向けて泳いだ。
「まさか、上陸前に排除しようとするとはね」
「デビレンらしいこった。おっさん、その耳たぶをしっかり守っとけよ。まだ利用価値があるかもしんねぇからな」
ショウさんは続く黒火攻撃をよけながら上陸し、逃げようとしたバヤンバの前に立ちはだかった。
「くだらねぇ追いかけっこはここまでだ」
「ちっ、おとなしく沈められとけばいいものをさ」
バヤンバは右手に出刃包丁を装備し、左手に黒火をまとうと、ショウさんに向っていった。

黒火の温度はすさまじく、よけても拳をふりまわしたときの熱風は離れた場所にいるボクですらとても熱く感じる。
もし、うかつに素手でガードなんてしようものなら、大やけどは必至。
ショウさんは序盤こそ距離をとりながら応戦していたが、しだいにガードの間に合わないほどの高速パンチやフェイントを織り交ぜた攻撃で攻めはじめた。
「どうした、魔性具を装備してその程度か？」
「くっ、はやいわね。これほどとは」
バヤンバは背後からショウさんに左手を攻撃され、黒火は消えていった。
そこからはかなり一方的な展開となった。
ショウさんが的確にパンチをヒットさせるのに対し、バヤンバの出刃包丁は大振りすぎてまったく当たらない。
「う、うう」
「こんなナマクラで俺が切れるか。黒ひげのタルにでも刺しとけ」
ショウさんは出刃包丁を弾き飛ばしてバヤンバに迫るが、真横から飛んできた銃弾に制止された。
その直後、長い口をしたデビレンがピストル型の魔性具をかまえながら、姿を現した。
「ちっ、よけられたか。よく狙ったはずだがな」
「この女の仲間か。見たところレベルスリーのようだが」
「キオラだ。それなりに名の通ったデビレンのつもりなんだがな」
「レベルフォー以下はあんま覚えねぇようにしてんだ。どうせ、すぐやられる儚い命だしな」
「言ってくれるじゃねぇか。オラ！」
ピストルの連弾がショウさんにせまる。
はっきり言って「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」的な撃ち方に見えたが、弾自体の速度は速く、決して簡単によけられるものではないようだ。

「フフフ、刃物と違ってこの距離なら一方的に攻撃できる。反撃をくらう心配もないからな」
「フン、無駄にいい武器を持ちやがって」
「ほらほら、あ、た、弾が」
連射がたたり、とうとうキオラのピストルの弾がきれた。
それをショウさんが見逃すはずもなく、一気にキオラへと接近した。
「刃物と違って銃には弾ぎれのリスクがあるもんな」
「う、うわぁぁぁ、なんてな」
キオラは両手を前に出し、勢いよく黒火を連射した。
ショウさんは最初の一撃をよけきれず、右ほおに火傷を負ってしまった。
「くそ」
「へへ。俺は騙すのがうまいからな」
「さっきまでのは黒火を使う前の前座にすぎなかったのか。ついピストルばかりに目がいっていたよ」
「フフ、私にも目がいかなかったようね」
「あ?」
ショウさんの背後には、手をかまえるバヤンバが立っていた。
おそらくはここまでが敵側の作戦だったのだろう。
ショウさんを完全に挟んだままキオラ、バヤンバから黒火を撃ち出された。
前後左右どちらに逃げても、この連弾の挟み撃ちからは逃げられそうにない。
絶体絶命かと思われたが、ショウさんは空中へ勢いよくジャンプした。
「はめられたのはてめぇらの方だ」
「う、うそ!」
「おい、バヤンバ、すぐ止め、うわぁぁぁぁ!」
黒火で同士討ちをしてしまったキオラとバヤンバ。
バヤンバは大やけどを負って昏倒し、キオラはかすり傷ですんだも

のの、ショウさんに背後から両腕をつかまれて捻じ曲げられていた。
「う、うう」
「連携がまるでとれてねぇな。どうせ傷がすぐ治るとたかをくくっているとこうなるぜ」
「ぐ、うううう」
「ひとつ実験といこうじゃないか。お前らの回復能力とやらがどれほどのものか」
「うぐぐぐ」
「くじゃぐしゃにへし折れた骨まで再生できるだろうかな」
「ぐ、やめろ、やめてくれ」
「フン、その様子だと骨折までは治せないようだな。ま、雑魚をいたぶんのは性に合わねぇしな」
ショウさんはキオラとバヤンバを縄で縛り、尋問を開始した。
それにより、得られた情報は二つ。
ギュバというレベルフォーのデビレンとの合流とこの先にあるグリル村の襲撃計画。
襲撃の詳細内容は誘拐という事しかキオラ、バヤンバ共に聞かされていなかったらしく、直接行って真相を確かめるしかないようだ。
ボクはショウさんと相談し、グリル村へ向かう事にした。
「んー、それにしてもレベルフォーか。いつかはぶつかると思ってたけど」
「不安そうだな、おっさん。ま、俺も負けた過去があるから、大きい事は言えねぇがな」
「あ、あの、ところでオイラはこの後どうなるんすかね？」
「決まってんだろ。そっちの二人と一緒に換金所に引き渡す。嫌ならここで骸にするがな」
「ショウさん、彼は協力してくれたんだし、少しは、ん？　んん？」
何やらものすごい悪臭がボクの鼻を襲った。
それはうまく表現できないが、生物が腐ったようなにおいだった。
それをたよりに少し進むと、古風なボロ家が多く並ぶ小さな村の前にたどり着いた。

「ここがグリル村で間違いないんだよね？」
「ええ。たしかにそのはずだけど、変ね。襲撃は今夜十時のはずなのに」
「たしかにこの悪臭といい、普通じゃねぇな。何にせよ、人を探した方がよさそうだな」
ボクたちは村に入り、あたりを見渡しながら歩いた。
強い悪臭とは裏腹に声などはまったく聞こえない。
そこで、今度は家の中へ捜索範囲を広げることにした。
「お、お邪魔します」
「んー。おい、おっさん。見てみろよ」
ショウさんの先では、傷だらけの老人が横たわっていた。
そして、その後ろにはこの老人を引きずった痕もある。
ドア付近の傷などから考えて、彼は家の者が連れていかれようとしたのを止めようとして殺されたのではないかと思われる。
「むごい事するもんだ」
「いや、むしろこの方がよかったかもしれねぇな」
「どういう事？」
「ほら、奥の方を見てみろよ」
ショウさんの指さす方には、兄弟と思われる二人の男児が痩せこけた状態で倒れていた。
その横には何も入っていない汚れた食器だけがいくつも散乱している状態だ。
人間だけでなく、まともな食糧さえもデビレンたちは容赦なく奪っていったのだ。
「うううう」
「何だ、耳たぶ。今更罪悪感に襲われてやがんのか？」
「す、少しは」
「そう思うんなら、手伝え。このままじゃあんまりだろうからな」
ボクたちは、餓死した二人を含む発見した村の死者たちの埋葬していった。
その途中で家の中に隠れていた村の生存者たちもボクたちの行動

を見て敵でないと判断したのか、埋葬を手伝い始めた。
このとき、生き残っていた村人は連れていかれなかった者のうちわずか半数以下に過ぎない事が分かった。
仮にこの状態がこのまま続けば、全滅も時間の問題だろう。
「働き手や食糧だけかっさらい、年寄りや子供は放置か。なんともデビレンらしい事だ」
「はぁ」
すべての埋葬を終え、ボクはすっかり意気消沈した。
そのとなりでは幼い村の子供が涙目になりながら、両手を差し出していた。
後ろには今にも倒れてしまいそうな村人たちが虚ろな目をしてズラリと並んでいる。
これは、もうひと働きする必要がありそうだ。

第十五話「恐怖の時間」

「はぁ、たったのこれだけか」
グリル村で犠牲者たちの埋葬を終えたボクは、ショウさんと手分けして食糧を探していた。
一刻も早くお金を稼がなければならないのは分かっているが、餓えた村人たちを放置して立ち去るのは無情すぎる。
マンジイに心の中で何度も謝りながら、力一杯足を進めた。
だが、くたくたになって集めたは、わずかな果物類、薬草、虫類だけだった。
「これじゃあ、焼け石に水だよ。はぁ」
気落ちしながら村に戻ると、入り口のところで落ち合った耳たぶデビレンから食糧の入った大袋を渡された。
聞くところによると、バヤンバに沈められた船の残骸の中から回収してきたというのだ。
ボクは何というか唖然としながら、食糧を受け取った。
「あ、りがとう。でも、キミはデビレンなのにどうして？」
「自分でもよく分かんないんす。でも、オイラ少しだけ嬉しかったっす。今まで仲間や上司たちに物みたいな扱いばかりされてたから、その、あんたたちが生き物として接してくれっ、う！」
耳たぶデビレンは何かを言いかけたところで頭を撃ち抜かれて倒れ、さらに上半身を数発撃たれ死亡した。
とうとう襲撃部隊が村に攻めてきたのだ。
先頭に立っていたのは帽子をかぶったアゴヒゲの男。
普通の人間のようだったが、操られているような様子はなく、周りの雑兵たちに指示のようなものを送りつつ、ボクに近づいてきた。
「お前、この村の者か？」
「違う。それよりも、なぜ彼を殺したんだ？　キミたちの仲間のはずだろう」
「ああ、その耳たぶか。裏切ったようだし、そりゃ始末するだろ。さて、まずは現状確認だな」

アゴヒゲ男は後ろにいた雑兵たちから機関銃を受け取り、辺りを見渡した。
やはり、今の村の現状は予想外だったらしく、やや困惑しているような感じだ。
「いるのは労働力になりそうもない年寄りや子供ばかり。ったく、別の隊に先を越されたようだな」
「労働力を集めているのか。何のために？」
「人手が足りねぇからに決まってんだろ。だが、こいつらも一応連れていくか。ストレス解消のサンドバッグ代わりにはなるだろうしな」
「や、やめるんだ」
「へへ。ブタや牛みたいな家畜でもいいんだが、人間の方がアホな命乞いを聞ける楽しみがあるから面白いんだよな」
「狂ってるな、キミは。人間だからって躊躇していられないようだ」
「やる気か。仕方ねぇな」
アゴヒゲ男は雑兵たちとともに攻撃を開始した。
ボクは村人たちを後ろへ下げ、孤軍奮闘した。
雑兵たちは難なく倒すことはできたが、アゴヒゲ男だけは手強く、一筋縄ではいかなかった。
おそらく、レベルスリーのデビレンより実力は上だと思われる。
「フフ。俺は強いだろ、おデブちゃんよ」
「なぜだ？　なぜキミほどの人がデビレンの味方なんてしてるんだ？」
「知りたいか？　フフ、まだデビレン狩りをしていた頃によ、ギュバ様に敗北して気づかされたからさ。デビレンに歯向かうのがどれだけ愚かな事かをな」
「デビレンと戦うのを諦めたとでも？」
「ああ。俺があの時抱いたのは復讐心じゃなく憧れの感情だった。そりゃそうさ。幼い頃から鍛えた拳法の技も愛武器もあの方たちにとってはちっぽけなものでしかなかったんだからな」
「キミって……　ホントかわいそうだね」
「なぁーにぃ！」

アゴヒゲ男は機関銃を滅茶苦茶に乱射してきた。
それはボクだけではなく、周りにいた村人たちにまで向けられた。
もはや、彼に人間としての誇りなんて微塵も残ってないようだった。
「何がかわいそうなんだ。いずれ、世界はギュバ様達のものになるんだ。どうせなら、今のうちに支配する側にまわりたいと思うのは当然だろう」
「ぐ、そんなの間違ってるよ」
ボクは、弾を撃ちまくるアゴヒゲ男に少しずつ接近していき、機関銃を叩き落とした。
そこからは壮絶な殴り合いが始まった。
お互いに一歩も引かず、まさに意地と意地のぶつかり合いだった。
「はぁ、はぁ」
「俺は間違ってなんかいない。ギュバ様は約束してくれた。いずれ俺にもデビレンの力を分けてやるとな」
アゴヒゲ男は攻撃をさらに激化させてきた。
それは、まるで見えない鎧をまとったかのような重い一撃だ。
しかし、ボクも負けじと攻撃を続けた。
「はぁ、はぁ。キミは強いよ。なのに、どうしてそのギュバってデビレンに負けた時にもっと強くなろうと思わなかったんだ？」
「人間の力の限界なんて知れているという事を俺はギュバ様から教わった。だから、だから、黙って俺に殺されろ！」
アゴヒゲ男は奇声を発しながら飛び上がり、ボクに掴みかかった。
奇声を発しながら暴れるその姿は、狂気そのものだった。
目を血走らせ、よだれをたらし、いかに必死かが見てとれた。
「こんなところでお前なんかに野望を砕かれてたまるか！　あ、ああああ」
いきなりアゴヒゲ男の動きがピタリと止まり、なぜか震えながら涙目になってひれ伏した。
そして、その直後に凄まじいほどの殺気がボクの背中を襲った。
「こ、これは、う！」

振り向いたボクの後ろに立っていたのは、金髪で灰色の肌と顔に施された赤い模様が特徴的な黒服の男。
殺気や今までに聞いた情報から考えて間違いない。
バヤンバたちが言っていたレベルフォーのギュバと見て、間違いないだろう。
ボクは震える手を支えつつ、戦闘態勢をとった。
必死に「ボクはやれる、ボクならやれる」と言いつつ、がんばった。
しかし、わずかにまばたきした直後、腹にあたたかい感触が。
背後に回り込んだギュバに腹部を刺されていたのだ。
「うう」
「私を相手にまばたきとは余裕だね」
ギュバはわざと手を引き抜くと、にやつきながら舌を出して挑発した。
ボクは全力を込めて拳をふるうが、ギュバはツメ一本で受け止め、よそ見しながらあくびした。
それは、まるでボクのやってきた血のにじむような訓練を無駄な努力だと罵倒するかのような態度だった。
「見た感じ、本気で戦っているみたいだけど、呆れるね。あー、退屈だな。いっそ横になろうかな」

「う、うううううう」
結局、ボクはギュバにまともに相手をされないままあしらわれ続け、腹の傷が元で倒れた。
そのままとどめをさされそうになるが、間一髪のところで飛んできた投石に助けられた。
ショウさんが戻ってきたのだ。
「ちっ、俺のいない間にすごい事になってんじゃねぇかよ」
ショウさんはギュバに注意を払いつつ、ボクを後ろの村人たちのいる場所に運んだあと、臨戦態勢をとった。
しかし、それとほぼ同時にギュバの手刀が目の前にせまっていた。
ギリギリのところでガードしたショウさんは、ギュバの足に蹴りを

入れつつ、後退した。
「ちっ」
「やるね。あいさつがわりのこの一撃を防いだのはキミがはじめてだよ。しかも、反撃までしてくるとはね」
「戦闘経験が浅い一般人ばかり狙ってる奴の言いそうなセリフだな」
ショウさんは、ボクや怪我をした村人たちに危害が及ばぬようその場から移動をはじめた。
しかし、わずか数メートルほどでギュバは追いついてきた。
そして、怪我人たちには目もくれず、ショウさんに狙いを定めた。
「はっはっは、楽しいね」
「余裕ぶりやがって。さすがはレベルフォーだな」
「キミもさすがだよ。レベルスリー程度じゃ束になっても勝てないだろうね。だが」
一旦後退し、ショウさんと距離を置いたギュバは黒い炎を飛ばし始めた。
これが噂に聞いていた黒火の上位互換技である魔性の火なのだろう。
威力もスピードも黒火などとは比べものにならないようだ。
このとき、ショウさんが避けた魔性の火はたまたま近くで倒れていた雑兵たちに命中し、激しく燃え始めた。
もがき苦しみながら砂の上を転がり火を消した後も、その痕は煮えたぎるようにじゅわじゅわとうずいていた。
「フー、ありゃ火傷なんてレベルじゃねぇな」
「フフ、まだまだ容赦しないよ」
ギュバは、倒れている部下など意にも介さず、魔性の火を連続で飛ばした。
直撃すれば、その箇所はまともに動かせなくなるくらいに思った方がいい。
ショウさんもそれを承知の上で動いているようだ。
「ちっ、この」
「よーくよけるね。必死さが顔に出てるよ」

「こんな事を繰り返しても、体力を消耗するだけだ。何とかしねぇと」
ショウさんは、しばらく何か考えた様子で避け続けた末、懐からナイフを二本取り出し、飛んできた魔性の火を突き刺した。
そして、その後も次々と飛んでくる魔性の火を突き刺しながら前進した。
「うぉぉぉぉ」
「そんな事をしても刀が燃えるだけだ。バカな事を」
「そいつはどうかな？」
ショウさんは、黒く燃え上がるナイフを一本投げつけた。
ギュバは余裕でかまえていたが、眼前に迫っていたナイフにわずかに目を向けたスキをつかれ、ショウさんに背後をとられた。
「な、何！」
「オラよ！」
ショウさんは、残ったもう一本の燃えるナイフをギュバの背中に突き刺した。
そして、その直後には飛んできた方の燃えるナイフがギュバの右肩に突き刺さった。
「ぐぅ！」
「二兎を追う者は一兎をも得ず。注意を向けるんならどっちかにするんだな」
「う、うううう！」
燃える刀を受けたギュバの背中と右肩は、火を消してもじゅわじゅわとうずいている。
しかし、そのわずか数秒後にはみるみるその痕が消えていくのだった。
「はぁはぁ、やるじゃないか。大した頭脳プレイだったよ」
「攻撃した痕が何事もなかったかのように消えてやがる。完全不死ってやつか」
「そうさ、これが現実だ。どんな攻撃を受けようと私は死なない。レベルフォーのデビレンだからだ！」
「言ってろ。だからって引き下がるほど俺はヤワじゃねぇんだよ」

ショウさんは渾身の蹴りでギュバを攻撃した。
続けて、そこから息をつく間もなく、高速パンチを叩きこんだ。
勢いに押されたギュバは体を反らしつつ、砂をショウさんにぶつけ、何とか態勢を立て直した。
そして、せまってくるショウさんに応戦しつつ、巨大なノコギリを召喚した。
「私がこれを使うという事は相手を強いと認めた証拠だ。胸を張って死んでいけ」
「それがお前の魔性具か？」
「ああ。名はレガーザ。さて、気持ちよく切らせてくれよ」
少し遊び心まじりで戦っていた様子のギュバだったが、いよいよ本気でショウさんの息の根を止めるつもりになったようだ。
ショウさんもまた怒りを保ったまま、それに応えるのだった。
しばらく、お互いに様子見の状態が続いた後、先にショウさんが動いた。
ギュバめがけて走り、腹部に高速のパンチをあぴせた。
ギュバはやや押されつつも、レガーザをふるい、ショウさんの頬を切りつけた。
レガーザを持ったことにより、ギュバの攻撃範囲は広まったものの、逆にその重みで機動力はやや下がっているはず。
ショウさんはその点を考えたのか、スピード重視の戦法で攻めていった。
「オラオラ、スピードが下がってきてんぞ」
「ギリギリのところで致命傷を避けられる。まったく、大した男だ」
お互い決定打を与えられないまま、一進一退の戦いは続いた。
しかし、ギュバは完全不死の力でダメージをすぐに回復するのに対し、ショウさんはダメージを確実に蓄積していく。
多少のかすり傷程度のダメージがほとんどとはいえ、血が出ればもちろんそれは体にひびくもの。
少しずつ動きに変化があらわれている様子がうかがえた。
「はぁ、ぐぐ、う」

「フフフ、けっこうな流血が目立つね。苦しいかい？」
「大したことねぇよ。血なんて体の中でまた作られるんだからよ」
「いいねぇ、その強気発言。ますますキミが負けてくやしそうにしている姿を見たくなってきたよ」
「だったら、さっさとそうさせてみろよ」
ショウさんは、流血などおかまいなしに動き続けた。
さっきまで以上の勢いでガンガンパンチやキックを繰り出していく。
正直、体力はかなり削られているはずだったが、この場合下手に立ち止まっても、標的になりやすいのもたしかだ。
おそらく、少しでも弱みを見せれば、ギュバは容赦なくショウさんの首を狙ってくるだろう。
ボクは棍棒ガドッグを装備し、加勢に向かう事にした。
「いざというときはボクが何とかしないと」
「おっさん、よせ。そのケガじゃかえって足手まといだ」
「ん？　ああ、そうか。少し遊び過ぎたようだね」
ギュバは急に攻撃を止めた後、なぜか後退した。
そして、無線機のようなものを取り出し、小声で誰かと話し始めた。
「フー、どうやらこれまでのようだ。勝負は預けておくよ」
「オイオイオイ。てめぇ、これだけやっといて逃げようってのか。行かせねぇぞ」
「キミと遊ぶのは楽しいけど、仕方ないさ。何事にも優先度というものがあるからね」
ギュバはレガーザをかざし、強力な閃光を発生させた。
それはみるみる大きくなっていき、無慈悲に村全体を覆い尽くしていった。
村人たちは次々と倒れていき、悲鳴が飛び交い始めた。
ボクはどうする事も出来ず、ただ立ち尽くすしかなかった。

第十六話「一発逆転の大イベント」

「う、うう。ここは？」
ギュバの光を浴びた後、気がついたボクはグリル村の中央広場の隅に寝かされていた。
横ではショウさんと村人たちが何やら忙しく動いている。
とりあえず、ギュバとの戦いが終わった事だけは確かなようだ。
しかし、それでも心身に負ったダメージがしばらく残ることになるだろう。
ボクはギュバの顔を思い浮かべながら、涙を流した。
「う、うう」
「ん？　何だ、おっさん。起きて早々べそかきか。大の大人がみっともねぇぞ」
「ショウさん、キミはすごいよね。ギュバ相手にあそこまで戦えるなんて。ボクは歯が立たなかった」
「村の奴らの話じゃ、かなり手負いの状態で奴と戦い始めたそうじゃねぇか。むしろ、健闘した方だと思うがな」
「そうかなぁ」
「ああ。正直、レベルフォー相手にびびらず向かっていけただけでもこの世界じゃすげぇ事なんだぞ。オラ、いつまでもメソメソしてねぇで立て。まだ仕事が残ってんだぞ」
「うん。うんうん」
ボクは涙を拭い、立ち上がった。
よく考えてみれば、落ち込んでいる時間などありはしない。
こうしている間にもマンジイの命が危険にさらされているのだから。
この時点で約束の期限までの残り時間はあと六日。
ボクはすぐに荷物をまとめはじめた。
「もう行くね。仲間がボクの助けを待ってるんだ」
「そうか。俺は村人たちを安全な場所まで逃がした後、またギルゴムを追うつもりだ」

「ギルゴムか。そういえば、前に話してたもんね」
「おっさんは仲間を失うなよ。俺みたいに復讐に生きるなんてろくなもんじゃねぇからな」
「うん。縁があったらまた会おうよ」
ボクはショウさんに手を振りながら、グリル村を出発した。
ここからまた孤独な戦いが始まるのだ。
まずは、残された時間でどうお金を集めるかをよく考えなければならない。
いくら時間がなくても、無計画にデビレンに挑んでは序盤の二の舞になってしまう。
かといって、慎重になり過ぎて避け続けては前に進めない。
正直、頭の中がパンクしそうなくらい考えても、どうすればいいか分からなかった。
「決められた時間内に決められた額を。えーっと、うーん。あー、もう！」
ボクは悩み続けながら足を進めた。
すると、少し舗装された道にたどり着き、その近くに掲示板があるのを見つけた。
掲示板にはデビレンの手配書の他、個人や組織からの依頼も貼られていると聞いたことがある。
依頼なら、デビレンを換金所に引き渡した時にもらえる報奨金の他、依頼主からの謝礼ももらえるし、お金が効率よく稼げるとも思ったが、ここは守銭奴だらけの異世界。
謝礼などほんの申し訳程度のものでしかなく、タマゴ一個とか何の価値があるのか分からないような石ころなんてパターンがザラだった。
そんな中でまともなものといえば、右端の方に掲載してあるスバゲスタン大学のものくらいだった。
これは依頼と言うよりイベントのようなもので、賞金百万ザディンと破格なものの、参加費として十万ザディンをとられる。
はっきりいってギャンブルに近く、下手をすればただ時間、お金、労

力の無駄遣いとなってしまう。
しかし、期限内に二百万ザディインを集めるには他にいい方法はないし、迷っている時間もない。
ボクは決心を固め、スバゲスタン大学に向かう事にした。

「フーッ、ここか」
掲示板エリアから半日ほど歩き続けたボクは、ようやくスバゲスタン大学に到着していた。
前に広がる講堂前には、イベント開催前だというのにすでにたくさんの出場者たちが集まっていた。

数はパッと見て千人くらいで、やはり全体的に若い人が多い。
ボクはなめられないようにと気を引き締めながら、エントリーを済ませた。
このとき受け取ったパンフレットに書かれていたのは、イベントの詳しい内容だった。
この先にあるデビレンのアジトを破壊し、捕まっている人たちを救出すれば賞金百万ザディインがもらえる。
さらに名のあるデビレンを生け捕りにすれば、ボーナスとしてプラス五十万ザディインとあった。
しかし、途中で逃げ帰ったり戦闘不能になった者には一ザディインも支払われず、ケガの治療も一切しないと続けられている。
ボクは今更とは思いながらも、迷い始めてしまった。
エントリーを取り消して地道にデビレンを倒し続ける方がいいかもしれない。
少なくとも時間とお金と労力が無駄になるという事はないし、目標額を期限内に集められる可能性もゼロというわけではない。
だが、じっくりと考えている内に開会式が始まってしまった。
これではもう引き返すことはできない。
こうなった以上はもう持っている力をすべて使うつもりで目的を

達成するしかない。
ボクはあらためて決心を固め、開会式が終わるとすぐに走り出した。
もし、倒れたり逃げたりすれば、それはマンジイを見殺しにするのと同じ。
そう自分に言い聞かせながら、前列へと進んだ。
しかし、千メートルほど進んだところではやくも異変が起こった。
出場者たちが次々と足を押さえて、うずくまりだしたのだ。
どうやら、ところどころにばらまかれているまきびしを踏んでしまったようだ。
ボクは何とか道の端を沿うように歩いて前に進むも、今度はドロドロした液体のようなものが飛んできて炸裂。
そのさらに前方では爆薬のようなものが炸裂し、走っていた出場者たちをまとめて吹き飛ばしていた。
そして、とうとう出場者同士での乱闘騒ぎまではじまってしまった。
いくら全員が競争相手とはいえ、さすがに度が過ぎる。
ボクはドン引きしながら、物陰へと隠れた。
しばらくすると、静かになったので先に進もうとするが、あとからやってきた細目の少年に止められた。
彼は前方をたまに見つつ、小型の端末をすばやく起動させていた。
「ええと、ここはなし。ここもなしと」
「あの、キミは？」
「ああ、邪魔をして申し訳ない。私は　スバゲスタン大学二年のサイオンジ。今は先に進まない方がいいと思います。罠がしかけてあるようですから」
「わ、罠。誰がそんなものを？」
「おそらく、前方を走っていた不良風の男でしょうね。開会式前にそれらしいものをいじってましたし」
「へぇ。ん？　うわわわ」
何と、出場者たちが黒焦げになりながら、ロケットのように飛んで

きた。
おそらく、前方で出場者同士の潰し合いが激化しているのだろう。
ボクはこの大会に対する考えが甘かった事を強く感じた。
「少しくらいは協力し合えると思ってたのに」
「あまり期待はしない方がいいと思いますよ。出場者の中には殺人犯や窃盗犯も混ざってたみたいですから」
「そっか、殺人犯に窃盗犯、ん？　ちょっと待って。そんな人たちが何で野放しになってんの！」
「知らないみたいですね。この世界では窃盗は無期の禁固刑、殺人は被害者に落ち度がなかった場合は年齢や動機に関わらず死刑と厳しく決められています。でも、その先に大きな穴があるんですよ」
「大きな穴？」
「罰金を多く収めた者、デビレン狩りで大きな功績を残した者は減刑、もしくは無罪になるというものです。いかにもデビレンと守銭奴の多い世界らしいでしょう」
「は？　じゃあ」
ボクは少しずつ今の状況を理解し始めた。
この先にいるのはデビレンだけでなく、理不尽な法に守られた凶悪な人間もいるという事だ。
目障りだからと爆薬や銃弾が飛んできても何ら不思議はない。
もはや、サバイバルのようなものといってもいいだろう。
となると、前に戦ったホサカやアゴヒゲ男のように殺さずに止める余裕はない。
ボクは複雑さを払拭できないまま、物陰から飛び出した。
しかし、すぐに後方から迫ってきたスキンヘッドの男に攻撃され、行く手を阻まれてしまった。
「できれば人間同士で争いたくないんだ。通してよ」
「争いたくなければ荷物を置いて大学へ引き返すんだな。先に忠告しといてやるが、俺は人間を殺すのに何の躊躇もしねぇからな」
「キミもいかれた法に守られた犯罪者ってわけか」
「いかれたとはずいぶんだな。優れた戦士や資金援助してくれそうな

金持ちを処罰すればデビレンと戦ううえで大きな損失になる。そんなものもわからねぇのか」
「分からないよ。罪を犯すことが合法だなんて間違ってる」
「けっ。オレはなぁ、おめぇみたいにつまらん正義感をふりかざす奴が大ッ嫌いなんだよ」
スキンヘッド男は武器を装備して振り回し、戦闘が開始されてしまった。
ここからはこんな展開が続くことになる。
たとえ善人が相手だとしても、優勝するためには戦わなければならないのだ。
ボクは迷いを完全に断ち切れないながらも棍棒ガドッグを装備し、力一杯前進していった。

第十七話「最初の鬼門」

「ここでやっと半分くらいってとこかな」
スキンヘッド男と戦い始めた後、ボクはうまく逃げ切り、先に進んでいた。
今のところ、罠との遭遇はない。
というのも、先を進んでいたサイオンジさんの後ろをちゃっかりついていっていたからだ。
しかし、見失わないようにと近づきすぎてしまったことが災いし、捕まってしまった。
「あ、いや、これはね、キミの優秀な判断を信じていれば間違いないかなって」
「はぁ。何で素直に一緒に行きたいと言わないんですか。こそこそするのはやましいところがある証拠ですよ」
「あ、ああ、そうだね。悪かったよ」
「まぁいいでしょう。あなたは悪い人じゃなさそうですし、手を組んでおくのもいいかもしれませんしね」
サイオンジさんはそう言うと、端末を素早く操作しながら再び進行をはじめ、ボクも後に続いた。
それからしばらく進むと、来た道を戻り始めている出場者や負傷して倒れている出場者を見かけるようになった。
そろそろこの大会も佳境に入ってきたという事だろう。
ここからは本格的にデビレン側との戦闘になるはず。
と思われたが、意外にもいくら進んでもデビレンたちとの遭遇はなく、冷静だったサイオンジさんに動揺が見え始めた。
「変ですね。雑兵がわんさか待ち構えていると予測してたんですけど」
「先に通った人たちが倒していったんじゃないかな？」
「それにしては、戦闘のあった形跡があまりない気がするんですけど」
「え？　うん、まぁ、それはそうだけど」
結局、疑問は解けないまま、アジトの前まで進んでしまった。

しかし、ここでもなぜか門が開いたままという予想だにしない光景が待っていた。
「見張りもいませんし、鍵もかかってません。たしかに変ですね」
「とりあえず、先に進んでみれば何か分かるよ」
「待ってください、ニシさん。罠が！」
「え？　罠」
「ないんです」
「な、ないの！　だったらいいじゃないか」
「いえ、この流れだと罠の一つくらいあっても。でもどの端末にもなんの反応もありませんし」
ここでも疑問を抱いたまま門をくぐり、特に何事もなくアジトの入り口前へ進んだ。
だが、その先で待っていたのは、山積みになった出場者たちの上に座り込むレベルフォーのデビレンだった。
角刈り頭でニコニコしているが、発せられる殺気は前に戦ったギュバと遜色ない。
ボクはすぐに戦闘態勢をとった。
「なるほど、キミがここの門番ってわけか」
「いいや、俺はこのアジトの者じゃねぇ。近くで楽しそうなイベントがあるって聞いたから遊びに来ただけだ。ま、拍子抜けだったがな」
「何にせよ、やるしかないようだね。覚悟はできているよ」
「ああ。だが、その前に、オラ！」
角刈りデビレンは魔性の火を連続で飛ばした。
それはぐるりと半回転しながら、後ろで端末を操作していたサイオンジさんに命中した。
ボクは駆け付けようとするも、すぐに角刈りデビレンに追撃されてしまった。
「く、サイオンジさん」
「う、うう。熱い。あ、あああ」
「フン、その端末にいろいろ入ってんだろ。知らないとでも思ったの

か？」
「な、なぜだ？　なぜ、キミがそんな情報を知ってるんだ？」
「俺らレベルフォーの持つ千里眼はな、極限まで鍛えればターゲットの心の中まで読めちまうんだよ。もちろん集中力が必要だから戦闘中はうかつに使えないがな」
「それじゃあ、他の出場者たちを倒してからボクたちがくるまでに」
「そうだ。ま、見たのはそっちのガキだけだが、問題はないよな。普通に戦ってもお前に負けるわけはねぇしな」
　角刈りデビレンはへらへら笑って見下しながら、挑発を続けた。
　しかし、ボクは冷静さを失わず、真っ向から角刈りデビレンに殴り掛かった。
　一発目は避けられたものの、すぐに繰り出した二発目が角刈りデビレンの腹部にヒットした。
「ぐうう、いいパンチだ」
「どうだい？　見下してたやつにやられる気分は」
「やられる気分？　やられるっていうのはこういう事をいうんだ！」
　角刈りデビレンは口から魔性の火を一気に放出した。
　そして、立て続けに両手からも魔性の火を放出し、直後にジャンプ。
　上空から勢いよく、膝蹴りを繰り出した。
　ボクも拳をかまえ相殺にかかるが、腕をわずかにひねってしまった。
「うう、このっ！」
「フフ、必死だな。もっと戦いを楽しまなきゃ」
　ボクと角刈りデビレンの戦いはその後も続くが、拮抗しているとは言い難かった。
　真剣に拳をふるうボクに対し、角刈りデビレンはへらへら笑ってふざけている感じだという事だ。
「フフ、ハハ、レベルフォーの情報を知っているなら、よく分かっているはずだ。必死に動けば動くほど無駄になるという事を」
「ちっ、遊んでいるね。不死ゆえの余裕ってやつか」
「さぁ、ガンガン攻撃して来いよ。これじゃあ暇つぶしにもならない

ぜ」
「まぁ、あまり気分のいいものじゃないが、そうしたけりゃするがいいさ」
ボクは今、ただやみくもに攻撃を繰り返しているのではなかった。
ここに来る前にどういう手順でレベルフォーに対抗するかは考えていたのだ。
「今か。いや、まだだね」
「ちっ、こんだけなめきった態度をとってもキレないとは、だったら」
角刈りデビレンは変顔をしながら横歩きし、再び挑発をはじめた。
そのあまりに人を馬鹿にした態度にボクはついに怒りを爆発させた。
「馬鹿にすんのも大概にしろ！」
「はーはは、怒ったか。いいぜ、それでいい」
スキップしながら身構えもしない角刈りデビレンは、ボクの棍棒ガドッグの一撃をモロに受けて吹き飛んだ。
「あーっはっはっは」
「笑いながら殴られる奴なんて初めて見たよ」
「へ、へへへ」
角刈りデビレンはそのまま床へたたきつけられ、頭を強打。
体をピクピク震わせながらダウンした。
「す、すごいパンチもらっちゃったぜ。なめてたよ、お前の事。きっちりお返ししないとな」
「お返しだって？　この状態でそんな事ができると思うかい？」
「はは、だからこっちは不死身、ん？」
すでに角刈りデビレンの両手には、ボクが用意した手錠がかけられていた。
倒れて動きが止まり無防備になったその数秒をボクが見逃すはずはなかったのだ。
「何の考えもなしにボクがここに来ると思ったのかのかい。さてと」
「うう、まさか最初からこれを狙って。だが、甘いんだよ！」
角刈りデビレンは立ち上がり、飛び蹴りしながら前進してきた。

わずかに反応が遅れてしまったボクは額を攻撃され、激しく流血した。
「うぐ」
「ちぇ、はずれたか。脳をつぶすつもりだったのに」
薄ら笑いする角刈りデビレンの手についていた手錠ははずれていた。
そして、もちろんさっきの戦いでボクに受けた傷もきれいに消えており、角刈りデビレンにとってのさっきまでの戦いはなかったこと同然になっていた。
「フフ、こんな状況はじめてだったから正直あせったけど、力を込めたら簡単に引きちぎれたよ、こんな手錠なんか」
「ぐっ！」
「その表情だと他に手は考えてなかったみたいだな。まぁ、バカにしてはいい作戦だったよ」
「こいつは一本とられちゃったな。なめてたよ、レベルフォーの力を」
「その結果がこれさ。さぁ、今度はふざけなしで戦ってやるぜ」
再び、ボクと角刈りデビレンの戦いがはじまった。
しかし、さっきまでとはまるで状況が違う。
ボクは額にダメージを負っているうえ、手錠で拘束するという対処法も破られてしまった。
他に何かいい手はないだろうかと考えるも、もちろんすぐに思い浮かびはしない。
「どうすればいい。どうすれば不死身のこいつを」
「ホラ、戦闘中に何をぼさっとしててんだ！」
「ぐう」
ボクは肩とわき腹をざっくり斬られてしまった。
戦いに集中しなければならないのは分かっているが、戦ったところで相手が不死身ではどうにもならない。
まずは冷静さを失わないのが一番だ。
もし、無駄だと諦めて抵抗をやめれば、そこで死は確定してしまう。
何とか乱れ始めた心を支え、戦い続けた。

「ったく。何やってんだ、ボクは。こんなに簡単にあきらめるなんてどうかしてたよ」
「へぇ、この状況でまだ戦意喪失しないとはなかなかのモンだ。だが、ここまでにしとくか。これ以上ここで遊んで、上にばれたらひどいお叱りを受けるだろうからな」
「上？　お叱り？」
「いや、こっちの話だ。ああ、一つだけ忠告しとくよ。この先には進まない方がいいぜ。後悔する事になるからな」
角刈りデビレンは謎めいた笑みを浮かべながら、走り去った。
かなり気になったが、今はサイオンジさんの救助が最優先。
ボクは持っていた布と消毒液を取り出し、応急処置を開始した。
「少ししみるけど、辛抱してね」
「ニシさん、すいません。私はもうこの先には進めません」
「え？　ど、どうして？」
「あんな化け物みたいなデビレンと戦うなんてできません。常識の通用する相手じゃなかった。少しくらい頭がよければどうにかなると思ってたのが間違いだったんです」
サイオンジさんはうつろな目に涙を浮かべながら震え、治療が終わっても立ち上がろうとはしなかった。
今まで挫折を知らなかったであろうエリートに下手な慰めなど何の効果もないだろう。
ボクは少々不安を抱えながらもサイオンジさんと別れ、一人でアジト内へ入っていった。

第十八話「アジト潜入」

「フー、あいかわらず静かだね」
アジトへ入った後、ボクは周りに十分な注意を払いながら、捕まっている人たちを探していた。
すでに体力的な余裕はなく、アジトに入る前に負った傷もうずく。
幸いにも敵襲はまだなかったが、それが逆に不安を増長させていく。
ボクは、とにかくいつ何が起こってもいいようにと、戦闘準備を整え始めた。
「うーう、ん？　これって」
ボクは何者かのかすかな気配に気づき、進行を止めた。
すると、前方の物陰から黒髪を結った若い女性が刀を持って飛び出し、切りかかってきた。
「はっ！」
「うわ、な、何すんだよ！」
ボクは抵抗するまもなく押し倒され、マウントをとられてしまった。
続けて刀を喉に突きつけられ、完全に身動きを封じられてしまった。
「あ、あの、お嬢さん、ボクは人間だよ。大会の出場者だって」
「人間？　あら、本当だ。ごめんなさい。あんまり強い殺気を放ってたからついデビレンかと思って」
女性は平謝りしながら刀を下げ、ボクを解放した。
しかし、まだ何かを警戒しているらしく、周りを忙しく見渡し始めた。
「ねぇ、あなたは何か感じない？　このアジトの違和感みたいなもの」
「たしかにね。罠にしろ、敵の数にしろ、少なすぎて逆に不安に感じてたところさ」
「ええ。でも、まぁ、もっと奥に進んでいけば何か分かると思うの。一

人より二人の方がいいに決まってるし、一緒に来てくれない？」
「一緒にって、キミも大会の出場者だよね？」
「ええ。スバゲスタン大学三年の松永（まつなが）スズネよ。スズでいいわよ」
「いや。ボクとキミは今は競争相手なわけだし。それに女の子と二人っきりっていうのはちょっと」
「そーんな細かい事気にしなくていいじゃん。ほら、行こ」
スズは半ば強引にボクの手を引き、ぐいぐい奥へ進み始めた。
正直、性格といい行動といい、かなり珍しいタイプの娘だ。
今までボクが出会った若い娘といえば、この醜い容姿と太目な体系に対して罵詈雑言を浴びせるか、口を聞こうともしないのがほとんどだった。
それがもはや当り前だと思っていただけに彼女の天真爛漫さは、ボクに複雑な感情を抱かせた。
「うーん。嬉しいような、緊張するような」
「ねぇ。今、我慢できない、食べたいって聞こえたんだけど」
「は？　いやいやいや、空耳だよ。ボクはキミを食べようなんて！」
「あ、いや、あなたじゃなくて、道の奥の方から」
「え？　ああ、そういえば、何か声が聞こえるような」
声は先に見える通路の左端の方から聞こえた。
耳を澄ましながら先へ進むと、薄暗い大広間の隅に牢獄があるのを発見した。
そこは血と肉の腐ったニオイがあたりを覆い尽くしており、すさまじさがすぐにわかった。
ズラリと並べられた牢の中には、痩せこけてボロボロの服を着た人間たちがびっしりと入れられていた。
ほとんどの者はうつろな目をしており、まるで魂を抜かれたようだった。
彼らはおそらくこの劣悪な環境で寝起きし、毎日何らかの労働を強いられているものと思われる。
そして、食事はあたりに散乱したひび割れた食器に入れられた腐り

かけのパンと濁った水くらい。
当然、病死する者もいるだろうが、デビレンたちにとって人間たちは「死ねばまた新たにさらってくればいい」程度の存在。
まったく気にかける事はないのだろう。
「ひどい話だね」
「なぁ、あんたら、た、べものをくれ。たのむ」
「なんか食いつきそうな目で見てるんだけど」
「こんな環境じゃおかしくもなるわよ。とりあえず、みんなを牢から出しましょ。ん？　ニシさん、気づいた？」
「うん、来るよ」
強烈な殺気と共にデビレンたちが牢獄へとやってきた。
リーダーと思われるのは、白く長い髪をしたレベルフォーの女。
一見するとおとなしそうに見えたが、しばらく歩くと、早々とスズに攻撃してきた。
「どうやら、ここへ来れたのはあなたたちだけのようね」
「レベルフォーのジェリラね。久々にいい戦いが出来そうだわ」
スズは右に背負っていた刀を抜き、連続突きで繰り出したのち、周りの雑兵たちを切りつつ、ジェリラとの距離をとった。
「これは手強いわね。ニシさん、ここからは激しい展開になるから、捕虜たちの護衛をお願いできるかしら？」
「う、うん。まかせて」
「フン、あんな手負いのブタさんに助けを仰ぐとはね」
ジェリラは前進しながら体を乱回転させ、魔性の火を飛ばしまくった。
これではうかつに突っ込んだりすれば、命取りになるだろう。
ついさっき、隙をつくどころか先手を取られてしまったのが何よりの証拠だ。
うまく攻撃できたとしても、カウンターを食らう可能性もある。
そのためか、スズは動けずにいたが、そんなスキを突かれるような形でジェリラの接近を許して、胸に手を置かれてしまう。
「ぐっ」

「フフ、ずいぶん心臓がばくばくいってるじゃないの」
ジェリラは、スズの頬を軽く爪で切りつけた後、再び距離をとり、杖型の魔性具を召還した。
スズは、ジェリラから受けた一撃で吹っ切れのか、顔をぱんぱんと叩き、反撃を開始した。
「あたしらしくなかったわね。深く考えすぎるなんて」
「そうそう、低俗な人間には似合わないわよ。頭を使うなんて」
「さぁ、もう出し惜しみはなしにしてよ」
このとき、スズはジェリラの持つ魔性具を見ていた。
どんな得体のしれない力が込められているか興味があるし、戦ってもみたいと思っていたのだろうか。
だが、ジェリラはなぜか魔性具を武器として振り回すだけで、能力を発動させる様子はない。
「フフフ、たーのしい」
「ねぇ、さっさとその魔性具に隠してる力を出してみなさいよ。減るもんでもないでしょ」
「フフ、ダーメ。あなただって左の刀を使ってないし、フェアじゃないじゃないの」
「不死身の体まで持ってて今更フェアも何もないでしょ」
全力を促しつつ、スズは連続突きで攻め続ける。
しかし、さっきの雑兵たちを切った時のようにすんなりはいかない。
やはり、やや変則的な動きで攻めないと、急所は狙えないようだ。
その後はしばらく押し合った後、ジェリラの心臓を狙って突きを繰り出すが、わずかにずれ、右肩にあたってしまった。
「フフ、そんな簡単に急所はやらないわ」
「完全不死とやらがあっても、心臓をやられんのはこわいの？」
「ごまかしても打つ手があるのは知ってるのよ。ほーら」
ジェリラもまたスズの急所を狙っているのがうかがえる。
お互いにしばらく激しく押し合った後に距離をとり、横歩きしながらにらみ合うと、一気に動き出した。

いきおいよく接近し、刀突きの連打と魔性具の連打の攻防がはじまった。
しかし、やはりこれが長引けば、不死身であるジェリラに分があるだろう。
それを予想していたのかスズは、息切れがはじまる前にジェリラに蹴りを入れつつ距離をとり、とびあがった。
すぐさま身構えるジェリラだったが、スズは前面の床を突きで砕き、床の破片と粉塵で彼女の視界を奪う作戦に出た。
「はぁ、はっ！」
ジェリラの死角からスズは、頭を狙って奇襲をかける。
体を何とか反らしたジェリラは近くで倒れていた部下をつかむと、彼を盾にしてスズの追撃をガードしてしまった。
今度は逆に視界を奪われたスズはそのまま部下ごと魔性具の突きをくらい、胸を負傷してしまった。
「あなた、いい趣味してるじゃない。自分の部下まで」
「そんなところに倒れてるほうが悪いんじゃないの」
どんなに忠実な部下でさえ、ジェリラにとってはただの捨て駒。
つかまえた人間たち同様、代わりはいくらでもいる存在に過ぎないのだろう。
もちろん、その後に盾にされた部下が息絶えても、ジェリラの顔色が変わることはなかった。
「はぁ、服が汚れちゃったじゃないの。役に立たない盾ね」
「フー。うーん」
ここでスズは一旦攻撃をやめて、立ち止まった。
そして、周りをきょろきょろと見始めた。
「やっぱり変ね。ここに入った時から頭の中に引っかかってた。すんなり中に入れてこの場所に到達するまで敵襲の一つもなかった。不用心すぎる」
「そうかしら。よくある事じゃないの」
「あんまりとぼけると怒るわよ。何を企んでんの？」
「フー、そうね。それもおもしろいかもしれないし、今更どうにもでき

ないしね。このアジトはね、もうすぐ跡形もなく消し飛ぶのよ。中にしかけた爆弾でね」
ジェリラの話す計画は次のようなものだった。
まずはノコノコやってきたボクたち大会の出場者を中に招き入れる。
その後は普通に考えれば、捕まっている人たちを助けるために牢獄に向かうはず。
そして、そこまで進んだ場合、容易には外に出る事はできなくなる。
その時点で爆弾のタイマーを入れ、足止めしつつ、爆破時刻を待つというものだ。
この爆発で生き残れるのは、完全不死であるレベルフォーのジェリラのみ。
ボクたちはもちろん、アジト内にいる者は皆殺しにするつもりなのだ。
「じゃあ、後ろで倒れているあなたの部下たちも」
「ええ。あの子たちはもういらないと思ってたから。ついでに掃除しとこうかと思って」
「聞いていたとおりね。どんだけ荒んでるのよ、あなたたち」
「フフ、デビレンってそういうものよ。ねぇ、もっとバカみたいにあたふたしたら？　それを期待してわざわざ話したんだから」
おそらく、アジト全体を吹き飛ばす事を考えれば、設置されている爆弾は一つや二つではないはず。
爆破前に一つずつ解除していくなんてまず不可能だ。
「はぁ、なんともご苦労な事じゃない。あたしたち数人を消すためにそこまでやるなんて」
「スズ、どうするの？　このままじゃ」
「あわてないで。こっちだって奥の手位残してあるもの。捕虜たちをあたしの後ろに集めてくれる？」
スズは持っていた刀を鞘に納め、左に背負っていた刀を抜いた。
すると、周りの温度がだんだんと上昇し始め、刀身には火がついた。
何が始まるかは知らないが、ボクはすぐに棍棒ガドッグで牢を破壊

し、捕虜たちをスズの後ろに集めた。
「ど、どうするの？」
「なるべくぎゅうぎゅうに集まって。それと先に謝っとくけど、火傷くらいは覚悟しといてね」
スズは燃える刀から巨大な炎を放出し、自身とボク、捕虜たちを包み込んだ。
そこからは溶けてしまうような熱さに耐え抜く時間が続き、外からは巨大な爆音が聞こえた。
その直後、炎は少しずつ消滅していき、その先には広がっていたのは滅茶苦茶になったアジトの残骸だった。
信じがたいが、燃える刀の炎で爆発を相殺したという事なのだろう。
しかし、無事を喜ぶ暇もなく、ほぼ再生を終えたジェリラが迫ってきた。
「まさかあれだけの爆発を相殺するとはね。私との戦いで使わなかったのは力を温存し解くためだったのね」
「備えあれば患いなしっていうでしょ。さぁ、第二ラウンドならうけてたつわよ」
「やめとくわ。ミミッギュを使われたらシャレにならないしね」
ジェリラは完全に再生を終えたきれいな姿で去っていった。
正直くやしいが、今は深追いしている場合じゃない。
ボクはすぐに傷ついた捕虜たちの救助に取りかかった。

第十九話「デビレンたちの悪しき計画」

「さて、体はもう大丈夫かな」
捕虜たちの手当てを始めた後、ボクは後からやってきたスバゲスタン大学の救護部隊に助けられ、手厚い施しを受けていた。
大学内でケガの治療を受けた後、十分な食事も与えられた。
そして、大会の賞金と討ち取ったデビレンの報奨金として百二十万ザディインを贈呈された。
ようやく、マンジイを救うためのお金がすべて揃ったのだった。
こうなると、もう手負いだからって休んではいられない。
すぐに出発の準備を整えた後、スズに大会でのお礼を言いに行った。
「えーっと。あ、いたいた。スズ、ちょっといいかな？」
「ん？　あら、ケガはもういいの？」
「うん、仲間がボクの助けを待ってるんだ。はやくお金を届けないといけない」
「仲間？　そっか、そういう事情があったのね。もし、よかったらだけど、そこまで送ってあげよっか？」
「え？　そんな事できるの？」
「ええ。ついてきて」
スズはボクを巨大な格納庫に案内し、奥にあった戦闘機のようなものに乗せた。
まもなくパイロットと思われる壮年の男性が現れ、まさかの空の旅がはじまってしまった。

まではよかったものの、機内は武器であふれ、火薬と鉛のにおいが充満していた。
かなり落ち着かない状況だったが、スズは場慣れしているのか、ただ淡々と刀の手入れをはじめていた。
「さぁてと、着くまでに終わらせないとね」
「ねぇ、前から気になっていたけど、スバゲスタン大学って何を教えて

るとこなんだい？」
「戦闘の技術よ。おもにデビレン狩りするためのね」
「デビレン狩りを？　ああ、なるほど。こんな世界なんだし、そういう大学があっても不思議はないか」
「まぁ、大学といっても授業を受けたりするのは一年の時だけで、二年からはデビレン狩りしながらフィールドワークしてレポートを提出するのがメインなんだけどね。で、ノルマがこなせなければ留年か退学ってわけ」
「学生も大変なんだね。ん？　そろそろみたいだ」
　見覚えのある景色が窓の向こうに見え始めた。
　その後、戦闘機が町に着陸すると、ボクは飛び出してマンジイのいる診療所へ飛び込んだ。
　幸いにも借金取りと思われる人たちの姿はまだなく、すぐにマンジイの無事も確認できた。
　ボクは床に手をつき、心から喜びの声を上げた。
「うう、よかった。本当によかった」
「まさか、こんな年寄りを救うためにここまでしてくれるとはの。ニシくん、本当にありがとう」
「お礼なんて。ボクがマンジイを必要と思うからやった事です。また一緒に旅をしてくれますか？」
「もちろんじゃ。世話になった分はちゃんと返さんといかんしの」
　マンジイはすぐに出発を希望したが、傷の完治がまだだったため、退院許可はおりなかった。
　まぁ、万全の状態でないのはボクも同じなので、旅はしばらくお預け。
　まずは集めたお金をマンジイから教わった住所に送った後、スズの元に戻った。
「ごめん。今済んだよ」
「ええ。仲間の方は大丈夫だったの？」
「うん。送金も終わったし、後は傷が治るのを待つだけ。それで、その間に聞いておきたいことがあるんだけど」

「ええ、どうぞ」
「ジェリラと戦った時に言ってたミミッギュって何？」
「ああ、それね。ちょっと待ってね」
スズは懐からいかにも固そうな鉱石のようなものを取り出した。
これがレベルフォーのデビレンたちが唯一おそれるミミッギュなのだそうだ。
ボクが顔を近づけてみると、まるで周りを威嚇するかのような感じがするのが分かった。
「すごい力を感じる。まるで心の中を洗われるような感じだ」
「そうでしょう。ミミッギュにはね、生物の持つ邪気を消滅させる力があるの」
「邪気って、デビレンの力も？」
「ええ。今のところ、不死であるレベルフォーへの唯一の対抗手段といっていいでしょうね」
「そうか。やっぱりちゃんと対抗手段はあったんだ。よかった」
「でもね、そう喜んでばかりもいられないみたい。実はね、吹き飛んだアジトの残骸の中から文書が見つかったって教授から連絡があったばかりなの。これ」
スズは端末に保存してあったメール文をボクに見せてくれた。
内容は、デビレンたちが人間をデビレンに変える卑劣の素（もと）という薬を開発し、配っているという事。
卑劣の素とは、レベルスリーのデビレンが邪心の強い人間を吸収する事で逆に肉体を乗っ取られレベルフォーになるという現象を比較的簡易に実現できる薬。
具体的にいうと、飲んだ人間の邪心がすごく強ければ、それだけでレベルフォーのデビレンが誕生するという事らしい。
だが、それは過程に過ぎず、捕えた人間を使ってアジトで実験などを繰り返し、大幅な薬の改良が進んでいるそうだ。
おもな改良点としては、強い邪心にとどまらず、弱い邪心を持つ人間でもデビレン化できるようにする事。
この弱い邪心と言うのは具体的には書かれていないが、例えば軽い

嘘をついた、ケンカで人を殴った程度の事も含まれるのかもしれない。
もし、そうなれば、今とは比べものにならないスピードでデビレンたちが増殖していく事だろう。
上級デビレンが何千人、何万人と増えるとなると、まさに地獄絵図だ。
レベルフォーの強さを体験した後だったこともあり、その内容はあまりに衝撃的過ぎたが、文書にはまだ続きがあった。
今でこそ、卑劣の素は秘密裏に取引されているが、いずれはその存在を公表してバンバン配布するつもりらしい。
そのためには、まず公共の電波を使ってデビレンの強さをアピールする。
それにより、邪心を持たない善人の中にもデビレンの力に魅了され、デビレン化するためにわざと悪い事をする人間が現れる事も予測されていた。
つまり、邪心を持つ人間に卑劣の素を配るのとは逆で、卑劣の素を飲んでデビレン化するためにわざと悪に身を落とし、邪心を持とうとする人間も現れるかもしれないという事だ。
実際、ボクが前にグリル村で戦ったアゴヒゲの男もそんな一人だったし、完全不死に千里眼と、魅力的な能力を得るためにデビレンになりたいと考える人間がいてもたしかにおかしくない。
こんな情報を聞いてしまえば、以前のボクなら、脅えて戦い続けようという気力が起こらなかっただろう。
しかし、今はもう違う。
脅えようが、逃げようが、その先に日本へ帰る道がないのは分かっているのだから。
「強くならなきゃいけない理由がさらに増えたってだけの話だ。マンジイが回復するまで時間もある事だし、やるかな」
ボクは棍棒ガドッグを装備し、さっそく訓練を開始した。
「少しでも、少しでも持続時間を長くできるようにしないと」
「ガッツあるわね。送ってきた教授は、最悪詰むかもしれないなんて

大騒ぎしてたのに。ところで、その棍棒って覚醒丸を使って作ったもの？」
「あ、うん。そうだけど。どうしてわかるの？」
「においと雰囲気でなんとなくね。あたしの持っている燃える刀ヘルジャムも覚醒丸を使って作られたものだから。使用者の体内の熱を炎に変換して刀身に纏わせるってやつ」
「そうか。ジェリラ戦を見た感じ、使い手としてはキミの方が先輩だろうね」
　ボクはいい機会なので、棍棒ガドッグを使いこなせているかどうかをスズに判定してもらう事にした。
　まずは近くの森に移動し、出くわした雑兵の群れと戦闘開始。
　少しも反撃を食らうことなく、全滅させた。
「はぁ、はぁ。どうかな？」
「うーん、そうね。中の下ってとこかしら」
「え？　中の下って。ちゃんと戦ったのに何がいけないの？　ねぇ、ねぇ」
「まぁ、興奮しないで。順を追って話すから」
　スズが指摘したのは、次の点だった。
　それは、少しの間使っただけなのに、力を消費しすぎているという事。
　さっきのは雑兵が相手だったからよかったものの、レベルフォークラスが相手となるとたしかに致命的だ。
　そこは、序盤だけ温存しながら戦うとかいくらか方法はあるだろうが、ボクの場合はそれ以前の問題らしい。
「エネルギーの無駄遣いは明白。単純に敵を倒すだけなら、さっきの半分以下の力で十分なのに、かなりオーバーキルしてると言えるわ」
「それって、やっぱりまずいものなの？」
「まぁ、損しているのはたしかでしょ。例えるなら、千ザディンで買える物をわざわざ一万ザディンで買うとか、素手で壊せるものを爆薬を使って壊すとかね」
「な、なるほど。でもさ、覚醒丸って使用者の力を強制的に引き出すも

のなんだし、しかたないとも思うんだけど」
「あたしも昔はそう思ってた。で、力任せに使ってよく体の熱がなくなって凍えるような思いを繰り返すうち、うまく力をコントロールする術を身に着けていったのね」
「コントロールか。一回の攻撃に必要な力だけを引き出せるようになれば、過度な温存は必要なくなる。これからの戦いでは重要だと言えるね」
ボクは旅を再開するまでの間、棍棒ガドッグ、小刀ザクメル、小銃イアチャの力のコントロールを進めることにした。
戦いに敗北する事、そしてそれ以上にマンジイに辛い思いをさせることは絶対にしたくない。
そう心に誓いながら、さらに強くなる決意をした。

第二十話「名コンビ復活」

「はぁ、はぁ。よーし、いい調子だ」
武器のコントロール訓練をはじめてから二週間後。
ボクは着実に力をつけていた。

決してスムーズに進んでいるとはいえなかったが、コツは分かってきたし、何よりスズが何を約束したわけでもないのに同行して助言し、訓練に付き合ってくれる。
その成果はもちろん実戦にも反映され始め、この後に遭遇した雑兵十体を汗一つかかずに全滅させた。
「どうかな？」
「いいんじゃない。力の配分もかなりうまくなってきたし、二週間前とは見違えるようだわ」
「そうか。よーし、この調子でばんばん強くなるぞ」
「あ、訓練は少し休憩ね。あたしはこれから近くの川で水浴の時間だから」
「え？　水浴？　女子大生が野外でそんな事を！」
「そんな驚く事？　毎日してる事よ。ニシさんもたまにはやった方がいいわよ。あ、別にのぞいたりしないから」
「いや、別に疑ってないけど」
「ん？　ちょっと待って。う！　このきったないヘドロがさらに腐ったようなひどいにおい」
スズは急にしかめた顔をして、そわそわしはじめた。
それが終わったかと思えば、今度はボクの顔をじいっと見始めた。
「ねぇ、あなたは何も感じないの？」
「え、い、いや。ボクのにおいがそんなにひどいのかな？」
「いいえ、これは……　卑劣の素のにおいに間違いないわ」
「卑劣の素？　じゃあ、近くで取引が行われているとか？」
「可能性は高いわ。ええと、においがするのは……　こっちよ」
ボクとスズはにおいをたよりに取引が行われていると思われる繁

華街に入った。
だが、時すでに遅く、卑劣の素は取引相手と思われる中年男性の手に渡った後だった。
すぐにお縄にしたいところだったが、前にはレベルスリーのモヒカン頭をしたデビレンと雑兵たちがいた。
全員で向ってくるかと思われたが、雑兵たちは中年男性を守るようにして逃げ出し、モヒカンデビレンだけが前に立ちはだかった。
「スバゲスタン大学の松永スズネだな。ここは通さねぇぞ」
「スズ、ここはまかせて」
ボクはスズに雑兵たちの後を追わせ、単独でモヒカンデビレンに向っていった。
不安や恐怖は、もう一切なかった。
レベルフォーとの戦いを経験し、持ち武器のコントロールにまで至った今、レベルスリー相手に負けることなどあり得ない。
軽く棍棒ガドッグの連打を浴びせて打ち負かした。
「キミたちレベルスリーの再生力なんてたかが知れてる。暴れないでくれよ」
ボクは倒れたモヒカンデビレンを押さえつけ、手錠で拘束した。
しかし、所持品の中から卑劣の素らしきものを発見する事はできなかった。
「さっき渡してた分だけだったのかな。ん？　これ」
殺気を感じ取り、振り向いたボクの視線の先から帽子をかぶった大柄なデビレンがやってきた。
肌の色や顔の異様な模様からして、レベルフォーに間違いない。
やはりその凄まじい威圧感はレベルツーやレベルスリーのものとはけた外れだ。

ボクは飲まれないように、がっちりと戦闘態勢を固めた。
「スズが持っていたリストに載っていた。レベルフォーのアイーゲ。魔性具はバズーカ型のペパル」
「ああ、そうだ。で、お前が俺の相手をしてくれんのか？　退屈しのぎくらいにはなってくれよ」
アイーゲはバズーカ型の魔性具ペパルをかまえ、砲弾を発射した。
ここは繁華街だが、デビレンであるアイーゲにとっては何の問題もないことだ。
状況を見たボクは南の方角にある海岸の方へと走り始めた。
もちろんアイーゲも砲弾を飛ばしながら後を追う。
さすがに逃げきれないと判断したボクは小刀ザクメルを装備し、高速移動で海岸にたどり着いた。
しかし、ゆっくり休む間もなく、アイーゲも追いつき、容赦ない砲弾の嵐が襲い掛かってきた。
「くっ」
「フン、バカな奴だ。無駄な体力を使うだけだというのに、わざわざ場所を変えるとは」
「そりゃそうさ。キミを倒しても、一般人に死なれでもしたら、勝ちとはいえないからね」
「俺を倒す？　フフ、戯言を。完全不死である俺をどう倒すっていうんだ」
たしかにこの状況はまずいだろう。
完全不死であるレベルフォーのアイーゲに勝つにはスズの持つミミッギュが必要だが、別行動しているうえに勝手に元いた繁華街からはなれてしまった。
おまけに通信手段もないため、呼び出すこともできなかった。

「はあ、何やってんだ。ボクのアホ」
「何をごちゃごちゃ言ってんだ。来ないならこっちから行くぞ」
アイーゲはペパルによる砲撃に加え、魔性の火もまぜて攻撃した。
ボクはまだ息切れこそしていないが、なかなかアイーゲに近づけない。
もっとも、近づけたところで今はアイーゲを倒すすべがないのだが。
「身を隠したところで、レベルフォークラスは千里眼っていう感知技を持っている。あー、もうどうすればいいんだ」
「まったく。これじゃあ、さすがにかわいそうだな」
アイーゲは急に攻撃するのをやめた。
そして、ボクにおとなしく降参するように促すのだった。
「このまま戦っても勝負は見えているだろ。だからついてこい。お前は体力もあるし、新薬のいい実験台になる」
「実験台？　そうか、なめられたもんだね。ボクを完全に見下してるようだ」
アイーゲの一言で吹っ切れたボクはさっき以上の勢いで前進した。
再び襲いくる砲弾と魔性の火の間を潜り抜け、何とかアイーゲに近づいた。
「はぁ、はぁ」
「馬鹿な奴だ。たとえその気がなくとも、とりあえず頭を下げていれば生きながらえたものを」
「たとえ演技でもデビレンに頭なんか下げれるか！　こうなったら何が何でもキミがくやしがる顔を見させてもらうよ」
今度はボクの棍棒ガドッグによる猛反撃がはじまった。

アイーゲはペパルで応戦するも、盾代わりに防御するのがやっと。
やはり接近戦に関しては、わずかにボクの方が上のようだ。
しばらく攻防が続いた後、ボクの蹴りがアイーゲを吹っ飛ばした。
しかし、アイーゲは何とか受け身をとると、すぐに逃走して距離をとりはじめるのだった。
「フン」
「くっ、接近戦がそんなに嫌か？」
「ああ、嫌だね。不得手とわかっていて、わざわざ戦い続ける馬鹿がいるかよ」
アイーゲは十分に距離をとると、再びペパルをかまえ、弾を連続で発射した。
だが、それはさっきまでの砲弾ではなく、手のひらくらいの大きさの紙だった。
「これが俺の魔性具ペパルに宿っている紙を生成し、武器とする能力だ」
「紙か。どう考えても戦闘向きじゃないと思うけど」
「そいつはどうかな。ほい」
ペパルから飛び出した大量の紙がボクめがけて襲い掛かった。
数が多く、普通の砲弾よりもよけるのは大変だが、それだけではない。
ペパルから発射された後もアイーゲの意思であやつることができ、分裂や回転など変則的な動きも可能なようだ。
そして紙一枚一枚の耐久性も極めて高かった。
ジャンケンでパーがグーに勝つのと同じようにボクの拳を包み込んで、勢いを殺した。
「くそ、こんな紙切れなんかに」
拳に気を取られている隙に今度は顔や足めがけて大量の紙がとんできて、シュッと切り裂いた。
そして、とどめとばかりにとんできた大きな紙が両目の下と足に貼

りつき、呼吸と動きを封じた。
「う、ぶぶぶ」
「このまま窒息死させるのも悪くないが、やはり派手にいかないとな。フフ、この紙はすごく燃えやすいんだよなぁ」
アイーゲはもがくボクめがけて魔性の火をとばした。
それが命中する直前、ボクは何とか両目の下に貼りついた紙を力づくではがすが、足の方は間に合わなかった。
貼りついていた紙のせいで通常以上に燃え上がり、激しい火傷を負う事となった。
ボクは足をかばいつつ、その場を全速力ではなれ、身を隠した。
「あ、危なかった。もし、顔の方に命中してたらと思うとゾッとするな」
「フフ、そこだな。千里眼を持つ俺が相手では見つかるのは時間の問題だと分かっているはずだ。さっさと出てこい」
「うぐ」
ボクはじゅわじゅわとうずく足の火傷に耐えつつ、小刀ザクメルを装備して高速移動を開始した。
そして、どんどん増えていくアイーゲの魔性の火をわざと刀身にまとわせ、攻撃に使った。
これなら、よけきれなかった紙を焼き切りながら前進できる。
「この紙は燃えやすい。その通りだったね」
「ちっ」
再び接近されると判断したのか、アイーゲはさらに後退をはじめた。
しかし、ボクもまた前進をやめ、後退して身を隠した。
魔性の火にやられた足の火傷が高速移動を長く続けたせいでうずき、すでに皮膚の色が変わり始めていたのだ。
「うう、こりゃまずいな。調子に乗って走りすぎたな」
ボクは足を押さえつつ、そーっとアイーゲの様子をうかがった。
気のせいか、マンジイによく似た人物が戦っているように見える。
だが、それはマンジイ本人であり、アイーゲに槍の一撃と煙玉をく

らわせた後、ボクのいるところへ走ってきた。
「すまん。遅くなったの」
「ま、マンジイ、ケガはもういいんですか？」
「お前さんが必死に戦っているときに入院してばかりもおれんじゃろ。ここにくる途中でスズちゃんという子から話は聞いた。本当に強くなったようじゃの」
「マンジイ」
言いたいことはたくさんあったが、今はゆっくり話しているヒマはなかった。
かなり離れた場所にいるとはいえ、ボクの姿が見えないと分かったアイーゲはまた千里眼を使って探しに来るに違いない。
その前に何とかして応戦方法を考えなければならない。
「どうやって奴を倒します？」
「対策ならある。ほれ」
マンジイはこのときミミッギュをスズから一つ預かっていた。
しかし、これはただ単に体に使えばいいというわけではなく、デビレンたちの顔にある魔化粧と呼ばれる部分（赤い不気味な模様のような部分）に強く押し当てなければ効果はないそうだ。
また、砕かれたりしてしまえば、その時点で効力はなくなり、つなぎ合わせて再利用するなんてこともできないと聞いている。
「ようするにチャンスは一回ってことじゃな」
「ええ。ひさびさに連携といきますか」
ゆっくり話し合いたいところだが、アイーゲがもうすぐそこまでせまっていた。
ボクはミミッギュのことをマンジイにまかせ、小刀ザクメルを手にアイーゲめがけて突進した。
足の火傷もインターバルをはさんだことで少しは楽になり、十分に走れる。
そのまま止まることなく魔性の火と紙をさけながら、アイーゲの前にたどり着いた。
「はぁ、はぁ」

「く、くそ」
迎え撃とうとするアイーゲだったが、小刀ザクメルを持ったボクの動きにはついていけないようだ。
ペパルをかまえるヒマも魔性の火を生成するヒマもなく、攻撃をくらう羽目になった。
「ぐうう、こいつめ」
「はぁ、はっ！」
「ぐぐ」
とうとうペパルを叩き落とされたアイーゲはボクに殴られ転倒。
そして、最後は小刀ザクメルで深く切り付けられた。
それでもボクの足をつかみ立ち上がろうとするが、傷はかなり深いようだった。
「フン、だがどうせ再生するんだ。同じことだ」
「今です、マンジイ！」
ボクの合図とともに走ってきたマンジイは、倒れているアイーゲの魔化粧にミミッギュを押し当てた。
そして、その数秒後にはアイーゲの傷は消え、再生を終えた。
「フフ、なにをしたか知らんが、失敗のようだな」
「いや、お前さんの負けじゃよ」
「フフ、バカな事を。さぁ、二人まとめて血祭だ」
「その前に自分の体をよく見た方がいいよ」
「何？　う、あ」
すでにアイーゲの両腕は肌色に戻り始めていた。
そして、ペパルも消滅し、魔性の火を生成する事もできなくなっていた。
「な、なんだ、何が起こってるんだ。おい、ジジイ、俺に何しやがった！」
「さっきお前さんに押し当てたのはミミッギュ。お前さんのの中のデビレンの力を消し去り、人間の姿に戻すためのものじゃ」
「な、何だと」
「キミほどの反射神経を持つ奴に確実にミミッギュを注射するには一

度倒して再生しきる前を狙うしかない。こっちの作戦勝ちさ」
「うう、このぉ」
アイーゲのデビレンの力は完全に消失し、人間の姿に戻った。
それでもなお暴れようとしていたが、もはや無駄な抵抗だった。
「くそ、ふざけるな、冗談じゃねぇぞ！　戻せ、今すぐ戻せ！」
「戻したじゃろ、人間に」
「そっちじゃなーい！　いいか、俺はデビレンだ！　俺がどれだけ苦労して今の地位を手にしたと思ってるんだ！」
結局、アイーゲはその後も悪あがきを続けたため、ロープでぐるぐる巻きにされた上に口と両目にガムテープを貼られ、拘束された。
長い戦いが終わり、安堵したボクは地面に倒れこみ、そのまま眠りに落ちていった。

第二十一話「不気味な声に導かれ」

「へぇ、ここがアホトルタ」
「アボトルタよ、ニシさん」
「ああ、そうそう。はじめてくる土地だ。気合いを入れないとね」
アイーゲとの戦いから一週間後、傷の回復を終えたボクはマンジイ、スズと共にアボトルタに入っていた。
アボトルタは卑劣の素の取引が多く行われている地区の一つで、取引護衛という形でレベルフォーのデビレンが他の地区以上に配置されていると聞く。
ボクはアイーゲ戦での反省を肝に銘じ、自制しつつ足を進めた。
「うん。絶対に同じ轍は踏まない」
「たのもしいの。こりゃ、ワシも負けてられん」
「うーん」
「スズちゃん、どうした？　浮かない顔をしとるようじゃが」
「今、聞き覚えのないような声が聞こえた気がしたけど。うーん、気のせいよね。あ、街が見えてきたわよ」
「おお、それではさ、ぶ！」
急にマンジイは何かにぶつかったようにバタリと倒れた。
続けてボクがそこに近寄ると、何やら透明な壁のようなものがあるのを確認できた。
「なんだ、これ。固いね。バリアか何かか」
「よし、それなら！」
マンジイはバリアめがけてパンチをはなつが、ひび一つ入らなかった。
それでもあきらめずに何度も殴り続けるが、逆に拳に傷を負ってしまう。
「う、ぐ」
「マンジイ、これは素手じゃ無理があるわ。武器を使いましょ」
スズはヘルジャムを装備するが、直後にバリアは消失した。
敵が解除したのか持続時間があったのかは定かではないが、調査の

必要がある。
　ボクたちは進行を止め、情報を整理する事にした。
「バリアを作る能力か。スズ、心当たりはある？」
「リストに載っていたわ。レベルフォーのヴァリザ。外見はドレッドヘアーに出っ歯。バリアを作り出す能力を持つ魔性具バッサシを武器に持つ」
「やはり、デビレンの仕業だったのか。しかし、なぜこんなところにバリアを張る必要があったんだろうね？」
「ふむ、南の方角で卑劣の素の取引が行われておる。そこへ邪魔者を入らせないためなんじゃな」
「え？　マンジイ、あなた何でそんな事が分かるの？」
「いや、そこから声が聞こえてきて」
　マンジイは周りを見渡すが、ボクたち以外の誰かがいる気配はない。
　だが、ただの幻聴だったというわけではないようで、今度は数メートル先から謎の声が聞こえ始めた。
「はやく行った方がいいぜ。もう一般人が危険にさらされているぞ」
「誰なんじゃ、お前さんは！　姿を見せんか！」
「マンジイ、今はとにかく南の方角に向かうしかないわ。かすがだけど卑劣の素のにおいはするし、うそじゃないみたい」
「その通りだ。急ごう」
　ボクたちは戦闘準備を整え、途中にあったバリアを破壊しながら、卑劣の素のにおいをたよりに進んだ。
　そして、着いた先にいたのは、リストに載っていたヴァリザと雑兵、取引相手と思われる人間。
　後ろには、たまたま現場を見てしまったと思われる人間が小型のバリアの中に閉じ込められていた。
「く、るしい。息が、あ、だ、出してくれ」
「あたしはヴァリザの相手をするわ。ニシさんは雑兵たち、マンジイは後ろの人の救助と取引相手の確保をお願い」
「フン。てめぇも窒息死するか？」

ヴァリザはバッサシを向って来るスズに向けてかざし、バリアで閉じ込めようとするが、なかなかうまく狙えない。
そのまま刀で斬られそうになるが、すでにすでにバリアで身を守っていたため、無傷だった。
「フン、まぁ、近づかれたところで防いでしまえば同じか」
「やるじゃない」
「よし、だったら！」
ボクは雑兵たちを倒した後、棍棒ガドッグを持ってバリアを攻撃した。
しかし、二回の連打でようやくひびが入る程度であり、破壊には至らなかった。
そのひびが入ったところでさえ、ヴァリザがバッサシをあてるとすぐに修復され、ふりだしに戻ってしまった。
「フフ、軽い攻撃だな」
「くっ、固いな。来る途中にあったバリアは軽く壊せたのに」
「ヴァリザ本人を覆っているバリアは特別製のようね。そして、一撃で破壊しなければ、さっきのように即座に修復されてしまう」
「その通り。お前らじゃ俺にダメージは与えられねぇよ」
「くそ、まだだ！」
ボクは必死に棍棒ガドッグをふるうが、やはりバッサシの修復の方が速い。
いくらフルパワーで攻撃しても、複数発叩かなければ破壊しきることはできないようだ。
「この、壊れろ、壊れろ！」
「ニシさん、一旦ひくわよ」
スズはボクの手を引き、一時戦線離脱した。
ここまでの戦いをふりかえり、スズはヴァリザのバリアについて特徴をとらえていた。
おそらく、彼のバリアは大きさだけでなく、形状も自在に変える事が出来る。

なので、ボクが棍棒ガドッグをふるいまくり、バテたところで中の人間がまともに動けなくなるような形状のバリアを作り出して閉じ込め、動きを完全に封じてしまうかもしれない。
「なるほど。そうなると、棍棒ガドッグをまともにふるう事もできなくなるね」
「あたしがヘルジャムの炎を解放するわ。そして、棍棒ガドッグと同時攻撃すればあるいはいけるかもしれない」
「今は二対一なんだ。わざわざ大きく消耗するようなまねはするべきじゃない」
「そこか、お前ら」
ヴァリザが魔性の火をとばしてきた。
何とも用心深い事で、バリアを張ったまま攻撃していた。
「作戦会議ならここに来る前にやっておけよ」
「ったく、向うからの攻撃は通るなんて。なんて厄介なバリアなの」
「いや、違う」
ボクはこのとき、わずかだがバリアの一部に小さな穴が開いているのを見つけた。
つまり、ヴァリザ側の攻撃が一方的に通っているわけではなく、この小さな穴から魔性の火やバッサシをかざして攻撃を放っているのだと思われる。
だが、この小さな穴はさっきボクが棍棒ガドッグでバリアを破ろうとしていたときには見当たらなかった。
これは近距離離戦ではこの穴が見つかりやすいうえ、見つかったら困る理由があるからだろう。
「あの穴の周辺に重い一撃をくらわせればバリアが一撃で砕ける。そういうことか」
「うん。でも、近距離戦じゃあの穴は開かないみたいだし、どうするの？」
「んー。待てよ、いいこと思いついた」
そうやって話しているうちに、またもヴァリザの追手がせまる。
今度は動きの遅いボクの方をバリア内に閉じ込めようと、バッサシ

で攻撃してきた。
　反応がわずかに遅れたボクは右手をバリアで覆われ、やがて縮小が始まった。
「生成したバリアのサイズを縮めていき、中の者を押し潰す。まさか、ここまでのことができるとは」
　なんとか走りながら壁に右手を何度も叩き付けバリアを砕くも、今度はその破片で怪我をし、散々だった。
「くぅ」
「はっはっは、どちらに転んでもただではすまない。さぁ、もうあきらめるんだ」
「誰があきらめるか！　スズ。これからボクが言うとおりにやって！」
　ボクとスズはしばらく話しながら走り続けた後、ようやく立ち止まった。
「今だ！」
「ごめん！」
　スズは、棍棒ガドッグを持ったボクをヴァリザめがけておもいっきり蹴り飛ばした。
　その勢いを利用し、ボクはそのまま飛んでいき、ヴァリザを覆うバリアの小さな穴を棍棒ガドッグで攻撃した。
「はあああああ！」
　バリアは少しずつひび割れていき、音をたてて半壊し、ボクはその破片で負傷するも、ひるまず戦闘を続けた。
　ヴァリザは明らかに動揺している様子で、動きが乱れ始めていた。
「くそ、穴の存在に気づかれていたか」
「さてと、もう逃がさないよ」
　ボクは近距離から棍棒ガドッグでバンバン攻撃した。
　これだけ接近すればバリアは張れないし、それ以前にバリアを生成するスキも与えずに済む。
　ヴァリザはすでに自分の体にもバリアを貼りつけていたが、動きが鈍くなることを考えて軽くしているようで、通常のバリアよりはもろ

い。
棍棒ガドッグなら、ほぼ一撃で砕くことが可能だった。
一見すると、ボクの方が有利に見えるが、ヴァリザに貼りついているバリアを砕けば砕くほどその破片が突き刺さる。
それにより、もうけっこうな量の血を流していた。
「ぐ、うう。うっ、目がかすみはじめてきた」
「はぁ、はぁ」
ヴァリザは、ボクがふらつきはじめた直後、また距離をとろうとするが、今度はスズに攻められた。
すでにバリアを砕かれた部位を的確に攻撃され、反撃も間に合わなかった。
「く、くそ。卑怯だぞ。二対一なんて」
「どのクチがそんな事言うの。あなたたちも散々やってきたことでしょ」
「だ、黙れ。ぐ、うう」
ヴァリザは貼りついたバリアを次々と砕かれながら攻撃され、ついに無防備になった。
ボクはすかさず、棍棒ガドッグの一撃をふりおろし、押しつぶした。
「スズ、はやくミミッギュを！」
「うん！」
「うう、くそ」
ヴァリザはスズにミミッギュを注射され、デビレンとしての力を失った。
しばらくはそれが分からずにまだ戦おうとしていたが、今度はスズの平手打ち一発で倒れてしまった。
「な、なんだ、この皮膚の色は。何が起こったんだ」
ヴァリザは何が何だかまったく理解できないまま、スズにロープで縛られた。
ボクは卑劣の素を回収しようと近づくが、背後から魔性の火が数発飛んできて、腕を負傷した。
振り向いたときには攻撃の主の姿はもうなく、何かがいたという痕

跡すら感じられない。
残っていたのは、薄黒い色をした謎の紙切れだけだった。

第二十二話「デビレンたちのボス」

「さてと、何が出るかな。う、ん」
「ニシさん、すごい汗。あたしが開けよっか？」
「い、いや、大丈夫」
ヴァリザ戦後、近くの街へ入ったボク、マンジイ、スズは手に入れた謎の紙切れを開いていた。
中には「山奥にある洋館の晩餐会に招待する」と赤い文字で書かれていた。
普通に考えれば、罠か何かだろうが、うまく利用すれば敵の戦力を大きく削ぐチャンスでもある。
不安がないと言えばうそになるが、最終的には乗り込むことで話がまとまった。
「とりあえず、罠対策だけはしっかりしていくべきじゃ。何が待っているか分からないからの」
「まぁ、手の内を知らないのは向こうも同じですけどね」
「ところで、手紙の最後に書かれたチィトというのは何じゃろうの。差出人の名前にしても聞いたことない名前じゃが」
「あたしは少しだけ聞いたことがあるわ。すべてのデビレンの頂点に立つ魔王のような存在だってね」
「魔王か。ふむ、デビレンは卑劣の素を飲む以外では、必ずレベルワンの姿で生まれてくる。それを作り出している主とでもいうべきかの」
「大学の中では都市伝説のように扱われていたわ。その姿を見て生きていられた奴はいないとか噂されていたし」
「うう。あ、いや、噂だけに流されるのはよくないよ」
ボクたちは十分な準備を整え、指定された山奥の洋館へと向かった。
爆発物センサー、電磁センサー、毒物センサーなどこれでもかというくらいの用意周到ぶりだったが、反応は一切なく、あったのは強い殺気のみ。
しかもそれは驚くことに洋館の中にたった一つだけだった。

「罠は特になし。で、感じられる殺気は一つだけ。てっきり大勢で待ち伏せてると思ってたのに」
「ニシくん、気を付けた方がいい。逆に不気味じゃからの。いったい何を企んでいるのか」
　まずはマンジイが先行して洋館のドアを開いた。
　その後は持っていた電灯と殺気をたよりに全員で洋館内を進み、奥にある大部屋へとたどりついた。
　そのさらに奥のイスの前に殺気の主と思われる者は立っていた。

　黒くて毒々しいボディに不気味な笑み、血のような不気味な模様、そしてただならぬ殺気がボクを戦慄させた。
　マンジイとスズも同じのようで、動かずにただ武器を構えていた。
「仲間たちといるこの状況でさえ、死の恐怖を感じるとはの。こりゃ只者ではないの」
「あたしが甘かったようね。一人で待ち構えているだけはあるわ」
「ようこそ、お客人。立ち話もなんだし、まぁ座れよ。ん？　罠なんて仕掛けてねぇよ。そんなものに頼るのはボスとしてのプライドが許さねぇからよ」
「う、あなたがデビレンたちのボス……　チィト？」
「そのとおり。そして、現存する唯一のレベルファイブでもある」
　チィトはここでボクたちを呼んだ理由を話し始めた。
　それは、ここでもう無謀な戦いはやめ、自分の仲間にならないかと勧誘するためだった。
　さかのぼっていうと、それはあのスバゲスタン大学のイベントでジェリラと戦った時。
　ボクたちが、仕掛けてあった爆弾から生き延びたならば、仲間に加えるつもりだったという。
「あの人間をデビレン化させていくという計画書もお前らを恐怖させるためにわざと残したもの。ヴァリザと戦わせたのも、デビレンの力を思い知らせて戦意喪失させるためさ」
「じゃあ、あのときの声はやはりあなただったのね？」

「ああ。で、導いた結果、勝ちはしたものの、仲間がいなければ、負けていたかもということを自覚したはずだ。だから来るんだ。デビレンにしてさらに力をくれてやるぞ」
「それはあたしたちだけをってことでしょ？」
「もちろんだ。ボスである以上、選民意識を持つのは当然。俺が勧誘しているのは、俺に使ってもらうだけの価値がある強い人間だけだ」
「人間と共存するという道はないのかの？」
「ない。計画書にあったとおり、人間を残しておく気はいっさいない。それははるか昔に決めたことなんだ」
チィトは手をかざし、まばゆい光を発生させた。
すると、ボクの頭の中に鮮明な映像のようなものが流れ込んできた。
おそらく、それはチィトが過去に体験したと思われる記憶。
まずは、デビレンたちがこの世界に誕生していく瞬間からはじまった。
元々、デビレンという生き物は、猿が人間に進化していった中で、邪心を持っていた一部の猿が分岐する形で誕生したものといわれ、チィトもその中の一人だった。
彼らの特徴といえば、人間より賢く、そして進化前同様に強い邪心を持っているという事。
当然、人間とは相容れるはずもなく、遭遇すれば殺し合う毎日だ。
当時のデビレンたちは今でいうレベルスリー程度の力を持っていて、黒火、複眼、再生力といった能力を使う個体も存在した。
なので、個人の力でいえば人間に負けるはずはなかったが、戦いを重ねるにつれ、先行きは暗くなってきた。
というのも、デビレンたちは元々の数が少ないうえ、人間のような繁殖能力もないため、減る事はあっても、増える事は決してなかった。
人間との戦いの日々が続いた結果、生き残りは百人以下にまで減少した。
この時点でデビレンたちは大きな選択を迫られることとなった。
ゲリラ戦などを駆使しながら人間と戦い続けるか、一度撤退して力

を蓄えるか。
議論した結果、意見は二つに割れ、生き残ったデビレンのうち三十人人が戦い続ける道を、五十人が各地に散らばって力を蓄える道を選んだ。
このとき、チィトは力を蓄える道を選び、仲間十人とともに辺境での潜伏生活がはじまった。
どうすれば自分たちがもっと強くなれるか、どうすれば仲間を増やせるか、答えを探しながら人間から逃げ隠れする毎日だった。
しかし、人間たちもまた時間の流れとともに進歩していく。
結局は大きな進展もないまま、争いが始まってから百年後には戦いに明け暮れていたデビレンたちが滅び、さらに百年後には各地に潜伏していたデビレンたちも迫害の末に滅ぼされてしまった。
チィトもまた人間たちの罠にかかり、弓矢で射抜かれて崖下に投げ捨てられたが、強靭な精神力でなんとか這い上がった。
その後は人気のない山に入り、再生不可能なくらいボロボロになった体を癒しながら仲間たちの無念をはらすことだけを考えた。
そのために、チィトはもはや手段は選ばなかった。
苦しみに耐えながらも、自分の体を使い、ありとあらゆる自己実験をはじめるのだった。
あるときは傷口から黒火をねじ込み、強制的にデビレンとしての力を上げようとしたり、またあるときは自分の血を大量に抜き取って、それを元にクローンを作ろうとしたりもした。
これらはいずれも失敗し、結局は無駄に体を傷つけただけという結果に終わる場合が多かった。
だが、そんな事を重ねていくうちにチィトの野望は少しずつ現実に近づいていくのだった。
実験開始より百年後、黒火の強化技・魔性の火を習得することに成功。
三百年後、複眼の強化技・千里眼を習得することに成功し、その後まもなく自分の細胞からレベルワンのデビレンを作り出すことに成功。

五百年後　人間をさらってきてデビレン化させるための実験をはじめる。
七百年後、レベルワンのデビレンをレベルツーへ進化させることに成功。
八百年後、レベルツーのデビレンをレベルスリー進化させることに成功。
九百年後、再生力をさらに強化させた完全不死の肉体を手に入れることに成功し、それによりさらに過激な自己実験をはじめる。
千年後　特別な力を秘めた武器・魔性具を作り出すことに成功。
二千年後、邪心を持った人間にレベルスリーの体を乗っ取らせることで、レベルフォーのデビレンを生み出せることを発見すると同時に人間の持つ強い邪心がデビレン化のために必要な事を発見し、新しいクスリを作ることに力を入れ始める。
そこからさらに百年が経過した現在、新しいデビレン化のクスリ卑劣の素をついに完成させ、以降は強い邪心を持つ人間にこれを配ってデビレン化させ、本格的な勢力拡大をはじめる。
ここでボクの頭の中に流れていた映像は途切れた。
「はっ！　ああ」
「分かってもらえたか？　これが俺が今までに歩んできた道のりだ。長かった、実に長かった。気が遠くなるほどにな。そして、やっと、デビレンとして最高の力と仲間を増やす術を手に入れたんだ。はっはっは！」
「あたしたちは昔話を聞きに来たんじゃないの。で、これからどうしろと？」
「さっき言ったとおりだ。お前たち三人を仲間に迎えたいと。さぁ」
チィトがテーブルにかけてあった布をひくと、中から卑劣の素三つと半殺しにされた人間たちが出てきた。
まずは仲間になる証として、目の前にいる人間たちを殺したうえで卑劣の素を飲み、デビレン化しろという意味なのだろう。
「なぁに、無抵抗な人間を殺せば邪心なんてすぐに出来上がる。さぁ、好きなようにやってくれ」

「うぉぉぉぉ！」
チィトの背後から槍を持ったマンジイが襲い掛かった。
しかし、その後に振り向いたチィトの凄まじい眼光に震えあがり、硬直してしまった。
「ぐ、ぐ」
「話している間に回りこんだか。弱者のやりそうなことだな」
「はぁはぁ、誰がお前さんなんかの仲間になるか」
「そうか。まぁ、お前はそっちの二人の付録みたいなもんだ。だからここで死んでくれてもいいぜ」
「ボクも仲間になる気なんかない！」
ボクは突進し、硬直していたマンジイを下げ、チィトを殴りつけた。
しかし、吹き飛ばすどころか、まともなダメージすら与えることができなかった。
「う、何で？」
「ただのパンチにしては上等だ。だが、惜しいな。デビレンになればもっとすごい力が出せるのに」
「その手にのるか！」
いつもとは違い、ボクはマンジイをかかえて後退した。
最初は連打を浴びせてやるつもりだったが、本能的にそれができなかった。
「て、手の震えが止まらない」
「やれやれ、戦う気なんてなかったのに、ねぇ？」
次の瞬間、チィトの放つ凄まじい殺気がさらに強力になって周りを威嚇した。
ボクは無意識に腰が抜け、スズは唇を噛みしめながら後ずさりし、マンジイに至っては泡を吹いて倒れていた。
「ぶ、ぶぶぶ」
「ああ、やっちまったか。いきなりこの殺気は刺激が強すぎたようだな。次に会うときはいい返事を期待しているよ。まぁ、断った時はどうなるか、わかるな？」
チィトはそう言い残すと、飛び上がり、洋館から去って行った。

すると、重かった空気はようやく元に戻っていき、ボクは魂を抜かれたように地面に倒れこんだ。

自信の喪失、恐怖、不覚にも逃げ出したいと思ってしまった恥じらい。

それらが頭の中をぐるぐると回転し、しばらく拭い去れない時間が続いた。

第二十三話「非道な実験施設」

「マンジイ、そろそろ終わりにしましょうよ」
「まだじゃ。こんなものではまだチィトとは戦えん」
「はぁ」
チィトとの一件から三日後、ボクはマンジイと手合せをしていた。
マンジイはチィトの殺気に怖気づいて醜態をさらした自分がよほど許せなかったらしく、本当に鬼気迫る勢いだ。
もちろん、ボクも気持ちは同じ。
デビレンに身を堕としてチィトの手先になるのも、負けて死ぬのもごめんだ。
とにかく、自分の中に目覚め始めていたチィトへの恐怖心を薙ぎ払うかのように拳をふるった。
「うぉぉ、あ、あれ？　力がぁ」
「何じゃ、ニシくん。もう限界かの」
「す、すいません。何しろ朝からぶっ続けで訓練と手合せばっかしてたので、おなかがすいて」
「むぅ、まぁ、腹が減っては戦はできんというしの」
マンジイはようやく握りこぶしをほどいてくれた。
まもなく、出かけていたスズが戻り、待ちに待った食事の時間となった。
「さてと、まぁ、食べながらでいいから聞いて。実はミミッギュの残りが一つしかなくて大学に補充をお願いしたけどダメだったの。もうストックがないって」
「え！　でも、ミミッギュがないとレベルフォーに対抗できないよ」
「まぁね。でも、その希少性ゆえにミミッギュの価値はどんどん高騰しててね。スバゲスタン大学の力をもってしてもホイホイ入手できるものじゃないの」
「そうか。消耗品なんじゃし、いつかは直面したとは思うがの」
「一応、大学内で聞きこんで、ボドモルっていう荒れ地にある今は使われていない施設にミミッギュがありそうだって教えてもらったわ。

要は自分たちで見つけて使えって意味よ」
「うう。まぁ、ミミッギュがないとどうにもならないし、避けては通れないよね」
　ボクたちは、スバゲスタン大学から提供された情報を元にボドモルに向かった。
　だが、情報を入手していたのはスズだけではないようで、すでに周辺には先客と思われる男たちがうろついていた。
「へへ。何だ、お前らもボドモルに乗り込もうってのか？」
「ええ、そうだけど。あなたたちもデビレン狩りをしていの？」
「いいや、俺たちはミミッギュを手に入れて高値で売るのが目的さ。ぼったくりのような額でも欲しがる奴はごまんといるからな」
「なるほど、トレジャーハンターのようね。まぁ、こんな世の中なんだしお金儲けを責めはしないけど」
「スズ、どうする？　手を組んでおくべきだと思う？」
「難しいでしょうね。中に敵がいたと場合、三つ巴の戦いになる可能性もあるし」
　ボクたちは話し合った結果、すぐには動かずに様子見を続けることにした。
　そして、ハンターチームがボドモル内に入った五分後くらいに後をつけて行った。
「これなら、途中に敵がいたとしてもハンターチームが片づけてくれる。体力の温存にもなるの」
「でも、最終的に戦いは避けられないと思うわ。ハンターチームがうまく敵を倒して先にミミッギュを手に入れたとしてもあたしたちに渡すはずがない」
「たしかにね。ん？　先が騒がしいな。もう戦闘がはじまったのか」
　声をたよりに施設内の広場へと進んだボクたちを待っていたのは、異様な光景だった。
　なぜか、ハンターチームたちは互いに激しく攻撃しあっていた。
　ただの仲間割れにしてはあまりに激しく、本当に殺し合いといった感じだ。

「待てー、デブ女。俺の金を返しやがれ」
「デブっていったらボクしかいないけど、男だよ。それにお金を盗った覚えなんてないし」
「いや、それ以前にあの人、誰もいない方に向って言っているわ。あっちの人は柱に向って攻撃してるし、何か変ね」
「とりあえず、止めた方がよさそうじゃの」
ボクたちはハンターチームに向っていき、背後から気絶させて外へと連れ出した。
その後は目を覚ましたのちに話を聞くも、どうも話が分からなかった。
あるハンターはいつの間にかデビレンの大軍と戦っていたと言い、あるハンターは女装したおじさんたちの群れから逃げていたと言った。
同じ場所にいたはずなのに、こうも食い違う証言。
おそらくは知らないうちに幻術の類をかけられていたと考えられた。
「デビレンの能力かな。キミたちは何か知らない？」
「そうだな。俺たちが仕入れた情報によると、アマていうデビレンがボドモルを仕切っているらしいんだ。そいつの能力なんじゃねぇか？」
「アマか。たしか、レベルスリーの賞金首じゃの。レベル的に考えて幻術などの高度な力を使えるとは思えんがの」
「そういえば、アマは人間をさらって危険な実験を繰り返しているという噂を大学で聞いたことがあるわ」
「危険な実験じゃと？」
「ええ。それと同時にあやしいクスリの開発もしているとか」
「はぁ、難易度が上がってきたね。これは競り合っている場合じゃないよ」
この話し合いの結果、ボクたちはハンターチームと一時的に手を組むことにした。
まずは綿密に作戦を立てた後、マンジイとハンターチームが先発し

てボドモルに再突入した。
ボクとスズは少し距離を置いてついていき、そのまま施設内の広場へと進んだ。
その後はすぐには動かず、マンジイたち先発組の動きをじっくりと目視した。
まもなく、前回と同じような同士討ちがはじまった。
しかし、マンジイたちにはもしものときのために武器を置いてこさせたため、殺し合いというほどのものではない。
ボクとスズは冷静さを失わず、目視を続けた。
「どこだ。どこから攻撃している。全員に攻撃が当たる前に何とか！」
「ん？　んん？　あっちよ、十二時の方角よ」
「よし！」
ボクはすぐに小刀ザクメルを装備し、スズの示した方角へと走っていき、柱の後方にいたデビレンを追い詰めた。

デビレンは金髪の小柄な少女風のレベルフォーで、ボーガン型の魔性具を構えていた。
「排除する」
「うぉぉぉ」
ボクは魔性具の方に狙いを定め、叩き落として蹴飛ばした。
これでもう厄介な能力を使われる心配はない。
と思われたが、何と背後に落ちているだけの魔性具から細い矢が飛んできた。
ギリギリで避けるも、魔性具はその後も容赦のない追撃を続けた。
「うわぁぁ、どうなってるんだ」
「ニシさん、今行くから。あ！」
突如、無数の銃弾がスズを威嚇するように飛んできた。
その後、攻撃の主と思われるたまねぎ頭のデビレンが雑兵たちを連れて現れた。
「よう、侵入者」

「手配書の写真と一致する。あなたがアマね？」
「そうだ。そして、あのレベルフォーは俺の最高傑作である幻術使いのマジェリーと魔性具プアソル」
「最高傑作ってあなたが作ったの？」
「ああ、ボスに頼まれてな。卑劣の素に適応できるような体に人間を改造したのさ。まぁ、千人くらい試して成功したのはあのマジェリーだけだったがな」
「人間に合うように卑劣の素を改良していたわけじゃなく、卑劣の素に合うように人間を改造してたのね。何て惨い事を」
「フン！　ま、お前らはここまでだ。前に来た奴も千里眼に気づかれないように幻術にかかったふりをしてマジェリーに近づいてきたが、それが限界。プアソルの遠隔操作であっさり沈んだよ」
　アマは挑発めいた笑みを浮かべながら、雑兵たちと共にマンジイ達のところへ走っていった。
　もしも乱入されれば、場はさらに混乱する。
　ボクはスズにアマたちを追わせ、マジェリーとの戦闘を続けた。
「くっ、まさか魔性具を遠隔操作できるとはね」
「魔性具極めたデビレンなら容易。さぁ、死ね」
「うう、まずい」
　ボクは慌てて後退して身を隠した。
　遠距離ならともかく、近距離で矢を連射されれば、さすがに回避のしようがなかった。
「一発でも食らえば幻術の世界に落されて殺されるか、マンジイと同士討ちさせられる。うう」
「私には千里眼ある。隠れても恐怖長引くだけ」
「しょうがない。まだ実戦で使うレベルじゃないかもしれないが」
　ボクは小銃イアチャを手に持ち、マジェリーの前へ出てきた。
　マジェリーはボクに接近戦を挑みつつ、落ちているプアソルから矢を飛ばし始めた。
「私の相手しながら、矢を避けるなんて事できるはずない」

「う、あ、あ。はぁ」
プアソルの矢は紙一重のところでボクに届かなかった。
ボクの持つイアチャは冷気を放出する武器であり、それを全身にまとって矢を防ぐための盾として使っていたからだ。
これは前にスズが愛刀ヘルジャムの炎で爆撃を防いだのと同じ戦法だ。
もっともこれは自身の体も危険にさらす戦法であり、まだ習得したばかりという事もあり、使える時間は限られている事は十分に承知していた。
「五分、いや、三分ってとこかな。速攻でケリをつけないと」
「人間、不便なもの。たかが戦いに必死過ぎる」
「た、戦いをなめないことだ。いつまでもデビレンでいられると思うなよ」
ボクは凍結し始めている手足を必死に動かしながら戦った。
左手でイアチャの弾を連射し、右手でマジェリーを攻撃する戦法だ。
「うぉぉぉぉ」
「ぐう、重いパンチ。だが、こんな戦法いつまでも続かない」
「はぁ、あ、ぐ」
「パンチの方はともかく、弾の方まったく命中してない。それどころか、まったく別の方に飛んでる」
「い、や、これでいいんだ」
「頭もフリーズしたか。かわいそうに」
「はっ、ぐ、がは！」
ボクを覆っていたイアチャの冷気は少しずつ薄まっていき、完全に消失した。
おまけに全身はすでに凍傷になりかけている部位がいくつもあり、

特にイアチャを握っていた方の手は見るも無残だった。
「ぐ、ううう」
「よくがんばった。だが、悪あがきここまで」
マジェリーは無防備になったボクにプアソルの矢を飛ばそうとするが、何も起こらない。
すでにプアソルは完全に凍結され、矢が出せなくなっていたのだ。
マジェリーは、ここでやっとボクがさっきまでの戦いでプアソルを狙ってイアチャの弾を連射していることに気づいたようだが、もう遅い。
ボクの重いパンチばかりに目が行き、プアソルの方をまったく見なかった事が招いた結果と言える。
「く、ろうしたよ動きながらじゃなかなか当てられなかったから」
「貴様!」
マジェリーは、やや動揺しつつも冷静さを失わずにボクに向かっていった。
しかし、今度はパンチの連打に加え、イアチャによる攻撃にも対処しなければならない。
パンチの方はともかく、イアチャの弾は避ける事はできてもガードはできず、魔性の火を生成する時間すらないようだ。
おまけに後ろと左右には壁があって後退する事はできず、遠距離戦には移れない。
ついにマジェリーの動きは乱れはじめ、ボクはそのスキをついてイアチャの弾を連射した。
そしてトドメに至近距離から弾を撃ちこんだ後、すぐにミミッギュを打ちこんだ。
まもなく、逃げ続けていたアマもスズに捕まり戦闘は終わった。
しかし、ボクの心にはどうにも後味が悪いものが残った。

やむをえない状況だったとはいえ、罪もない少女を自らの手で倒してしまったのだから。

今回の戦いは今までの戦いの中でもっとも辛く後味の悪いものだったといえる。

第二十五話「私刑王」

「そっか。こんな事が起きてたんだね」
アホロトとの一件の後、近くの古小屋に移動したボクはショウさんから借りた端末でデビレン絡みの情報を調べていた。
それによると、どうやらアホロト惨殺のような事件が最近よく起こっているらしい。
おもにレベルツーの雑兵デビレンが次々と殺され、死体が人前にさらされる事件が各地で続出。
はじめはデビレン側に恨みのある民間人の仕業とも思われたが、ついにはレベルスリーのデビレンが犠牲になる事態にまで発展してしまった。
レベルツーならまだしも、レベルスリークラスとなると、民間人がどうこうできる相手じゃない。
この事からデビレン狩りとは別の目的で何者かが計画的にデビレンたちを殺害していっていると推測された。
ただデビレンを倒していくだけならボクたちもやっている事だが、アホロトの時のように力を失った人間まで手にかけるのはさすがに見過ごせない。
ボクたちは十分に警戒しながら、行動することになった。
だが、はやくも危機的状況が迫りつつあった。
黒い煙が少しずつ古小屋内に入ってきて、視界を悪くしていったのだ。
ボクはすぐに奥にいるショウさんとマンジイに知らせようとするも、後ろから飛びかかってきた何者かに布袋に入れられ、連れ去られた。
そして、解放されたときはどこかの薄暗い建物の中にいて、黒い包帯のようなものを巻いた男の前に引き出された。
「キミは？」
「ワシはブガイ。名前くらいは聞いたことあるじゃろ？」
「ブ、ガイ？　残虐私刑王の異名を持ち、世界中の犯罪者たちを次々と

処刑しているグループのリーダーの名前だ。え？　じゃあ、あなたが？」
「そうじゃ。目的は言うまでもないな。金や戦績によって罪が免除されるような腐った世の中を正すため、生きたゴミ共を消す。ただそれだけじゃ」
「生きたゴミ？　デビレンもですか？」
「最初のうちは戦闘能力の差ゆえにうかつに手が出せんかった。しかし、勢力を拡大した今なら渡り合う事が可能じゃ。ある問題を除いてな」
「ある問題？」
「ミミッギュじゃ。あれはワシらの力でも作り出せはせんからな。じゃからワシらを信じて託してほしい。さぁ！　命をかけてまでワシらの邪魔をするか？」
　たしかにボク個人の本音としては、悪党を粛正する行為を命がけで邪魔をするのは何だか気が引ける気がするし、ブガイのおかげでデビレンたちの数が減っているのも分かる。
　この考え方はボクだけでなく、街の人たちも同じ。
　ブガイたちを支持し、「よくやった。デビレン共、ざまぁみろ」と賞賛する者もいるようだ。
　特に犯罪により家族や友人を失った人たちの中には彼の事を慕う者が多いらしく、今回の件でその数はさらに増える事になるだろう。
　しかし、ブガイの要求をのんでしまえば、それがどういう結果になるか目に見えている。
　情報通りだとするなら、ターゲットになった者は長時間をかけてひどい拷問を受け、挙句の果てには「もういっそ殺してくれ」とさけぶほど苦しみながら殺されていくだろう。

　噂では凶行の一部は意図的に配信され、まるで見せしめのように世界中の人の目にとまるらしい。
　ボクは以前にそのうちの一つと思われるものを偶然見ていた。
　内容は六十くらいの老人とまだあどけなさが残る少年が縛られた

上になんと四十九時間もかけて殺されていくものだった。
　その映像の最後には「これはまだ序の口だ」というブガイのメッセージが込められており、もはや狂気すら感じられた。
「あのときの事は一生忘れることができません。二人が犯罪者だという事を忘れてつい同情しました。いくら何でもあんな人権を無視した拷問なんて許せないです」
「フン。その映像に出ていた年寄りの方はいい年をして若い娘をストーカーした挙句に両親もろとも殺し、ガキの方は親に叱られてイライラしていたという理由で飲酒運転し、幼子二人をひき殺したクズじゃ。これでも人権なんてりっぱなものがあるといえるのか？」
「でも、何も殺さなくても、別の方法で罪を償わせれば」
「甘い事を言うな！　そんな事ばかり言っているから世の中に悪というバイキンが繁殖するんじゃ！　いいか、悪は根絶やしにするしかないんじゃ！」
「ひ、ひいいいいい」
「貴様は考えたことがあるのか！　何の落ち度もないのに殺された者の無念が！　残された家族の怒りと悲しみが！　もう会えなくなるという事がどれほどの事なのかわかっているのかぁ！」
　ブガイはついに強硬手段に出た。
　ボクの背後に回り込み頭を押さえ、ロープでぐるぐる巻きにした後、ミミッギュを奪いとった。
　だが、直後に駆け付けたショウさんが攻撃してきたため、体をのけぞらせた後に態勢を立て直した。
「フー。ん？　貴様は最近このあたりでデビレンを狩っている若造じゃな。たしか、裏側の大陸からやってきた……」
「フン。よくご存じで」
「貴様も邪魔をするのか？」
「どうかな。俺は正直、私刑なんてものに賛同するわけじゃないが、別に邪魔をするつもりもない。悪人やデビレンが何人殺されようと知った事じゃないってのが本音だな」
「じゃったら、それでいいじゃないか。ワシがやろうとしてる事はお

前らにとっても得なはずじゃ」
「そうだな。だが、少なくともミミッギュは人殺しの補助具じゃねぇんだ。分かるだろ？」
「分からん！」
ブガイはさっさとその場を立ち去ろうとするが、ショウさんはくらいついてきた。
お互い不本意な形ではあったようだが、戦いは避けられそうになかった。
「バカが、こんな事をしても、互いに何の利益にもならないのが分からんのか！」
「だったら、少しは他人の意見を尊重しろよ。我を通すだけじゃ納得できないだろ！」
「貴様」
ブガイは両手に装着したカギ爪とガトリング銃を装着した。
どちらも派手さはないものの、扱いやすく、暗殺することに特化しているようだ。
少なくとも、ブガイはショウさんを殺そうというような様子ではなかったが、話を聞き入れてくれないとわかったのか、目の色を変えて猛攻を開始した。
「いいかげんにしろ、貴様！　もうどうなっても知らんぞ！」
「それは俺が言うことだ！　さっさとミミッギュを返せ！」
「本当にそれが今お前がやるべき事なのか？　遠い土地に残してきた恋人に申し訳ないと思わないのか？」
「ぐ！　てめぇ、どこからそんな話を！」
「ワシの情報網を甘くみらん事じゃ。知っているぞ。お前は許していないはずじゃ。恋人を傷つけた奴らも守れなかった自分の事も」
「う、うう」
ショウさんは急に頭を抱えて動かなくなってしまった。
ブガイはそのスキをつくように後退し、退却をはじめた。
「フン」
「ま、待って。これからもずっと人殺しを続けるつもりなんですか？

あんな見せしめのような事を」
「デビレンを含むすべての悪がこの世から消えるまでな。お前もワシの考えが分かるときはくるはずじゃ。自分が愚かだったと気づくはずじゃ。大切な者を殺された絶望を味わえばな」
「大切な仲間を？　え？」
ボクはブガイをこれ以上追いかける事ができなかった。
その後は自問自答のように考えはじめた。
もし、自分の仲間が殺されたら、復讐に走らないと言い切れるだろうか？
さっきと同じような事をブガイに向って言えるだろうか？
答えは見つかりそうもなかった。

第二十六話「波乱の誘拐事件」

「はぁ。どうしたものかな」
ブガイを取り逃がした後、ボクはショウさんと共に古小屋に戻り、じっと考えていた。
ブガイは正義なのか悪なのか、そしてボクのとった行動は間違っていなかったのかと。
たしかにデビレンだけでなく人間を殺すのは紛れもない犯罪だが、それは普通の人から見ればの話。
犯罪で家族や友人を失った人たちから見ればブガイは間違いなく救いの神であり、ボクなんかが否定していいものではない。
なぜなら、ボクは被害者遺族の気持ちというのを芯から理解してはいないから。
理解するためには、自分も同じ立場になるしかない。
いくら口で「分かるよ」とか「加害者を憎んでもしょうがない」などと論破しようとしても、「お前に何が分かる」と一蹴されてしまうだろう。
ボクは次にブガイと対峙した時にどう動けばいいのか分からず、悩み続けた。
「うー、うう」
「おっさん、あんたが何を考えているのかは分かる。だが、そこまで考え込むようなことじゃねぇよ。忘れろ」
「ショウさん、でも！」
「奪われたミミッギュは幸い一つだけ。それにブガイが狙うのは死刑になってもおかしくないほどの生きたゴミみたいな奴だけだ。今日の一件で善人が犠牲になる事はまずねぇよ」
「う……　ん。あ、そういえば、ショウさんも過去に何かあったの？
ほら、ブガイが言ってたでしょ。恋人がどうとかさ」
「ああ、それか。その話はまたいずれな。とにかく、ブガイとは戦力を潰し合ってまで争う事はない。少しやり方が過激な正義の味方くらいに思っとくんだな」

「そうだね。じゃあ、マンジイはどうお、ん？　あれ？」
ボクはここで目の前の異変に気づいた。
となりの部屋に座っていたのはマンジイではなく、白髪で痩せたレベルスリーのデビレンだった。
なぜか薄ら笑いを浮かべており、ショウさんとボクが飛びかかって押さえた後もそれは変わらなかった。
「フ、フフ」
「何を笑っている！　マンジイはどこだ！」
「お前ら、ホントに間抜けだよな。ここに戻ってすぐ気づくと思ったら、話に夢中で今まで気づかないんだからよ。笑いこらえるのが大変だったぜ」
「てめぇ、この状態でよくそんな口がきけるな。レベルスリー如きがこんなマネしてただですむと思ってんのか？」
「なーに、やれはしないさ。俺をやればジジイの居場所が分からなくなるからな」
「てめぇの目的は何だ？」
「もう分かってんだろ。お前らはこのアボトルタで暴れすぎたんだよ。放置してないほどにな」
白髪デビレンは黒火を手に纏わせて暴れ、ボクたちをふり払って逃走した。
その後は激走しながらの攻防が続き、大きな木のある草原へ突入した。
だが、ここで白髪デビレンと入れ替わるようにして坊主頭のレベルフォーと雑兵たちが前に立ちはだかった。
「そろそろ来る頃だろうと思ってたぜ」
「てめぇは……　たしか前に見たリストに載ってたな。レベルフォーのドリゴドール。魔性具は剣型のゴルブタだったっけか？」
「ちっ、ネタバレ済か。自己紹介くらいさせてくれよ」
「マンジイをさらったのはキミか？」
「何の話だ？　俺はただここで待っていればいい獲物がかかると聞いて待っていただけだ」

ドリゴドールはこのときすでに剣型の魔性具ゴルブダを出していた。
一番気になるのは、それにどんな能力が秘められているかということだ。
しかし、今はゆっくりと様子見していられるような状況じゃない。
ボクは小刀ザクメルを持ってドリゴドールに向かっていった。
「ショウさん、雑兵たちをたのむよ」
「フフ、威勢のいいデブだな。来い」
「よし、まずは」
ボクは真っ先にゴルブダを狙い、攻撃した。
もちろん、ドリゴドールも応戦し、しばらく武器同士の押し合いになった。
「フフ、効いてきたな」
「あ？　うわっ！」
ザクメルの一部は石のようなものに変化していた。
おそらく、ゴルブダの有している能力によるものだろう。
ボクは一旦距離をとり、すぐに小銃イアチャをかまえた。
「石化とは厄介だ。はぁ、はぁ、ここは遠距離戦しかない」
「フフ、甘いな」

ドリゴドールはゴルブダを前方に向け、刃先を伸びて攻撃してきた。
さすがにこれでは反応が間に合わず、ボクは右腕を切りつけられてしまった。
「ぐ、うそだろ。伸びるのか、その剣」
「これだけ離れていれば大丈夫、近づかなければこわくない。そんな油断が死を招くんだぜ」
「う、うう」
切りつけられた右腕はすでに石化していた。
幸いにもこの石化は周りに広がっていくタイプのものではない上、一度に石化できる範囲は小さく、右腕がこのままでも戦い続けるのに

大きな支障はない。
だが、動くために必要な足や考えるために必要な頭が石化してしまえば、事実上の負けといっていい。
ここはゴルブダの体積が増えて狙いが定めやすくなった事をチャンスと考え、短期決着を狙うべきだろう。
ボクはザクメルを持って高速移動しながらゴルブダが伸びたときを狙い、イアチャの弾を浴びせ凍結させた。
そして、すぐに重い蹴りとパンチを連続で浴びせて粉砕した。
「や、やった」
「あ、あ、俺のゴルブダがぁ、なーんてな」
ドリゴドールが手を軽くひねると、壊れたゴルブダの破片は自然に集まり始め、何事もなかったかのように再生してしまった。
予想外だったが、考えてみれば不思議はないといえた。
魔性具というのは、武器といっても持ち主であるデビレンの分身のようなものであり、それにより完全不死である持ち主同様に破壊されてもすぐに再生できるというわけなのだろう。
ボクは考察の甘さを悔いながらも、戦闘を続行した。
すでにゴルブダの追撃がすぐそこまで迫っていたのだ。
やはり、動く事と考える事を封じるために頭部や足をおもに狙っているのが分かる。
このまま必死にザクメルを使ってガードをまぜながら避け続けるも、やはり限界がある。
ザクメル自体はいくら石化しようと性能そのものが失われるわけではないが、やはりこれ一本ではいずれ力負けしてしまうだろう。
もうどうしていいか分からなかった。
「くそ、心を乱してはだめだ。冷静に対処法を考えるんだ」
「へへ、まぁそういやがるなよ。石化した後はアジトのすみっこにでもディスプレイしてやるからよ」
「うう」
ボクはイアチャの冷気で全身を包んで防御しようとするが、ゴルブダの風圧だけで軽く突破されてしまった。

前回は軽くて小さい矢が相手だから防げたが、さすがにあんなでかい剣は無理なようだ。
次の手を考える間もなくゴルブダの追撃が迫るが、間一髪のところで飛んできた銃弾がそれを阻んだ。
ショウさんが援護に駆け付けたのだ。
「遅くなったな」
「ちっ、使えない雑兵どもめ」
「おっさん、こっからは俺もやるぞ。おっさん？」
「う……　ん」
ボクはさっきゴルブダに当たって落ちた銃弾を見て、石化していない事に気づいた。
そして、よく見るとザクメルの方もあれだけゴルブダと押し合ったというのに、まだ完全に石化していない部位がある事に気づいた。
石化した部分と石化していない部分の違い。
それを今までの戦いを思い返しながら、考えた。
「今まで石化した箇所は、ん？　そうか。そうなってたのか」
「何を一人で納得してるんだ。今更何をしようとおそい」
「はっ！」
ボクはその場から動こうとせず、目の前に迫っていたゴルブダの刃先を両手でガッとつかんだ。
そして、力を込めてドリゴドールごとぐるぐるふりまわし、地面に叩きつけた。
「どうやら、読みが当たったようだ」
「あれだけゴルブダをガッチリつかんでんのに石化してねぇ。おっさん、どういう事だ？」
「ショウさんのおかげだよ」
ボクはついさっき、ゴルブダに当たったのに石化しなかった銃の弾を見て、ただゴルブダに触れただけでは石化しないということに気づいた。
石化するのはゴルブダが切ったと判定するものだけであり、ゴルブダにこちらから攻撃したり、つかんだり、軽く触れた程度では石化に

はいたらない。
押し合ったザクメルの方にも所々石化していない部位があるのも、おそらくはそのためだ。
ドリゴドールはどうやらこの事実を今まで知らなかったらしく、激しく動揺していた。
「くそ、この状態でまさかそんな事を見抜くとは。しかしなんてやつだ。一歩間違えば両手が石化したかもしれないのに」
「さてと、仕組みが分かればこっちのものだ。キミを倒すまでこの手ははなさないぞ」
ボクは左手でゴルブダをつかんだまま、右手でイアチャの弾を連射した。
片手で戦わなければならなかったが、それはゴルブダを持つドリゴドールも同じ。
魔性の火を飛ばしながら、イアチャの弾を撃ち落していくしかなかった。
「くそ、いいかげん手をはなせ」
「その様子じゃ、魔性具を遠隔操作するなんて事はできないみたいだ。どうやら、勝機が見えてきたようだね」
「こいつらはミミッギュを持っているはず。ぐぐ、このままじゃまずい」
ドリゴドールは全身に魔性の火をまとい前進し、ボクから力ずくでゴルブダを奪った後で逃走した。
本当なら追いかけなくてはいけないところだが、ボクもショウさんも時間と体力を使いすぎてしまった。
この後に待ち受けるマンジイ救出のため、ここで戦い続けることはできなかった。

第二十七話「裏切りの果てに」

「ここ……　みたいだね」
　ドリゴドールを退けたボクとショウさんは道の先を進み、再び現れた白髪デビレンにおびき寄せられるようにして岩場へとやってきていた。
　マンジイの姿はどこにもなく、いたのは覆面をかぶったレベルフォーと部下と思われるデビレンたち五十人ほどだけだった。
「ようやくご到着か」
「約束通り来てやったぞ。じいさんを返してもらおうか」
「フフ、ずいぶん上からの物言いだな。だが、動揺しながらじゃかっこつかねぇな」
「あ？　な、何だと？」
「なぜその事をって？　フフ、気になるか？」
「さっきから何言ってんだ、こいつ。なんで、俺が心の中で思ったことを」
「まさか、キミは心の中を読んでいるのか？」
「フフ、ご名答。まぁ、分かったところでどうなるもんでもないけどな」
「読心術という奴だね。そういえば、聞いたことがあるな」
　ボクは、前に酒場で耳にしたツロロというデビレンの事を思い出していた。
　ツロロはアルティワというメリケンサック型の魔性具を手に装備しており、ただこれに力を込めて念じるだけで周りにいる者の心の中を読むことができるデビレンだと噂されていた。
　能力の対象範囲は三十メートルほどとさほど広くはなかったが、千里眼と併用することにより、かなり遠くにいる者の心の中を読むことも可能だとか。
　おそらく、ツロロはこの能力を使い、ドリゴドールがあの時間にあの場所に行くことを知り、うまくボクたちとぶつかるように仕向けたのだろう。

これなら、仮にドリゴドールが敗れても、ボクたちは消耗した状態でここへこなくてはならなくなる。
だが、それに今さら気づいたところでどうにもできず、見事にはまった現実を受け入れるしかなかった。
「まいったよ、そういう作戦か」
「フフ、俺の名前も能力も作戦も理解したようだな。ま、ドリゴドールみたいな能力依存のバカにしては役に立ってくれたよ。共倒れしてくれたら、もっとよかったがな」
「くっ」
「野郎、調子に乗りやがって」
ボクもショウさんも下手に動く事が出来ずにいた。
だが、そうしている間にツロロの部下たちが近づき始めていた。
「おとなしくリンチされやがれ」
「しかたない。まずはこいつらだけでも」
デビレンたちに突っ込んでいき、戦い始めるショウさんだったが、なぜか攻撃がうまく当たらない。
得意のパンチもキックもことごとくかわされ、かする程度がやっとだった。
「どうなってんだ。俺がこんな奴ら相手に」
焦り顔のショウさんは、わずかなスキをつかれて腹部を軽く切られてしまった。
「く、くそ」
「ショウさん、一体どうしたんだよ」
「フフ、俺のアルティワはな、読み取った心の中の情報を自分だけでなく、周りにいる者の頭にも伝達させることができるのさ。つまり、あの男の心の中の情報が部下たちの頭にも伝わっている状態だ」
「う、うそ。そんな力まで」
「フフ、分かる、分かるぞ。乱れている心が」
「ショウさん！」
「来るな、おっさん！　俺がこの程度の奴らに負けると思ってんのか！」

「そ、そうだ。ツロロから目を離すわけにはいかないし。ん？　彼はどこに」
「ここだよーん」
すでにツロロは気づかれないようにボクの背後に回り込んでおり、魔性の火を連続で放出した。
それはボクの背中にモロに命中し、一気に燃え広がってしまった。
「あちゃちゃちゃちゃ！」
「向こうのほうに気をとられたな。レベルフォー相手に油断しすぎだよ」
「うぉぇがぁぁ」
ボクはすぐに地面に転がって火を消すが、すでに背中はひどい火傷でじゅわじゅわとうずいていた。
火傷薬はちゃんと持っていたものの、この状況では使う余裕などない。
そもそも、使おうと思っただけで心を読めるツロロにはそれがばれてしまい、妨害されるのはもう目に見えている。
火傷の苦しみに耐えながら、戦い続けるしかなかった。
「ち、治療は後回しだ。まずはケリをつけないと」
ボクは涙目になりながらも、必死にツロロを攻撃した。
しかし、心の中を読めるツロロにはすべて見切られてしまい、なすすべがなかった。
かといって、態勢を立て直すために戦線離脱したりすれば、ショウさんのほうに攻撃が集中してしまうだろう。
やはり、彼のほうも戦況は芳しくなかった。
何とか雑兵を数人倒したものの、まだレベルスリーを含めた無傷の個体が半分以上残っている。
なんといっても、数がそれなりに多い上に連携もとれていて、しかも心の中を読まれている。
これが続けば、先に体力が尽きるのはショウさんの方だろう。
と思われたが、それから五分と経たずに状況は一変した。
なぜかデビレンたちの急に動きがぎこちなくなってきて、少しずつ

劣勢になり始めたのだ。
ツロロはアルティワをちゃんと装備しているし、能力を解いたような様子もない。
どう考えても伝達が途絶えるわけはなく、デビレンたちは困惑した様子だ。
それにより、今度はデビレンたちの方がスキをつかれ、ショウさんの猛反撃を受ける事となった。
「つ、ツロロ様ぁ！」
「さっきからあの男の心が読めなくなったと思ったら、なるほど、心の中を空にして何も考えない状態で戦っているんだな。単純な攻撃しかできなくなるという欠点もあったが、レベルスリーやレベルツーのように格下の相手なら十分というわけだ」
わずかながらも危機感をいだいた様子のツロロは、ショウさんの方へと走り出した。
ボクはそのチャンスを逃さず、小刀ザクメルを装備して追撃した。
「うぉぉぉ！」
「ん？　は、速っ！」
ツロロもすぐに拳をかまえるが、間に合わず腹を切り裂かれた。
その一撃で態勢を崩してしまったツロロは、続けて顔や手にも追撃を受ける事となった。
「ぐ、うう」
「背を向けたスキを逃すほどボクは甘ちゃんじゃないよ」
「こ、このブタ野郎が」
「はぁ、はぁ、今の体力じゃ厳しいがやるしかない。再生する時間は与えないよ」
「くそ、これじゃあまるで瞬間移動じゃないか。これが生き物の動きなのか。目で追いきれない。ぐ、ダメだ」
いくら相手の心を読んで動きを把握できても、それに対応できるだけのスピードがなければ意味がない。
ツロロ自身も把握していなかったであろうアルティワの思わぬ落とし穴であった。

しかし、満身創痍の体で極限まで高速移動を続けてしまったボクの体は悲鳴を上げ始めた。
それでも、再生する時間を与えるわけにはいかず、血管から出血しながらも攻撃を続けた。
「うぐ、うう」
「くそ、だったら」
ツロロは魔性の火を生成し、それで自身をバリアのように覆った。
時間稼ぎしながら再生を終えるつもりだろうが、そうはいかない。
ボクは魔性の火のバリアの中を通り、ツロロの腹をざっくり切り裂いた後、バリアの外へと殴り飛ばした。
そして、全身にひどい火傷を負いながらも倒れずに小刀ザクメルを振り上げた。
「う、うう」
「う、き、キサマいかれてんのか！　俺と刺し違える気か！」
「最悪それでもかまわない。少なくとも負けて死ぬという選択肢はない」
「うう、ま、待て！　人質が、あのお荷物ジジイがどうなってもいいのか！　奴はこの敷地内に縛り付けてある。俺が合図を送れば、部下共が息の根を止める手はずになっているんだぞ」
「ぐ、だったら」
「おっと、先に助け出せばいいなんて考えるなよ。いくらお前でも俺が合図を送る前に奴を探し出すなんて不可能だ。奴を救い出すためにはどうすればいいかわかるよな？」
「う、うう」
「まぁ、恨むんならあのバカで間抜けなジジイを恨むんだな！」
ツロロは今までの仕返しをするかのように、無抵抗になったボクを虐げはじめた。
首をガッとつかんで押し倒し、笑いながら殴り始めた。
それが一通り終わると、今度は何度も足蹴にした後、顔をじりじりと踏みつけた。
「俺は自分でも吐き気がするようなブ男だからよ、顔がいい男と善人

が大嫌いなんだよなぁ。特にお前みたいな正義の味方ヅラした奴がなぁ！」
「そこまでだ！」
「ショウさん」
「ぐ、貴様、部下たちをもう倒してきたのか」
「今すぐその足をどけろ。でないと、覆面と一緒に顔の皮もはぐぞ、コラ」
「は、ハハハ、やれるもんならやってみろよ！　こっちには人質が、あーっ！」
　驚愕するツロロの前には、槍を構えるマンジイの姿があった。
　その後ろからはスズとマジェリーがショウさんと対になるようにして現れ、完全な包囲網を作った。
「ニシさん、お手柄よ。あなたがツロロを引き付けてくれたおかげでマンジイを助け出せたわ」
「くそ、増援か。だったら、こっちも」
　ツロロは合図を送り、新たに百人近い部下たちを呼び寄せた。
　だが、直後にスズの斬撃とマンジイの槍、続けてマジェリーの放った電撃であっという間に全滅させられた。
「あ、が、ぐ」
「スズ、今のマジェリーの攻撃は？」
「改造で食事の代わりに電気エネルギーで動けるようになったの。使いすぎれば動けなくなるけど、ああやって電気を武器として使う事も可能よ」
「へぇ、それはたのもしいね」
「さてと、残るはお前さんだけじゃの」
「ま、待て、まだ傷が再生してないんだ。お、お前ら、手負いの相手を五人がかりで襲うつもりか！」
「部下をあれだけ連れてきたてめぇがいう事じゃねぇだろ」
「ひ、ひぇぇぇぇ！」
　ツロロはボクたち五人の一斉攻撃を受け、倒れた。

いくら心の中を読めても、複数の動きに同時に対処することなどできやしない。
無敵と思われたアルティワの最大の欠点だった。
「う、がが。き、さまら」
「助かったぜ。ナイスだ、お嬢ちゃんたち」
「あなたこそ。あんな状況で健闘できるなんて大したものよ」
「スズ、後は私やる」
「うう、くそ」
逃げようとしていたツロロはマジェリーにミミッギュを注射され、デビレンの力を失った。
だが、それと同時に高笑いが響き渡った。
逃げたと思われたドリゴドールが現れたのだ。
「フフ、後を追いかけてこねぇと思ったら、こういう事だったとはな。ツロロ、よくも俺を利用してくれたな」
「またキミか。キミの能力はさっきの戦いでもう分かっている。もう通用しないよ」
「ほざけ、デブ。さっきは油断しただけだ。今度は、ん？　こ、これは」
ドリゴドールの顔色がだんだん変わっていった。
そして、辺りを覆い始める禍々しいほどの殺気。
飛んでいた鳥たちが一斉に飛び立ち始め、それと同時にチィトが空からゆっくりと降りてきた。
「ごきげんよう」
「こ、こいつがチィトなのか。すべてのデビレンの頂点に立っているっていうレベルファイブの」
「くっ！　まさか、ここで戦う事になるとはの」
「ああ、安心してくれ。今日はお前らと戦いに来たんじゃない」
チィトはボクたちを素通りし、ドリゴドールの前に降り立った。
ドリゴドールは何やら様子がおかしく、かなり引き気味な感じだった。
「ぼ、ボス、加勢は必要ないですよ。こいつらは今から片づけるところです」

「いや、その必要はないよ。ドリ、お前には今ここで消えてもらう」
「は？　そ、そんな、俺は今まで任務に失敗した事なんてないはず。いくらなんでもそれは」
　あたふたするドリゴドールだったが、その後チィトが差し出した冊子を見て青ざめた。
　そして、涙を流しながら震え、後ずさりを始めた。
「あ、あああああ」
「中にはお前が俺を倒して組織を乗っ取るための計画が書かれていた。一緒に計画を立てていたお前の腹心たちはすべてを白状させた上ですでに処刑した。言い逃れは不可能だ」
「ぐ、う」
「ああ、悲しい事だ。お前の事信用していたのに。また辛い部下殺しをやらなくちゃいけないんだな」
「うう、フ、フフフ、ばれちゃしょうがねぇな。もはや、これまでだ！
　死ね、チィト！」
　開き直ったドリゴドールはゴルブダを伸ばし、チィトを攻撃した。
　しかし、片手で軽く受け止められ、まったく動かせなくなってしまった。
「ば、バカな。こんなはずは」
「はぁ、お前の能力くらい熟知しているよ。触れただけで切られなければ石化はしないんだろ？」
「ち、ちくしょう」
「お前はレベルフォーとなった時点でそれに満足し、鍛錬を怠った。だから、今からみじめに死んでいくのさ」
「う、うわぁぁぁ！　やめてくれえええ！」
　ドリゴドールはチィトに首を掴まれ、巨大な魔性の火に包まれた。
　そして、解放されたときには人間の姿で、しかも石化した状態で息絶えていた。
　永久に残る事となったその表情は、恐怖によるものなのか、すさまじくおびえているものだった。
　一体あの魔性の火の中でどんな凄まじい惨劇が起こっていたのか。

ボクはとても想像する事が出来なかった。

外伝一「狂気の復讐者」

俺の名はブガイ。
世の中に野放しになっている犯罪者やデビレンをターゲットに殺しをしている私刑屋だ。
現在、次々と舞い込んでくる依頼をこなして忙しい毎日を送っている。
この日も朝早くから新しい依頼が届き、すぐに部下たちと共に依頼主の元へ向かった。
依頼主はゴトウという初老の男性で、両親を暴漢に殺されたのだという。
実際に会って話を聞いてみると、本当に吐き気がした。
犯人はゴトウ氏の両親に借金をしていた木工所を経営する男で、返済が難しくなったために事件を起こしたそうだ。
本来なら死刑になって当然だったが、下されたのは何と半年の禁固刑のみ。
かつて犯人がデビレン狩りによって非常に優秀な功績を残したため、減刑が認められたという。
この手のパターンは依頼の中でかなり多く、本当に悪質極まりないといえる。
いくら社会に貢献するような功績を残したとしても、罪を犯していいという理由にはならない。
被害者の無念を思うと、胸が非常に絞め付けられた。
「ゴトウさん、ご安心ください。必ずご両親の無念を晴らしてみせます」
「ブガイさん、お願いします。この状況ではもうあなたしか味方になってくれる人がいなくて。うう、うう」
「すぐに戻ります」
俺はもしもの時のためにほとんどの部下をゴトウ氏の護衛として残し、ベテランの部下デニスだけを連れて出撃した。
デニスはパンチパーマにサングラスが特徴の陽気な男だが、殺しの

際には容赦のない冷酷さを発揮する頼れる男だ。
この日ものん気に口笛を吹きつつ、右手には手入れの行き届いたナイフをしっかりと握っていた。
「へへへ。ねぇ、ブガイさん」
「何だ、先発を譲れとかというのは聞かんぞ」
「いや、気になってましてね。依頼主のところを出てから少し様子がおかしいって」
「まったく、お前はそういうところにはすぐ気がつくな」
「何か、依頼主に感情移入でもしてたとか？」
「まぁな、まるで昔の自分を見ているようでな」
俺は眠っていた過去の記憶を呼び覚まし、語り始めた。
今から四十年以上前の雪が降る日の夜、俺は小さな村で生を受けた。
すでにその時から過酷な状況がはじまっていた。
父はすでに病死し、とにかく絵に描いたような貧乏暮らしだった。
いつも腹ペコで、服はボロボロで穴あきは当り前。
ただ、肉親である母と兄の存在だけを希望に毎日を生きた。
しかし、ほどなくして近くの城下で戦争がはじまり、敗残兵たちが押し込み強盗のように村に乱入。
俺たち一家は逃げるように家を捨て、あてのない放浪の旅をはじめる羽目になった。
そして、たどり着いたのは戦火の届かない小さな町。
そこで家族三人での新しい生活がはじまった。
母は町長の家の家政婦、兄は食堂の見習いとして働きだしたが、俺は幼かったため単なるお荷物。
何とか家族の助けになりたい。
そんな一心で始めたのは戦争の雑務係だった。
危険だというのは分かっていたが、幼い俺を雇ってくれるところは他にない。
覚悟を決め、戦火の飛び交う土地へと戻っていった。
そこからは本当に命がけの毎日だった。

いくら雑務が主だといっても、敵軍に遭遇してしまう事も決して珍しくない。
そして、味方であるはずの兵士からは奴隷のように扱われ、うさはらしに殴られたりもした。
まさに周りは敵だらけの状態。
あまりの辛さに耐え切れずに何度も逃げ出したいと考えたが、家族のためにと戦争終結まで耐え続けた。
それにより得た物は、数カ月程度なら家族三人で暮らしていけるだけの食糧と馬一頭。
これで少しは家族を楽にしてあげられる。
明るい未来を思い描きながら家へと戻るが、待っていたのは残酷すぎる現実だった。
母と兄は半年前に殺害されていた。
犯人は町長の家のバカ息子で、普段から素行の悪さの目立つ不良だった。
捕まっているものと思われたが、何とすでに何事もなかったかのように自宅に戻っていた。
父親が多額の罰金を収めたため、禁固一週間という刑で済まされていたのだ。
罰金を多く収めた罪人が減刑されるという話は前から前々からちらほら聞いていたが、もちろん納得できるはずもない。
俺はすぐに町長宅に行き、バカ息子に面会を求めた。
しかし、ドア越しに返ってきたのは「ああ、女にふられてイライラしてたからやったあの親子か。それが何だ？」というものだった。
あまりにも短絡的な動機、そして故人に対する侮辱なんてものじゃおさまらないほどの発言。
気がついたとき、俺は奇声を発しながらドアを蹴破ろうとしていた。
だが、まもなくやってきた守衛たちにひどく殴られ、追い返されてしまった。
その帰り道に放心状態で歩いていると、母と親しかった近所の女性

に呼び止められた。
女性は事件の第一発見者で、母と兄の最期を看取ってくれていたのだ。
二人とも、俺を残して逝かなければならないくやしさと詫びを涙ながらに口にしていたという。
逝った者の無念と残された者の悲しみと怒り。
二つが重なり、俺はバカ息子への復讐を決めた。
仕事で得た物すべてを売却して武器を買い、警備の薄い時間を見計らい、町長宅に向かった。
怒りが頂点にありながらも、何とか理性だけは保ちつつ、ただバカ息子を殺す事だけを考えた。
だが、バカ息子は既に俺が再びやってくると予想していたようで、周辺は屈強な男たちが固めていた。
そこへ飛び込んでしまった俺は入り口であっさり捕まってしまった。
そして、長時間かけて集団リンチを受け、バカ息子からは顔面を踏みつけられて蔑まれた。
その後は意識が朦朧とするまでいたぶられ、町の外にあるゴミ捨て場に投げ捨てられた。
このまま死ねば、母と兄の無念は永久に晴らせなくなる。

そう思うと、肉体が自然と動いていった。
何とか機能している右手を使って必死に地を這い、助けを求めて進んだ。
三日三晩かけて荒野をさまよい続け、たどりついたのは戦争で荒廃した極寒の街。
ここで傷を癒し、必ず復讐をとげるつもりだった。
しかし、街の中にあった唯一の療養所は治療よりも看取りを目的とした場所だった。
おまけに周りはおびただしい数の墓と骨の破片だらけ。
まさに死を待つ人々が暮らす場所といえた。

それでも俺はわずかな希望を胸にここで生き抜く道を選んだ。
古傷がうずき、小虫にしつこくたかられ、あまりにも長く感じる一日を重ねる毎日。
ドクターからは何度も安楽死するよう勧められた。
だが、死ぬという選択肢は絶対にありえなかった。
すべては復讐をとげるため。
ただひたすらに生に執着した。
そんな状態が十年以上続き、他の患者たちはとうとう一人もいなくなり、ドクターたちは療養所を去っていった。
それにより、わずかに与えられていた毎日の水と粉団子すら手に入らなくなった。
まともな治療を受けられなかったせいで、すでに両足と左手はまともに動かせる状態ではない。
残された道は、ここにある設備で自分を動けるように作り直す事だけ。
無茶は承知の上で施設内に残された医学書を読み漁り、何度も右手で全身にメスを入れた。
その間、施設内をうろついている小虫とねずみだけで何とか食いつなぎ、死にかけては戻り、死にかけては戻りを繰り返した。
そして、十年にわたる苦行の末、ようやく自力で動ける肉体を取り戻した。
だが、それに何の代償もないはずがなかった。
ほぼ限界を超えるような方法で施術したため、肉体は常に不安定な状態。
一ミリでも肉体を動かせば雷に打たれたような苦痛が走り、しばらく立ち続けるだけで強烈な吐き気が襲った。
こんな状態では復讐に行ったところでまた返り討ちにされるのがオチ。
何とか焦る気持ちを押さえ、以前のように動けるようになれるだけの肉体強化に打ち込み始めた。
加えて、戦闘技術の訓練も積極的に行った。

もちろん、激しく肉体を酷使するたびに苦痛と吐き気に襲われた。
しだいにじっとしているときでさえ体調をくずすようになり、うまく寝付く事もできなくなったが、それは逆に好都合。
睡眠時間がいやおうなしに削られる結果となり、より多くの時間を訓練に使えるようになった。
力はメキメキとついていき、十年もする頃には手練れが複数相手でも割れり合えるほどの強さを手に入れた。
これでようやく復讐を再開できる。
俺は殺気を押さえつつ、バカ息子のいる町長宅に向かった。
まずは下見のため、あやしまれないように周りを探るところからはじめた。
そこで出会ったのは、高そうな服を着た幼い男児と母親と思われる女性。
話してみると、バカ息子の妻子だった事が判明した。
妻は難しい臓器移植を終えたばかりで、夫が治療のために懸命になって奔走してくれたとうれしそうに話していた。
さすがにそんな話を聞いては、気持ちが揺らいでしまう。
時がたち、あのバカ息子も改心していっているのかもしれない。
妻子の気持ちを考えれば、復讐を思いとどまるべきかもしれない。
そう思いながら、一度は町長宅から立ち去った。
しかし、その後にふと立ち寄った酒場で衝撃の事実を聞いてしまう。
バカ息子は妻のために部下たちを使い、無関係の人を誘拐して臓器を強奪していたのだ。
やはり、クズはクズだった。
奴をこのままにしておけば、また不幸になる者が現れるに決まっている。
俺の揺らいでいた気持ちは完全に固まった。
その日にうちに町長宅の前に身をひそめ、待ち構えた。
そして、バカ息子が帰宅したところを襲い掛かり、すぐ近くにいた護衛に気づかれないように連れ去った。

殺害場所として選んだのは、今は更地になっている母と兄が殺された古小屋の跡地。
移動したのち、バカ息子は強気で偉そうな態度をとり、俺が素性を明かした後もそれは変わらなかった。
出てくるのは俺への罵倒に飽き足らず、母と兄への侮辱の数々。
おそらくは、もう助かるまいと思って言っていたのだろうが、このまま殺しても俺の気はおさまらない。
考え抜いた末の残虐刑で息の根を止めることにした。
まずは目を布で覆い、致命傷にならない箇所から順に刺していった後、肺に穴をあけながらじわじわといたぶった。
さらに「お前の妻と子供も後で殺してやる」と脅しをかけた。
もちろんそんな事をするつもりはなかったが、母と兄が受けたのと同じくらいの絶望を与えてやりたかったのだ。
予想通り、傲慢なバカ息子はとうとう涙を流し始め、しだいに衰弱していった後に苦しみながら絶命した。
三十年以上に及ぶ俺の復讐劇はようやく幕を閉じたのだった。
これで思い残すことは何もない。
憑き物がとれたかのように、母と兄の待つ場所へと足を進めた。
ここまでが俺の人生の第一部分といったところ。
話し終えた後、デニスは汗まみれで絶句していた。
その後は、しばらく無言で進行を続けた後、静かに口を開いてきた。
「あの、すいませんでした。何ていうか、面白半分で聞いてしまって」
「何だ、お前らしくない。調子狂うじゃないか」
「俺が同じ境遇だったとしたら、そこまでやれない。おそらく、療養所の時点で死を選んだと思います」
「それが普通だ。ただ、俺が執念深すぎたってだけの話だ」
「あ、あの、今でも体の不調は続いてるんですよね？」
「ああ、その代わりにこうしてしぶとく生きてるんだからな。おっと、見えてきたぞ」
俺は数メートル先を歩いていたターゲットに狙いを定めた。
そして、背後から忍び寄り、周りに気づかれないようにすばやく連

れ去った。
その後、ターゲットは子供のように泣き叫び、遅すぎる後悔と命乞いを口にした。
さらには、残される家族の存在を必死に訴え、俺の足に力強くしがみついた。
「うう、お願いです。どんな償いでも、どんな償いでもしますから」
「そうか、どんな償いでもするか。なら、受けてもらおう」
俺は懐から取り出した拳銃でターゲットの額を素早く打ち抜き、即死させた。
苦しませずに葬り、死後は善人と同じように弔ってやる。
命乞いするターゲットに俺がしてやれるのは、それだけだ。
他人の幸せを奪っておきながら、自分だけ幸せでのうのうと生き続けようなど許されるはずがない。
そう自分に言い聞かせながら、俺はターゲットを丁重に埋葬した。

外伝二「私刑屋結成物語」

木工所社長殺害が終わった一ヶ月後、俺は仮アジトから少し離れた場所にある墓地を訪れた。
目的は、この地で眠っている仲間たちへの近況報告のため。
気丈にふるまうつもりだったが、悲しい昔の記憶が頭に貼りついて離れなくなってしまった。
それは、母と兄の仇を討ち、旅していた頃の話。
死に場所を求めて旅していた俺は、ふと通りかかった町の酒場である噂を耳にした。
この近辺でも残酷な事件を起こした犯人が裁かれずに野放しになっていたのだ。
俺にはまったく無関係の話ではあったが、やはりいい気はしなかった。
その後、体は自然のような形で被害者遺族の元へ向かった。
最初に訪れたのは、不法侵入者に妻を殺された男性の家。
そこは亡霊が住んでいるかの如く薄暗く、中では男性と母親と思われる老婆のすすり泣く声が響いていた。
予想はしていたが、犯人は罰金を多く収めていたために無罪になっていたのだ。
しかも、今でも若い女性にわいせつ行為を繰り返したり、誘拐まがいのマネまでしているらしかった。
もはや、母と兄を殺したバカ息子と何ら変わらない。
俺は強い怒りをかかえ、犯人である男の元に向かった。
その時はターゲット宅に護衛らしい者はおらず、難なく侵入し拘束。
バカ息子の時と同じ方法で残虐にいたぶっていった。
その際にターゲットは「奥さんが就寝中にわいせつ目的で侵入したが、騒がれた気がしたので仕方なく殺した」とほざいていたが、何にせよ被害者に落度がなかったことに変わりはない。
欠片ほども同情する気はなく、虎視眈々となぶり殺した。

その後は死骸をこれでもかというくらい無残にして近くの底なし沼に投げ捨てた後、すぐにもう一つの事件の被害者宅に向かい、聞き込みを開始した。
それによると、被害者はあどけなさの残る十六歳の少年で、通っていた町の学校で優等生すぎた事を同年代の少年たちに妬まれ、ひどいリンチを受けて死亡したという。
こちらは、共犯たちが捕まっていたものの、主犯の少年は親のおさめた多額の罰金により無罪になっていた。
いくら子供でも、これは許されるはずがない。
俺はすぐに主犯の少年が住む町はずれの豪邸に向かった。
護衛はいるだろうが、今の俺なら苦にする必要はない。
そうタカをくくっていたのがまずかった。
突入した豪邸の中には、得体のしれない武器や再生能力を持った人型の化け物たちがうろついていた。
これが、俺が初めて目にしたデビレンだった。
存在そのものや遠い地方で猛威を振るっているという噂は聞いていた。
いつかはこの近くにもと思っていたが、とうとう勢力を拡大して攻めてきたのだ。
こうなっては仕方ないと果敢に戦う俺だったが、まさかの苦戦を強いられた。
一体が相手ならともかく、複数相手ではさすがに戦力差があり過ぎたのだ。
おまけにこちらが不安定な体なのに対し、あちらは強力な再生能力を有しているという有様。
しだいに限界へと追い込まれ、レベルスリー十体を倒したところで完全包囲されてしまった。
だが、とどめをさされる寸前、刀を二本持ったアホ毛の黒髪男が横壁を破壊して乱入してきた。
それが、後に俺の生涯の友となる二刀流のマツだった。
彼は故郷に甚大な被害を与えたデビレンたちを追って旅していた

若者で、このときわずか二十一歳。
有している剣の腕はまさに達人級で、目の前にいたデビレンたちを次々と斬り倒していった。
その後は特に言葉を交わすこともなく俺と共闘し、奥に隠れていたターゲットを始末するところまで手伝ってくれた。
そして、自分の生い立ちと共に世界の置かれている状況を語り始めた。
それによると、この時の世界の治安は前とは比較にならないほど不安定になっていた。
原因は、デビレンの勢力がものすごい勢いで増してきていたから。
力の弱い子供や老人から命を奪われていき、まともな防衛すらままならない状態。
それに伴い、デビレンに対する戦闘技術を教える学校、デビレン狩りという職業が増えてきていたが、それはそれで問題だった。
効率を上げるため、デビレン狩りで優秀な成績をおさめた者は犯罪を犯しても減刑、または無罪にするという法が出来てしまったのだ。
そのせいで人間による犯罪も追い討ちをかけるように増えていき、ついにはデビレンと結託して悪さする人間まで現れる始末。
結果、デビレンや法で裁けない人間たちに被害者遺族が無茶な復讐をしようとして、返り討ちにされるケースも多々あるという。
当然、この時点でも世界のどこかで善人たちが無念の涙を流しながら散っていたかもしれない。
正義感の強いマツはこの事実に心を痛めており、独りで戦い続けていたのだ。
そんな話を聞いては、もう死に場所を求めてなどいられない。
俺は母と兄の復讐のためだけに手に入れた力を使い、世界の悪を一掃すると誓った。

まずはマツと共に犯罪者たちの粛清をメインにしつつ、デビレン狩りを行った。
二人だけではやれることは限られているし、本当に危険で先の見え

ない毎日が続いた。
だが、戦っていくうちに賛同者は自然と増えていき、勢力は確実に大きくなっていった。
活動開始から四年もたつころには、ついに仲間の数が一万を突破し、一つの組織として成り立つようになった。
そうなった以上は身勝手な行いをする者が現れないように徹底する必要があり、以下のような厳しい決まりを設けた。
一・ターゲットは何の落ち度もない人間の命を奪った人間とデビレンのみ。
二・たとえ巻き添えのような形であっても、ターゲット以外は傷つけてはならない。
三・ターゲットとする者が本当に裁くべき者なのかどうかは、徹底して調べ上げ、誤認殺害は絶対に避けよ。
四・懇願されたとしても、依頼主の手を汚させてはならない。
五・ターゲットを温情で見逃してはいけない。
六・あまりにも悪どいターゲットは最低でも百時間かけて殺害せよ。
七・ターゲット殺害を妨害する第三者が現れた場合、拘束して脅す程度に留めよ。
八・一度引き受けた依頼は、必ず遂行せよ。
九・いかなる状況下であっても、依頼報酬はこちらから請求しないようにせよ。
これらを破った者は絶対に許さず、徹底的に罰を与えた。
おかげで優秀な部下たちが次々と育っていき、俺たちは世界の無法者たちにとって大きな脅威と認識されるようになり、いかれた法を利用した悪質な犯罪は確実に減少していった。
一方でデビレンたちを牽制するにはまだまだ力不足で、撃破数は芳しくない状態。
しばらくは腕を磨きながら依頼をこなしていき、チャンスを待ち続けた。
その結果、勢力はさらに大きくなったものの、国からは本格的な犯

罪組織としてマークされ始めてしまった。
いくら悪人限定とはいえ、人間まで殺しているのだから、どの道避けられない道だと覚悟はしていた。
しかし、ある問題が浮上した。
ちょうどこの頃、滞在していた村の中である噂が流れていた。
マツが酒場で働く美しい娘ミスズと相思相愛になっていたというのだ。
できれば一緒になりたいとまで考えていたようだが、私刑の旅に戦闘の心得がない者を同行はさせられない。
それ以前にマツは私刑を生業としている身であり、世間から見れば罪人だ。
別れるにしろ、結ばれるにしろ、光明など見えるはずもなかった。
悩みぬいた末、俺はマツを一部の部下たちと共にデビレン狩り専門の組織として独立させることにした。
マツ個人が国にマークされているわけではないし、まだ間に合う。
そう考え、村を出発する前夜に一対一で話した。
十時間にも及ぶ言い合いの末に殴り合いにまで発展したが、明け方になってようやく正式に独立の話がまとまった。
正直、俺個人としては辛い選択だったが、マツが幸せになるためだと信じ、別れを告げた。
たとえ離れていようとも、目指すものが同じだという事は変わらない。
そう自分に言い聞かせ、腕を磨きながら戦っていき、悪を裁き続けた。
その結果、俺は私刑王と呼ばれるようになり、国からは組織としてだけでなく一個人として本格的に狙われるようになった。
一方のマツは名のあるデビレンたちを次々と討ち取っていき、英雄のような存在になっていった。
家庭での生活もうまくいっていたようで、ミスズとの間に五人の子をもうけていた。
たまに送られてくる手紙には「五人目でやっとできた待望の女の子

を溺愛する余り、息子達が拗ねて困っている」などほほえましい内容が書かれていた。
しかし、幸せは長くは続かなかった。
長い遠征の帰り道、マツは消耗していたところをレベルフォーのデビレンに襲撃され、命を落とした。
得体のしれない魔性具の力で悪夢の世界へと落され、苦しみながら息絶えていったという。
もはや、言葉にできなかった。
もっと気にかけていたら、助けられたかもしれない。
いや、それ以前に独立など勧めなければよかったのかもしれない。
あげればキリがなく、ただ後悔と悲しみに打ちひしがれた。
そこからは前以上に戦いに明け暮れる毎日となった。
悪を裁き続け、マツの遺族が住むこの世界を守る事が何よりの弔いになると考えたのだ。
しかし、現在に至るまで悪を裁き続けても、いまだに暗い時代の終わりは見えない。
我に返った俺はマツの墓の前でただ頭を下げた。
「マツ、今でもいかれた法はなくならないし、完全な平和は訪れそうにない。生き残ったのが俺でなく、お前だったら少しは変わっていただろうか？　ん？」
何やらにぎやかな声が周りから聞こえてきた。
マツの妻ミスズが子供たちを連れてやってきたのだ。
彼女は急いで立ち去ろうとする俺に丁寧に会釈すると、マツの墓に手を合わせた。
「パパ、みんな大きくなったでしょう。よく見てあげて」
「ミスズさん、あの、いや」
俺は何と言っていいか分からず、下をうつ向いてしまった。
ミスズはそれを気遣うように目線を合わせながら話しかけてきた。
「ブガイさん、必ず来ていると思ってました」
「み、ミスズさん、しばらくだったな」
「ええ、子供たちに会うのははじめてでしたね。上の子なんてあの人

にそっくりでしょ？」
「あ、ああ」
「私ね、ブガイさんには本当に感謝してるんですよ」
「え？　どういう意味だ？」
「ブガイさんがあの人を独立させてくれなかったら、私と一緒になれなかったし、かわいいこの子たちも生まれなかったんですから」
「今、幸せ……　なのか？」
「もちろん。だって、大好きな人の子供たちに囲まれて生きているんですから」
　ミスズは満面の笑みを浮かべながら、子供たちと戯れながら帰っていった。
　どうやら、気遣いのつもりで強がっているわけではなさそうだ。
　俺は心から安堵し、救われた気持ちになった。
　そして、同時に寂しさのようなものを感じた。
　何かが違っていれば、俺も今頃は妻や子供たちに囲まれていたかもしれない。
　殺しとは無縁の平穏で楽しい毎日を送っていたかもしれない。
　しかし、私刑屋として名を上げてしまった今となってはそんなものはただの甘い夢。
　それを捨てる事でたくさんの人が救われるなら、仕方ない事だ。
　だから、俺はこれからもただ悪と戦い続ける。
　それがこの世界に真の平和をもたらす唯一の道なのだから。

第二十八話「全力の仇討ち」

「ショウさん、待ってよ」
「あ？　ちょっと離れて歩いたからってびびりすぎだぞ。しゃきっとしろ」
「あ、うん。えーっと、何か食べれそうなものは」
ドリゴドール、ツロロとの戦いから六日後、ボクはショウさんと共に森で食糧捜しをしていた。
しかし、どうも落ち着いて集中できない。
とにかく、頭の中はチィトの事でいっぱいだったのだ。
あの常識外れの強さと殺気、そして自身の能力である石化により絶命していたドリゴドールの謎。
考えれば考えるほど、恐怖と絶望が強くなっていった。
「あ、あああ、うう」
「おい、大丈夫かよ。顔が真っ青だぜ」
「あ？　あああ、そこにチィトが！」
「ありゃ、ただのでかい岩だ。何寝ぼけてんだ」
「ああああ、あっちにもチィトが！」
「ありゃ、銃を構えた男じゃねぇか。ん？　銃を構えた男？」
ショウさんはいきなり身構えると、ナイフを奥の木に向かって投げた。
それと同時に数発の銃弾がボクの足元に命中した。
「うわ！」
「これは麻酔弾のようだな。敵は……　逃げたみたいだな」
「敵？　でも、殺気のようなものはまるで感じなかったけど」
「俺もだよ。つーか、ありゃデビレンじゃなくて人間だったしな」
ショウさんはしばらく何かを考えるようにうつむいた後、口を開いた。
実はここ数日の間、誰かから見られているような感じが何度かしていたという。

そういえば、三日前にもスズとマジェリーの荷物が荒らされ、たまたま近くにいたボクが疑われたばかり。
もしも、それらすべてが同一人物の犯行だとしたら、ボクたちを狙っている人間がいるという事になる。
と思っていたら、さっそく人影のようなものがこちらを気にした様子で身を隠していくのが見えた。
ここは今のうちにはっきりさせておいた方がよさそうだ。
途中までは様子見のために泳がせていたが、森の出口に着いたところでショウさんが一気に後退し、逃げようとしていた白髪男を捕まえた。
「斬新だな。男にストーカーされるとはな。何者だ、お前」
「くっ！」
逃げられないと判断したのか、白髪男はショウさんにつかみかかってきた。
なかなかの力持ちのようで動きもよかったが、ショウさんの方が一枚上手であり、つかみかかった腕をひねられて押さえこまれてしまった。
「ぐぅ」
「とりあえず、なんでこんな事したか事情を話してみろよ。悪いようにはしねぇから」
「こうなった以上はしかたないか。私の名前はタクマ。どうか私のたのみをきいてください」
タクマは抵抗をやめて、話し始めた。
それによると、彼はイジャユというレベルフォーのデビレンを倒そうと追い続けていて、そのためにボクたちの持つミミッギュを盗み出す機会をうかがっていたらしい。
イジャユは茶色いもじゃもじゃひげとオネエ言葉が特徴のデビレンで、ゲーム感覚で人間を殺す癖があると聞いたことがあり、タクマもその犠牲者なのだそうだ。
十年前、婚約者と一緒に夜道を歩いていたところを襲撃され、激しく抵抗するも力及ばず昏倒。

一命をとりとめたものの、彼女は亡くなり、そこからが彼の地獄の始まりだったという。
彼女の唯一の肉親だった母親は傷心のタクマを「何でちゃんと助けてくれなかったの？」、「一人だけ生き残りやがって」と執拗に責め、「手なんか合わせにくるヒマがあったら、犯人を捕まえてこい！」と激しく攻撃。
タクマ自身も彼女を守れなかった事を大変後悔していた事もあり、本来ならば犯人が背負うべきである自責の念を背負う事となってしまったのだ。
「その後、私は仕事をやめ、彼女との結婚のために貯めていた資金を使い、犯人を追う事を決めた。そして、やっと奴が拠点としている場所を見つけた。足りないのはミミッギュだけ」
「キミ、もしかして自分でそのイジャユと戦うつもりなのかい？」
「ああ、そのためにこの十年めいっぱい鍛えてきたんだ。たのむ、ミミッギュを私に分けてくれ！」
「ダメだ、危険すぎる。さっきの戦いを見る限り、なかなかの戦闘能力を持っているみたいだが、俺らプロでさえ、レベルフォーみたいな怪物にはチームを組んで戦ってんだぞ。分かってくれ、一般人を死なすわけにはいかないんだ」
「協力してくれないなら、もういい。別の者にたのむまでだ」
「待てよ、情報を持ってんなら、協力するのが一般人の義務だ。被害が広がってもいいのか！」
ショウさんはタクマを行かせまいと押し戻すが、必死に抵抗されて殴り合いになってしまった。
ほぼ一方的にショウさんが押していたが、タクマはなんとか耐え抜いた末、隠し持っていたナイフ自分の首に押し当てた。
「言うとおりにしてくれないなら死ぬぞ。いいのか？　一般人を死なすわけにはいかないんじゃなかったのか？」
「はやまんなよ。そんな事したら、親が悲しむぞ」
「親父やおふくろとはすでに絶縁してきたよ。死んだ女のためなんかに人生棒にふるななんて言うから」

「なるほどね。もうそんな事までしてきたのか。しかたねぇな」
ショウさんはしかたなく、情報をもらうかわりとしてミミッギュを渡す約束をした。
その情報とは、イジャユは人の寄り付かない山中の古倉庫を拠点としているという事、物の材質を変換させるエンジュウという魔性具を持っているといった魅力的な情報ばかり。
だが、それをすべて聞き出すと、ショウさんはタクマの腹を殴った後で近くの柱に縛りつけてしまった。
「すまんな。こんなマネはしたくなかったんだが」
「今はしかたないさ。急ごう、ショウさん」
ボクたちは戦闘準備を整え、イジャユの元に急いだ。
ところがしばらくすると、タクマは柱を引っこ抜き、縛られたまま爆走してボクたちを突き飛ばしていった。
「待っていろ、イジャユ！　今日こそ彼女の無念をはらす」
「しつけぇぞ、コラ。あんたを巻き込むわけにはいかないんだ！」
「ふざけるな！　私は誰かにやってほしくて情報を集めたわけじゃないんだ！」
「つたくよ、いっそ一軒家にでも縛りつけとけばよかった」
「何に縛りつけたって私は追ってくるぞ！　だいたいキミは仕事だから、敵を倒して名をあげたいからやっているだけだ！　そうだろ！」
「バカにすんな！　俺だって悪党を憎む心くらいある。平気で人を殺すようなクズが何の償いもせずに生きてるのは被害者遺族だけの問題じゃなくて社会全体の問題だ。俺だって頭にきてるんだよ！」
「それが分かっているなら、ボクの気持ちもわかるだろ！　キミはもし恋人を殺されたら、黙っていられるか！　何もせずにいられるか！」
それを聞くなり、ショウさんは止まってしまった。
そして何を思ったのか、タクマの鎖を解くと、ミミッギュを手渡した。
「これを奴の顔にある魔化粧っていう赤い部分にうてば、奴はデビレンの力を失う。貴重なもんだから、俺が指示するまでは使うなよ」

「ショウさん、一般人を戦いに巻き込んでいいの？　一番の御法度だよ」
「今回だけは特例だ。なにかあれば、責任は俺がとる」
そう言うと、ショウさんは先行してイジャユたちのいる古倉庫の前へと進んだ。
できれば奇襲をかけたかったが、すでに情報が行きわたっていたようであり、イジャユと雑兵たちが待ち構えていた。
「うふふ、まさかここを突き止めるとはね。あんたたち、ドリゴドールのバカを追い詰めたっていう奴らでしょ？」
「バカ？　仲間だった者に対してずいぶんな言い方だね。チィトに無残に殺された彼を憐れむ心はないのかい？」
「あんな裏切者、死んで当然だったのよ。フフ、皮肉な事に私たちの結束は奴の裏切りによって強いものになったのよ。少しでも反逆心を抱いてた奴らの心は完全に折られたでしょうからね」
「チィトに対する恐怖心からか。いかにも悪の組織らしいこったな」
「さーてと、私もしっかり仕事しないとね。消されちゃうのはごめんだしね」
イジャユはすでに手裏剣型の魔性具エンジュウを持ち、戦闘態勢をとっていた。
数秒間にらみ合いが続いた後、イジャユの合図と共に戦闘の火ぶたが切られた。
まず、タクマが雑兵たちを一気に蹴散らし、真っ先にイジャユに飛びかかった。
情報ではエンジュウの材質を変える能力は生物に対しては、効果がなかったはず。
故にタクマは武器さえ持たなければこわくないと思っていたようだが、靴にエンジュウを当てられ、重い鉄のような材質に変えられてしまった。
「ぐ、ぐぐ」
「厄介な能力だな、おい」
続いてショウさんもイジャユの背後から攻撃しようとするが、すで

にこの周辺の地面の半分以上はエンジュウの能力で水のような液体状に変えられていたようで、思いとどまった。
　むやみに足を突っ込んだりすれば、そこをさらにコンクリートのような材質に変えられ、完全に固められることも十分考えられるのだ。
　この能力の厄介なところは、見た目は元のままであり、実際に触れてみるまではどんな材質に変えられたか判断しづらいところだ。
　さっきのように足をつけようとしたところが思いもよらぬ材質に変えられていて、足元をとられそうになったなんてことも十分起こりうる。
「マジであぶねぇな。おそらく奴はいずれここに敵が来る事を見越して、自分が有利に戦うためのフィールドを用意してたんだろうな。気ぃつけろ、おっさん」
「う、うん。あ！　助けて、ぶぶぶ」
「言ったそばから何足とられてんだ！　気ぃつけろって言ったろ！」
　こんな事をしているスキにイジャユは魔性の火を飛ばしてきた。
　さすがにこんな状況では大きく動く事もできず、ショウさんはナイフでガードするしかなかった。
　だが、イジャユは魔性の火を飛ばしつつ、急接近してエンジュウを振り回し始めた。
　ショウさんはナイフをふにゃふにゃした物質に変えられ、ボクはやっと這い上がった直後に上着を固いコンクリートのようなものに変えられ、再び液体化した地面に落とされてしまった。
「あぶぶぶぶぶ」
「おっさん！」
「ぶぶ」
　ボクはもがきながら上着を脱ごうとするも、コンクリート化しているため、頭や腕を通すことができない。
　必死にもがいていると、腹周りの液をを岩のようなものに変えられ、身動きが取れなくなってしまった。
　一方のショウさんは、ふにゃふにゃになったナイフを置き、上半身裸になってイジャユに再び向かっていった。

「はぁ、はぁ」
「なるほど、材質変換のリスクを少しでも減らすためね。だが、本当に勝つ気があるのなら、全裸で向ってくるくらいじゃないとね。ククク」
「何笑ってやがんだ、愉快犯が。そうやって何人の人を不幸にしてきたんだ」
「フフ」
　このときイジャユは、唯一エンジュウの能力が効くショウさんのズボンを狙ってくるものと思われた。
　だが、それに反して、ショウさんの頭や首など致命傷となりうるような場所ばかりを攻撃していった。
　人体にエンジュウの材質変換の能力は効かないが、普通に武器として攻撃してダメージを与える事は可能だからだろう。
「このぉ」
「フフ、いいね、その苦悶の表情」
「くそ、うかつによけようとして動けば液体化した地面に落ちてしまうし、どうすれば」
　しばらくこの攻防は続き、何度もエンジュウの攻撃をガードしたせいでショウさんの体は傷だらけになった。
　しかし、イジャユはそんな必死のガードをあざわらうかのように今度はショウさんのズボン部分に狙いを変えた。
　完全に上の方ばかり狙っていると思わせたところで、無防備になった下の方を叩くというのがイジャユの作戦だったのだろう。
「ほーら、今度は上ががら空きになってるわよ」
「くそ、上にも下にも周りにも注意を向けないと、ダメだ、集中できん」
「フン、好奇心交じりで格上の相手に向かっていくクソッタレなハエや蚊と同じね。弱さを自覚できずにでしゃばった事をしたせいで殺されることになるのよ」
「イジャユ！」
　突然、液体化した地面からタクマが飛び出し、イジャユにつかみかかった。

タクマはおそらく開戦後に攻撃を受けた後に靴を脱ぎ捨て、液体化した地面にもぐって奇襲をかける機会をうかがっていたのだろう。
「まったく、無駄あがきを」
「きっさまぁ！」
「何をそんなにムキになっているのよ。あたしがそんなに憎いの？」
「当たり前だ、覚えてないとは言わせないぞ！　お前に目の前で恋人を殺されたんだからな！」
「え？　誰だっけ？」
「ふ、ふざけるなぁ！」
タクマは懐から鉱石のようなもので覆われた短剣を取り出し、イジャユめがけて攻撃した。
このスキにショウさんは背後から攻撃をしかけようとしたが、突然エンジュウが飛んできて、両腕を切り裂かれた。
「くそ、こいつも魔性具を遠隔操作できるのか」
「しばらくそいつと遊んでなさい。この白髪を始末した後でゆっくり相手をしてやるわ」
タクマが相手ならエンジュウを使うまでもないだろうと、イジャユは考えていたようだ。
だが、タクマのいきおいはすさまじく、魔性の火などにもひるむことなく突っ込んできた。
エンジュウを持っていない状態であっても、戦闘能力自体はイジャユの方が圧倒的に上のはず。
それなのにタクマ相手に防戦一方となり、やがて反撃もできなくなった。
「ぐ、ぐ」
「聞かせろ！　お前はどういう理由で殺人を繰り返してきたんだ！」
「このバーカ、そんなの決まってんでしょ。人を殺すのが楽しいからよ。泣きじゃくるバカを殺すのはよだれがでるくらい快感なのよ！」
この一言はタクマの怒りを底上げする事となってしまい、さらなる猛攻がはじまった。
「うぉぉぉぉ！」

「くそ、こんなはずはない。こんな奴ごときに押されるはずは」
「もう彼女の仇討ちだけじゃない。今生きているみんなのためにお前を倒す」
「くぅ、しかたないわね」
　ショウさんのときとは逆に今度はイジャユがタクマの短剣を素手でガードする事になった。
　しかし、タクマの短剣はとても固いようで、少し刃先に触れただけでざっくり切られてしまう。
　そのため、傷が再生される前に次々と新たな深い傷ができてしまい、ついにイジャユはひざをついた。
「さ、さすがに素手では。エンジュウ、戻れ、戻りなさい！」
「残念だが、もうあの武器は使えないぜ」
「ショウくん！」
「ついさっき、おもりをつけて液体化した地面に沈めてやった。大した暴れぶりだったが、俺の敵じゃねぇな」
「う、うううう」
「一つお前に教えといてやる。武器ってのは持ち主と一緒に戦ってこそ本領を発揮できるんだぜ」
「こ、こんなはずじゃあ」
　自分の能力を逆に利用されたイジャユは呆然となってしまい、大きなスキを作ってしまった。
　タクマはそれを逃さず、短剣をイジャユの背中に突き刺してグリグリと回した。
「ぐぎゃぁぁぁぁ！」
「ありがとう、ショウくん。キミがくれたチャンスを無駄にはしない。さぁ、殺された彼女の苦しみが少しはわかったか！　たんと苦しめ！」
「が、あああああ！」
　結局、イジャユは拷問に近い形でショウさんとタクマの攻撃を受け続ける事になった。

最終的にはボロぞうきんのようになるも、まだ悪あがきのようにして薄ら笑いを浮かべたため、二人の攻撃はよけいエスカレートして最後はタクマに顔面を踏みつけられた。
「が、あ」
「ま、これくらいでいいだろ。さぁ、再生を終える前にミミッギュでトドメを」
「や、やめ、うう」
イジャユはタクマにミミッギュをうたれ、人間の姿へと戻った。
しかし、それでもなお薄ら笑いをやめず、まるで反省の態度を見せなかった。
「フフ、おめでとさん。よかったわね、不運なバカ女の仇討ちができて」
この一言が引き金となり、タクマはまたイジャユを殴り始めてしまった。
悪辣なイジャユは殴られながらも舌を出したりしてふざけ、もはや救いようがなかった。
「へへへ、あっかんべー」
「バカが、よけいな事を言うからだ」
「ショウさん、止めなくていいの？　さすがに殺しちゃまずいんじゃ」
「責任は俺がとるって言ったろ、黙って見てろ。死んだ恋人をあんなふうに言われて何もするなって方が無理な話だ」
「はぁ、はぁ」
タクマは手の皮がむけてもなお殴るのをやめなかったが、イジャユが気を失うと拳を止めた。
その後は少し躊躇した様子を見せるも、結局は追い打ちを加えなかった。
「すまない。もう大丈夫だ」

「いいのか？　やり足りなければ別にいいんだぞ」
「いや、これ以上やったら理由はどうあれ、私はこいつと同じクズになってしまう。あとは法律が裁いてくれるさ」
「そうだよ。こんな奴のためにキミが手を汚すことはない。どのみち極刑は免れないだろうし」
「さて、後始末といくか」

ショウさんはイジャユを息があった部下たち共々拘束した。

タクマはこの後、傷の手当てもそっちのけで亡くなった恋人の母親のところへ向かい、イジャユを捕まえた事を報告した。

それを聞いた母親は床に手をついて号泣し、タクマに対して感謝とともに今まで辛くあたってきた事を謝罪した。

おそらくは、彼を本気で憎んでいたわけではなく、本来ならばイジャユにぶつけるはずの怒りを仕方なくぶつけていたにすぎなかったようだ。

遺族との確執は消え、ようやくタクマはイジャユの呪縛から解放されたのだった。

「終わったな。ありがとう、ショウくん、ニシくん。キミたちの協力がなければ奴には勝てなかっただろう」
「ああ。だがな、恋人の元に行こうなんてバカな真似はするんじゃねぇぞ」
「ぐ！」
「俺もな、あんたと同じなんだ。昔、今と同じように一緒に旅する四人の仲間がいて、その中の一人が俺の恋人だった。彼女は身勝手な人間に襲われ、いつ起きるか分からない眠りについた」
「ショウさん、それってブガイと戦った時に話してたあの？」
「ああ。もう彼女は目を覚ますことはないと言われたが、俺は生きる希望を捨てなかった。今でも平和を愛した優しい彼女の意思を尊重して戦い続けている」

「ショウさん、やっと分かったよ。私を理解してくれた理由も一緒に戦ってくれた理由も。うう」
「約束だぞ。あんたは絶対に死んじゃいかん。辛いかもしれねぇが、意地でも生きていくんだ。恋人もそれを望んでいるはずだろ？」
「う、うう」
タクマはショウさんに強く背中を押され、涙を拭いながら去っていった。
目的を達成したとはいえ、その後ろ姿はやはり寂しく暗く見えた。
しかし、ボクには戦いの手助けはできても、死んだ人を生き返らせることはできない。
今は、ただタクマが間違った道へと進まない事を祈るしかできなかった。

第二十九話「魔獣の森」

イジャユ戦の翌日、ボクたち一行は拠点を海沿いの廃墟に移し、行動を開始していた。
マンジイとスズは食糧捜しに出かけ、ボクはショウさん、マジェリーと三つ巴の手合せをはじめた。
だが、開始早々に泥まみれの子犬が乱入し、尻尾をふりながらマジェリーとショウさんに順番に飛びつき、周辺を力一杯に走り回った。
その後は人懐っこくぴょんぴょん飛び跳ねてはしゃいでいたが、何か嫌なものも感じられた。
この時点ではまだそれが何なのかはっきりしなかったが、この後、ボクが子犬の体を洗い始めた時にその理由が分かった。
どういうわけか、子犬の腹についていた赤い落書きのようなものがいくら洗っても落ちない。
水でダメなら油でとこすってみたが、それでもダメだった。
「もしかして元々こんな模様、なわけないよね。うーん」
「おっさん、もしかしてそれデビレンの魔化粧じゃねぇか？」
「でも、ただのワンちゃんだよ。殺気のようなものも感じないし」
しかし、本当にレベルフォーのデビレンの顔にあるのと同じ魔化粧なら、何をしても消えないのと嫌な感じがするのも納得がいく。

この事が知れると、子犬の処遇をめぐって議論がはじまった。
殺気が出ていないのも、油断させといて闇討ちを狙っているためともとれる。
でも、犬がデビレンになるなんて聞いたことないし、すぐには答えは出せない。
そこでまずは子犬ががどこから来たのかを調べてみる事にした
ボクたちは子犬に付着していたわずかな泥や花粉などを調べ、ここから十キロほど離れた場所にあるナナシの森があやしいのではとにらんだ。

ナナシの森はそれほど大きいところではないのに、近年では入った人がそのまま帰ってこなかったとのうわさもあるという。
話し合った結果、ボクはショウさん、マジェリーと共に子犬を連れてその森に調査に向かった。
到着すると、予想とは違い、子犬から感じていた嫌な感じもなければ、殺気らしいものも感じない。
それどころか、視界もよい上に迷うような感じはまったくなく、とても危険な森とは思えなかった。
かえって不気味に感じながらも中に入って進んでいくと、子犬はなぜかマジェリーにしがみつきブルブルと震え始めた。
そして、それとほぼ同時に強い殺気が辺りを覆い始めた後、巨大な地割れが発生。
ボクたちはかなり深い地点まで落とされ、気づいたときには湖の中にいた。
「う、うう。みんな無事かな。あ？　なんだこれは！」
あたりを見ると、そこにはさっきの森とは比べものにならないほどの緑が広がっているのが分かった。
何が何だか分からずに陸へ上がろうとしていると、ショウさんが巨大なワニと戦闘している場面に遭遇した。
水の中ではさすがに不利と判断したのか、逃げるショウさんだったが、ワニは湖から出てもなお追撃をやめずに戦闘は続いた。
見かけによらないすばやさで襲ってくるワニだったが、しだいにショウさんの動きに翻弄されてき、脳天をおもいっきり殴られた。
しかし、それでも、数秒間動きが止まっただけで倒すには至らなかった。
その後もショウさんはワニの頭や腹部を狙い攻撃するが、なかなか決定打にならず、とうとうあせりからか尻尾による反撃をくらってしまう。
「ぐ、い、いいかげんに倒れやがれ！」
「ぐるる」
圧倒しながらも尻尾をつかまれたワニはそのまま投げ飛ばされ、木

に強く叩き付けられ、ようやく倒れた。
　それでもまだピクピクと動いており、ショウさんの方をギロリとにらみつけていた。
「ぐ、る」
「はぁ、はぁ、なんて奴だ。あきれた生命力だな」
「おーい、ショウさん」
「ああ、おっさんか。これで全員の無事確認だな」
「マジェリーと子犬は？」
「あっちの草むらに身を隠している。少し深刻な状況だがな」
　ちょうどこの森へ落ちてきた直後、マジェリー達も遭遇した野生の巨大な犬に襲われたらしい。
　その犬もさっきのワニと同じようにマジェリーがいくら攻撃しても倒れずに向かってきたという。
　最終的になんとか沼地に誘い込んで動きを封じたものの、そのときに放ったツメの風圧で子犬が木に叩き付けられて負傷。
　そして、気に留める間もなく、巨大なサイ、さらには巨大なワニが現れて襲ってきたのだそうだ。
　おそらく、うかつに動けばさらなる襲撃はさけられない。
　ボクとショウさんは身を隠しながらはマジェリーたちと合流し、これからどうするのかを話し合うことにした。
「さて、どうするかな。撤退するか戦うか」
「戦うべきだ。元いた森に簡単に戻れはしないだろうし、この森を放置するわけにもいかねぇだろうから」
「私もショウに賛成。デビレン絡みならなおさら」
「たしかにデビレンが絡んでるんなら、ん？　そういえば、さっきのワニの腹部に魔化粧に似た赤い模様があったような。ちょうどその犬と同じ」
「そういえば、動きながらで分かりづらかったが、あの巨大犬の腹にもそんな模様あった。あと、なんか嫌な感じもした」
「まぁ、あの巨大生物たちの事といい、地割れの事といい、この森が自然にできたものでない事はたしかだろうな」

「援軍も呼べないし、どこから落ちてきたのかも分からない。これからどうすればいいのかな。もしかしてもう上へは戻れ、が！」
いきなり地ならしのような衝撃がした後、新たな敵がボクたちを襲った。
今度は怒りで目を血走らせたアザラシとゾウで、やはりさっきのワニや犬と同様にかなりの巨体で腹部にはあの魔化粧に似た模様もあった。
「新手かよ」
「ぐ、ぎぎぎ」
「しかし、なんでアザラシやゾウがこんな森の中にいるんだ。しかも、メチャクチャ怒ってるし。ワニはともかく、アザラシやゾウって人間を襲うもんなのか？」
「ショウさんさん、今は議論してる場合じゃないよ。一旦逃げよう」
ボクたちは負傷した子犬をかばいつつ、全力で逃走した。
アザラシの方は動きが遅く途中で引き離すことができたが、ゾウの方は勢いを増しながら距離を縮めてきた。
ショウさんとマジェリーは足止めをかってでようとするが、直後に逆方向からこれまた巨大なネコが現れて行く手を阻んだ。
ゾウとショウさん、マジェリーが対峙している傍らでボク達はネコに追い込まれていき、絶体絶命の状態となった。
「く！　まずい」
「にゃぎぎ」
ネコは逃げようとしていたボクをツメで軽く弾き飛ばし、ケガでまともに動けない子犬に狙いを定めた。
今にも食らいつきそうな勢いだったが、駆け付けたマジェリーが身を挺して前に立ちふさがると、なぜか動きが止まった。
そのスキを突くようにショウさんはゾウを投げ飛ばし、子犬とマジェリーを抱えながらボクの手を引いた。
「さぁ、行くぞ。この状態でまた襲撃を受けたらまずい。どこか休めるところを探すぞ」
「うん。ええっと、どこかないかな」

ボクたち一行はなんとか敵との接触をかわしつつ、川の近くにある横穴へとたどり着いた。
中に入って進んでみると、たき火をした痕跡があり、周辺には水を沸かしたと思われる器具も散乱しているのが確認できた。
野生の動物たちじゃこんな器具は使えないし、それ以前に横穴に入る事が出来ない。
となると人間か、もしくはデビレンがいるという事になる。
前者である事を祈りつつ、ボクたちはあえて奥までは進まず、入り口付近で子犬の手当をはじめた。
それが一通り終わった後はしばらく体を休めることにしたが、やはり奥の方が気になってしまう。
ボクとショウさんはマジェリーに子犬の護衛をまかせ、奥へと入っていった。
「少なくとも大人数がいる気配はないが、気は抜けない。戦闘態勢だけはとっておかないとね」
小刀ザクメルを装備してそのまま奥まで進むと、何やらコバエのようなものが大量に飛び回っていた。
それをたよりに周りを見ていると、ボロボロの服を着た老人が仰向けで倒れているのを発見した。
「これはひどい。こんなに痩せこけて」
「なんでこんなところにいるか知らないが、かわいそうにな。とりあえず、埋めてやるか」
「コラ、ワシはまだ死んどらんぞ！」
「うわ、まだ成仏してなかったのか！」
「ワシはな、う、ぐ」
一応、命はつないでいた老人だったが、大声で叫んだせいかまたバタリと倒れてしまった。
彼もまた森であの巨大動物たちに襲われこの横穴に追い込まれた挙句、しばらく何も口にしていないのだろう。
ボクは老人に手当てを施し、回復を待って話を聞いてみることにした。

老人はスズと同じスバゲスタン大学に所属するデビレン狩りを専門とするチームの教授で、ある調査をしていたのだという。
教授達が拠点にしていた街の片隅には野良猫たちが集まって生活している集落があったのだが、それがある夜突然、一匹残らずと消えてしまうという事件が発生。
続けて、レベルフォーのデビレンと思われる鬼のように凶悪な外見の大男が集落周辺をうろついていたとの情報が入った後、全国の野良犬や野良ネコが急に姿を消し、神隠しにあったと騒ぎになっていることも判明。
とにかく、デビレンたちが野良となった動物たちを集めて何かに利用しようとしているのは間違いないと考えた教授達は地元住民たちに情報提供を呼びかけたうえで調査を開始。
そして、二週間におよぶ調査の末、近くの森に犬を抱いた大男が入っていったという情報を入手し、すぐに現場に急行。
はじめは少し偵察するだけのつもりだったので、森に入ったのは教授のほかは部下三人と医療スタッフが一人だけ。
だが、中を進んでいる内にボクたちと同様にこの森に落とされ、その後はあの巨大動物たちと戦いながら進行するも、その圧倒的な力の前に体力がもたなくなり、ついには餓死者まで出す事態に陥ったのだという。
「今のこの状況では前に進むことはできないと考えたワシたちは、何とか落ちてきた穴から出られないかと上へとのぼり始めたが、上空には巨大鳥が何匹も飛び回っていて無理だった」
「そしてこの横穴に身をひそめることにしたと、そういうわけなんだな？」
「ああ。まぁ、どのみち餓死する事に変わりはないがな」
そして、おおよその察知はついていたものの、教授以外の隊員は全員死亡したという事実もこの後告げられた。
かわいそうに、空腹に耐えきれずに近くに生えていた毒キノコを食べてしまい、死んでしまったのだという。
ボクは動揺を隠しきれなかった。

すでに自分たちもそうなりえる状況に追い込まれていたのだから。

第三十話「地上へ続く道」

「え？　脱出の方法があるんですか！」
「そうじゃ。ワシだけでは到底無理じゃったが、お前たちと一緒ならあるいはと思ってな」
　横穴に入った翌日、歩けるまでに回復した教授はボクとショウさんを外へ連れ出し、遠くの方にうっすらと見える巨大な塔を指さしていた。
　そこにはこの森の管理人でもあるレベルフォーのギルゴムがいて、おそらく専用の通路か何かを使って定期的に地上へ行っているという。
　だが、当然そこへ到達するためにはギルゴムとの直接対決はほぼ避けられないというわけだ。
「ギルゴムと戦うだけならまだいいが、塔に着くためにはあの巨大動物たちがいる森を長時間進まなくてはならないんじゃ。あいつらは強い。そして、何より人間を激しく恨んでいる」

　あの巨大生物たちは魔獣と呼ばれ、元々はごく普通の動物だった個体がギルゴムの魔性具ゾアボの力で巨大化したものだという。
　ゾアボで斬られた生物は黒い闇に覆われていき、少しずつ体が大きくなっていき、魔獣化する。
　その力は凄まじく、単純なパワーだけならレベルフォーのデビレンにも匹敵し、不死身とはいかないまでも、そうとうな生命力を持っているそうだ。
「その異常な強さの根源はその生物が持つ恨みの力。つまり恨みの力が強ければ強いほど強い魔獣になるというわけじゃ」
「恨み？　ボクたち人間に対してですか？」
「そうじゃ」
　この森にいる魔獣すべての共通点は、まだ普通の動物だった頃、人間にひどい目にあわされたという事。
　例としては、身勝手な飼い主に捨てられたペットたち、密猟者など

に大事な仲間を殺された野生動物などがあげられるそうだ。
なんとなく感じていたあの嫌な感じは恨みによるものだったわけだ。
ボクは前にスズの端末でふと目にしたいくつかの動画をこのとき思い出していた。
飼い主たちの一方的な都合で生きたままゴミ袋に入れられ、捨てられるペット達。
そして、密猟者によって殴り殺されて引きずられる野生動物とそれを悲しそうに見つめる赤ちゃんの姿。
もし、彼らのそんな積り積もった恨みを力に変えられたとしたら、強いのは当然だろう。
ちなみにゾアボには生物を魔獣化させる力はあっても、動きを操ったり、洗脳したりする力まではないという。
魔獣たちは、人間に対する恨みと復讐するための力を与えてくれたギルゴムへの恩義から自分の意思でデビレン側に協力しているのだと思われる。
教授によれば、魔獣たちの最終的な目的はデビレンたちとともに人間を滅ぼすこと。
このままこの森で数を増やし続け、いずれはチィトの合図で地上に攻め入ることになっているという事も考えられる。
「そうなれば、本当にシャレにならないでしょうね」
「そうじゃな。デビレンだけでも手を焼いているのに、あんな魔獣たちまで地上に現れるなど、考えただけでもおそろしい」
「ん？　そういえば、ギルゴムってたしか、あ！」
「うおおおおお！」
ショウさんは一人で走り出そうとしていた。
ボクは何とか羽交い絞めにして押さえ、横穴へと戻そうとした。
「ショウさん、落ち着いてよ」
「おっさんにはもう話したはずだろ。ギルゴムは仲間の仇だ。今すぐぶっ倒してやる」
「教授の話を聞いたでしょ。無計画に攻めてもダメだって」

「うるせぇ、奴がいる場所が分かってんのにじっとしてられるか！」
「フム。お前、ギルゴムと何か因縁があるようじゃが、本当に奴を倒す気があるのか？　それとも、一発殴ればそれで気が晴れるのか？」
「何だと！」
「もし、前者なら冷静になれ。憎しみにとらわれるだけでは勝てない戦いもあるんだぞ」
「ちっ」
　ショウさんはようやく落ち着きを取り戻していった。
　その後は自ら横穴へと入り、綿密な計画を立て始めた。
「さてと、どうすりゃ塔へたどり着けるんだ？」
「ただ塔へ着けばいいってもんじゃない。空腹や手負いの状態で行ってもほぼ返り討ちにされるのがオチじゃ」
　一応、この横穴からあの塔へは最短ルートを通れば、二日足らずで行けるらしい。
　しかし、ボクたちの手元にある食料は余裕をもって分配しても五日分ほどしかないため、三日以内に何とか体力を万全の状態にして出発しなければならない。
　もっとも、そのあとであの魔獣たちに襲われて体力を消耗してしまえば、意味はないのだが。
「はぁ、敵の数が少ないか、弱いかのどちらかならまだ希望があったのにな」
「ニシ、まだあきらめるのは早いじゃろ。そんな気持ちでは魔獣一匹にすらやられてしまうぞ」
「あ、ああ。そうですね」
「教授、気になってたんだが俺たちが連れてるあの犬はなんで魔獣化しなかったんだ？　腹に他の魔獣たちと同じ模様もあるし、話の流れから考えてゾアボの能力を受けたはず」
「そうじゃな。これはあくまで推測だが、あの犬の心にまだ迷いのようなものがあるんじゃろうな」
　教授によれば、この子犬もギルゴムに選ばれた以上は、他の魔獣たちと同じように人間を恨む心はあるはずらしい。

だが、一方でやさしくしてくれる人間もいる。
だから、ゾアボの能力をふり払って魔獣化する事を拒み、地上へ逃げてきたのだと考えれるそうだ。
そういえば、さっきボクたちを襲ったネコも最後は攻撃を躊躇していた。
これは、本当に戦いにくい相手だといえるだろう。
「ボクは……　正直、全力で倒しにかかる自信がありません」
「ワシも真っ向勝負は避けるべきじゃと思う。魔獣たちを倒していけばいくほど、仲間の魔獣たちが持つ人間への恨みは強くなっていく。それじゃあ、何の解決にもならんからな」
という事で、魔獣たちになるべく傷を与えずにスムーズに塔へたどり着くため、麻酔銃を駆使した戦法をメインにする事となった。
教授は、今までの戦いで麻酔銃が多少なりとも魔獣たちに効く事をすでに確認していたのだ。
やはり完全に眠らせる事はできず、少しの間動きが止まっただけに留まったそうだが、戦わずに逃げるためならそれで十分だろう。
残る課題は体調を万全の状態にしておくという事。
ボクたちは出発を今から七十時間後と決め、栄養補給と睡眠に徹する事にした。

「そろそろかな」
ギルゴム討伐作戦を立ててからもうすぐ七十時間が経とうとしている頃、ボクは出発の準備を整えていた。
すでに体調は万全だし、装備もばっちりだ。
ショウさん、マジェリー、教授、子犬と共に気合十分に横穴を後にした。
ここからはボク、マジェリー、子犬が北側、ショウさん、教授が南側に別れて塔を目指すことになった。
二チームにわかれる理由としては、全滅のリスクを下げるためと地上へ戻るための確率を少しでも上げるため。

仮にここにいる全員が死亡するなんて事になってしまえば、この森の存在はその後も誰にも知られることなく、もっとたくさんの魔獣たちが増えることになってしまうのだから。
しかし、もちろん全員で生きて地上へと帰る事を約束し、それぞれの道へと別れた。
「さぁてと、来るよ」
十メートルほど進んだところで、さっそく巨大な犬がボクたちに襲い掛かってきた。
全身にひどい傷があり、人間にどんなひどい目にあわされた事がすぐ察知がついた。
ボクは少し不本意に思いながらもに麻酔銃を発砲するが、やはり完全に眠らせる事はできなかった。
基本は、この後すぐにその場から逃走する事で、体力を温存できるはずだ。
だが、敵もなかなか賢いようで、塔に近づけば近づくほど出くわす魔獣の数は多くなり、さらにはあまりの巨体ゆえに麻酔銃が効きにくい個体も現れはじめた。
そして、いつ魔獣たちに襲われるか分からない恐怖とうまくいかなかったからといって撤退する事も出来ないプレッシャーにより、精神の方もだんだんと限界へ近づいていた。
「休憩を少しはさむつもりだったが、これはさっさと塔へ行った方がいいだろうね。こんな状況では落ち着いて休むことなどできない」
「まるで心臓にナイフを突きつけられている気分。いつまで続くの、こんなの」
「うわ！　マジェリー。また来たよ」
麻酔銃をかまえるボクの前と後ろから次々と巨大なネコが現れ、完全に囲まれてしまった。
これはただ眠らせるだけでは対処しきれない。
ボクは覚悟を決めて小銃イアチャを連射、マジェリーは電撃を放ちしながら奮戦し、進行を続けていった。

第三十一話「恨みの鬼神ギルゴム」

「う、ぐう」
「ニシ、しっかり。ここで倒れたら今までの戦ったの全部水の泡」
「あ、ああ。そうだね」
塔を目指し始めて二日ほどが経った頃、ボクは限界に近い状態で森での進行を続けていた。
正直、ギルゴムと戦えるような余力はすでになく、頭も足もフラフラの状態。
マジェリーもすでに充電が切れかかっているようで、不穏な電子音が不安を掻き立てていた。
しかし、それでも敵は同情も手加減もしてはくれない。
その後も容赦ない攻撃の嵐が降り注いだ上、草むらから巨大なネコたちが追い打ちをかけてきた。
続けて、木の上に隠れていた巨大ネコが突然おりてきて、場は混乱。
それにより、ボク達の陣形はもろくくずれ、震えて身動きがとれなくなった子犬が負傷。
かばおうとしたマジェリーもネコのツメにざっくりと切り裂かれ、重傷を負ってしまう。
その後、ボクはなんとかその場にいた巨大ネコすべてに麻酔銃を撃ちこんだものの、被害は甚大であり、特にマジェリーはまともに戦闘を継続できる状態ではなかった。
「ま、ずい。もう、じゅ、う、でんが。ぐ」
「マジェリー、しっかり!」
「ニシ、聞いて。私の充電もうすぐ尽きる。だから、残りすべて塔へ走るのに使う」
「でも、そんな事したらキミは!」
「す、こしの間動かなくなるだけ。わ、たし犠牲になるつもりなん、てない。あんたとショウ信じて命預けるだけ」
「マジェリー」
「信じて、る。デビレンの呪縛からわた、し、たす、けたあんたならで、

きるは、ず」
マジェリーは両足に電撃をまとい、ボクと子犬の手を掴むと、猛スピードで塔へ向けて走り始めた。
血の匂いにつられるように集まってきた魔獣たちを何とかふり払いながら走り続け、本当に間一髪のところで塔の中へと逃げ込んだ。
だが、先に待っていたのは希望を削ぐような光景だった。
ギルゴムと思われる大柄で強面のデビレンが、目と鼻の先にある広間で猟師風の男二人に詰め寄っていたのだ。
「さてと。ん？　どうやら、新手の侵入者のようだな」
「ギル……　ゴム」
「俺の名を知っているとは、バカな賞金稼ぎの類か。ククク」
「くっ、まさか入ってすぐに遭遇するなんて！」
「安心しろ、まだ戦うつもりはない。まずはこいつらからだ」
ギルゴムは男たちを壁側に追い詰めると、手笛を吹いた。
すると、巨大なアザラシ型の魔獣が現れ、激しいうなり声を上げた。
男たちは背負っていた銃で応戦しようとするも、震えて一発も発砲できず、青ざめながら森へと逃げていった。
「た、助けてくれ」
「フン、せいぜい苦しみながら殺されるがいいさ」
「キミは一体？　何のためにこんな事をするんだ？」
「さっきの男たちは血の涙もない冷酷な密猟者。魔獣の方は毛皮目的で殺されたアザラシの遺児だ。俺は能力を使い復讐の手助けをしただけさ」
「復讐？」
「そうだ。貴様は知っているか！　この世界に人間の都合で殺されていく動物たちがどれだけいるか！　いくつの悪事が黙認されているか分かっているのか！」
ギルゴムの言い分は分からなくもない。
ボク自身もこの世界に来て、かわいそうな境遇の動物たちを見てきた。
人間さえ繁栄すれば、他はどうなろうとかまわないという一部の人

間たちの考えも決して許されるものではない。
しかし、ギルゴムがこのまま魔獣たちを増やしていけば、多くの善良な人間たちが犠牲になるのは明白。
ボクは覚悟を決め、ギルゴムに向っていった。
「うおおおおお！」
「バカが！　そんなボロボロの状態でレベルフォーを倒せると思っているのか」
「う、ぐ、ぐ」
「さっさと死ね！」
ギルゴムの猛攻がはじまった。
ボクは疲労と傷のせいでうまく応戦する事が出来ず、すぐに劣勢となってしまった。
そのまま一撃も攻撃を繰り出せずに蹴り倒された。
「はぁ、はぁ」
「さっさと死ねばいいのに、耳障りな呼吸音を出しやがって。ゴミがよ」
「う、ぐ」
「そうだ。先に後ろで倒れている小娘の方から始末するかな。ゴミ人間を寝かせてやる無駄スペースなどここにはないんでな」
「や、めろぉお！」
ボクは何とか全身に力を入れながら、ギルゴムに突進して食らいついた。
無謀なのは言うまでもなく、激しい反撃をくらうが、それでも離れるつもりはなかった。
だが、力負けして床に何度も叩き付けられ、両腕を無理やり捻じ曲げられた上に軽くへし折られてしまった。
「う、ぐえ、うう」
「見苦しいな。お前はゴミ同然だ。いや、ゴミに失礼か。ゴミはまだリサイクルができるが、それに比べてお前は、ククク」
「うう」
「安心しろ、これ以上恥をさらさないように俺が引導を渡してやる」

ギルゴムは巨大な魔性の火を両手に纏い、ふりおろしてきた。
だが、間一髪のところでショウさんが乱入して妨害し、ボクは風圧で床へ叩きつけられるだけで助かった。
「ショウ……さん」
「生きてて何よりだ、おっさん。これで何とか全員ここへたどり着けたわけだ」
「貴様は……たしか前に俺に負けた雑魚共の生き残りか。拾った命をわざわざ捨てに来たのか？」
「戯言はよせ。仲間たちの無念はここで晴らさせてもらうぞ、ギルゴム」
「ショウさん、教授は？」
「入り口のところで寝かせてある。いいか、金髪のお嬢ちゃんも犬も含めてしっかり守っとけよ。それが今のあんたの仕事だ」
「分かった。必ず守るよ」
「よし、それでいい」
ショウさんは短期決着を狙うように、すばやくギルゴムに殴りかかるが、逆にツメで切り裂かれた。
体が大きく鈍重なイメージのあるギルゴムだったが、その反射神経は本物。
いくらすばやい攻撃でも、軽くかわして反撃していった。
「フフ、どうした？　これじゃあ、さっきのかっこいい台詞がかすんでしまうぞ」
「まさかかすりもしないとはな。あいかわらず、あきれた身体能力だ」
「だから無駄だと言ったんだ！」
ギルゴムの力はショウさんの力を完全に上回っていた。
そして、魔獣たちから感じていたのと同じあの嫌な感じもショウさんの動きを鈍くさせているようだった。
「この感じは前にはしなかった。どういうわけだ？」
「冥土の土産に教えてやる。俺はゾアボの力ですでに自分自身を魔獣化してんだよ」
「魔獣化か。なるほどそういう事か」

「元々強いレベルフォーに強い恨みの力が加わるんだ。おそらく、今の俺の力はレベルファイブにも届くかもな。ボスには悪いが」
「そうか、それは本当にいい事を聞いた。じゃあ、単純な話、ここでお前に勝てればチィトにも勝てるって事だよな？」
「この状況でよくそんな事を。仕置きが足らないようだな。はぁぁぁ！」
突如、ギルゴムの左手が黒く覆われていき、球体状に生成されてショウさんめがけて飛んできた。
威力もスピードも魔性の火以上で、まっすぐ飛んでくるかと思ったら、途中で六つに分裂し、うち二つがショウさんに命中した。
「ぐ、うう」
「これは恨み玉。魔性の火に俺の恨みのエネルギーを込めたんだ。並の苦しみではないぞ」
「ぐぐ」
ショウさんは必死で床に転がるも、なかなか火は消えず、のたうちまわっているところをギルゴムに何度も踏みつけられた。
そのまま全身の骨を砕かれるような勢いだったが、床を転がりながら逃れて態勢を立て直した。
「うぐ。おい、おっさん！　武器を俺に貸してくれ！」
「ボクの武器を？　でも、これは体内に眠っている力を強制的に引き出すものだ。ちゃんと訓練を積んでいないショウさんが使うのはあまりに危険だよ」
「言うな、奴の恨みの力は本物だ。こっちも命かけるくらいじゃねぇと勝てやしねぇよ」
「まだ悪あがきをするつもりか！　いいさ、すぐにまとめてあの世に送ってやる」
「ぬかせ！　何度も仲間を奪われてたまるか！」
ショウさんはボクから棍棒ガドッグと小刀ザクメルを奪いとって装備し、底上げされた超パワーと超スピードで攻め、ギルゴムもそれに呼応するように反撃した。
その力はほぼ拮抗しており、ぶつかり合うたびに塔内に激しい衝撃

が走った。
「まさか、魔獣化した俺と張り合うやつがいるとはな。こいつはここで確実に消しておくべきだな」
「ここまでやって互角がやっとか。大した怪物だ」
戦いはその後も続き、決着は見えなかった。
しかし、この状態が長引けば長引くほどギルゴムの方に分がある。
何しろギルゴムは完全不死の肉体を持っているのに対し、ショウさんは慣れない武器による凄まじい反動でどんどん肉体が蝕まれていくのだから。
「ぐ、くそ。うう」
「おーおー、苦しそうな顔して。人間ってのは本当に不便な生き物だな」
「黙れ、人間であることから逃げたお前が言うんじゃねぇよ」
ショウさんの血管は切れ、体が悲鳴を上げはじめていた。
だが、そんな追い詰められた状況が逆にショウさんを突き動かしているようだった。
最初は見下していたギルゴムもそんなショウさんの姿に心打たれのか、巨大な恨み玉を生成していき、それをそのまま左手に装着した。
そうすることによって、ギルゴムの直接攻撃には恨みの力が加わり、絶大な攻撃力が生まれるはず。
それに加え、周りを黒い破片のような物体が漂い始め、歪んだ映像のようなものがちらつき始めた。
よく見ると、顔にひどい傷を負った少年がガラの悪そうな若者たちに暴行されている場面、ゴミ捨て場のような場所で犬や猫と触れ合っている場面、防護服を着た人間たちと戦う場面などが映っているのが分かった。
おそらく、少年は輪郭や目つきから見て、人間だった頃のギルゴムと見て間違いないだろう。
そして、彼は周囲の人間に忌み嫌われ、逆に懐いて慕ってくれた動物たちに愛情を抱いて生きていたが、人間による捕獲や駆除行為に怒って強い恨みを抱くようになったのだと思われる。

それは、他のデビレンのように強い私利私欲の邪心によりデビレン化したとはいえない。
言い換えれば、彼の恨みは動物を愛する心の裏返しとも考えられる。
それは直接戦っているショウさんにも伝わっているようであり、表情に動揺が見られた。
「こいつはこんな人生を。ぐ！」
「お前らは考えたことがあるか！　理不尽に虐げられ殺されていく動物たちの無念の気持ちが！　ええ、おい！」
「お前の気持ちが分からないわけじゃない。俺も動物を捨てたり殺したりする奴は大嫌いだ。だが、そんな一部の奴らのために多くの善良な人まで魔獣たちに襲わせるのは間違ってる！」
「間違ってなんかいない！　間違っているのは貴様ら人間の方だ！」
両者一歩も譲らず、戦いはさらにヒートアップした。
そして、お互いに重い一撃をぶつけ合った後、ショウさんの方が先に膝をついた。
「ぐぐ、はぁ。あ、足がもう」
「終わりだ、消えろ！」
ギルゴムはいきおいよく突進し、さらに禍々しく巨大化させた恨み玉をショウさんにぶつけた。
だが、このいきおいは逆にショウさんに利用されてしまい、自身もガドッグのカウンターアタックをくらってしまう事となった。
「き、さま」
「へへ」
体をふるわせながらにらみあっていたが、すでに限界だったらしく、両者共、前のめりにバタリと倒れた。
「ぐ、おっさん。俺はもう動けない。奴にミミッギュを！」
「あ、うん」
「ち、ちくしょう」
ギルゴムは、ミミッギュをうたれ、人間の姿に戻っていった。
その姿はとても悲壮感あふれるものであり、無念の思いが強く伝

わってきた。
「ううう。ムシがよすぎるかもしれないが、俺のたのみを聞いてくれ。魔獣たちの命だけは助けてくれ。あいつらは俺に利用されていただけで何も悪くない」
「頭を上げてよ。ボクたちは無益な殺生をするつもりはないから」
この言葉を聞いたギルゴムは潔く自分の敗北を認め、その後抵抗する事はなかった。
そして、それからしばらくすると、子犬や魔獣たちの腹部についていた赤い模様は消えていった。
「能力が解け始めたようだね」
「ああ。おっさん、武器をありがとな。さぁ、上を目指そうぜ」
ボクたちは長い階段を上がって上へと進んで無事に上の森に戻り、駆け付けたマンジイ、スズと再会した。
すぐに怪我の治療と休息に移りたいところだったが、まずは魔獣たちをどうするのかを考えなくてはいけない。
ギルゴムが人間に戻って魔性具の能力が解けたため、魔獣たちの体は少しずつ縮みはじめており、最終的には元の姿に戻ると思われた。
しかし、魔獣だったときはその異常な生命力のおかげである程度飲まず食わずでも生きられたようだが、元の姿に戻ってしまえば、おそらくこの森では生きていけない。
ここには彼らが常食とできるようなものはほとんどないし、おそらくはかなり早い段階で飢え死にすることになるだろう。
「放ってはおけないよ。ギルゴムや動物たちをあんなになるまで追い詰めてしまったのは人間の方なんだからさ」
「ああ、このまま奴らを幽閉して餓死させるのは簡単だが、それじゃあ身勝手な飼い主共や密猟者共と同じだからな」
「あたしと教授で大学にお願いしてみるわ。しばらくの間、保護下においておくくらいなら可能だと思うの」
「うむ、もちろん協力する。しばらくの間、彼らの面倒を見つつ、新しく生きていける場所を探す。犬や猫たちは新しい飼い主、その他の動物たちはもう密猟者に狙われずに生きていける場所を」

「ありがとう、スズ、教授」
だが、ボクはここにいる動物たちを救っても、ギルゴムの心が完全に晴れるとは思ってなかった。
今こうしている間にも、手の届かない遠いところで殺されていく動物たちはたくさんいる。
厳しいが、それが今の現実だった。
ボクは動物たちをちゃんと救えないまま冷たい塀の中へ行かせてしまう事への罪滅ぼしとして、今回の事件を世間に公表して知ってもらう事を提案した。
「こんな事しか、今のボクにはできないけれど」
「十分だ。俺は私怨でたくさんの人間を殺したから、極刑は免れないだろう。だが、俺の行動が世の中を少しでも変えてくれるならもう思い残す事はない」
「う、うう。ごめん」
「動物のために泣いてくれる人間がまだいたんだな。ニシだっけか？お前のような人間がこれから増えてくれればあるいは俺の願いも叶うかもな。それをこの目で見れないのは残念だが」

ギルゴムはボクたちに付き添われながら近くの町の換金所へ向かい、出頭した。
そして最後の瞬間に一瞬だけ立ち止まり、こちらへ優しく微笑んだ後、奥へと連行されていった。
ボクはそれを見送りながら、今回の戦いをいつまでも忘れずにいる事を心に誓った。

第三十二話「レベルファイブの壁」

「よかった。順調みたいだ」
ギルゴム戦が終結して一ヶ月後、ボクはスズと一緒に魔獣たちの森を訪れていた。
進んでみると、以前のような殺伐とした雰囲気は薄れているのが伝わってきた。
管理人となった教授の話によると、動物たちの襲撃や威嚇行為は徐々に少なくなっており、今では与えた食事も警戒することなくちゃんととっているという。
これなら、新しい場所へ旅立たせるのはそんなに先の話ではないだろう。
ボクもスズも安堵の表情を浮かべながら、帰路に着いた。
「動物たちは今まで本当に辛い思いをしてきた。今度こそ幸せになってくれるといいね」
「そうね。ギルゴムにそれを見せてあげられないのは残念だけど」
「ギルゴムか。結局、彼は自分や動物たちの復讐心をチィトに利用されただけなんだよね」
「殺しはね、残された仲間や家族の悲しみを含めれば、たくさんの人を不幸にする行為よ。ギルゴムの一件はその典型的な例といえるかもしれないわね」
「うん。ん？　あれは？」
「う、ぐぐ」
前方から若い男がふらつきながら歩いてきた。
まもなく体を震わせながら倒れていき、駆け寄ったボクの手を握りながら必死に何かを訴えていた。
「あ、あいつ、は、は」
「キミ、しっかり！　誰にやられたんだ！」
「み、んなを、た、たた」
どうやら、近くにまだ誰かいるようだ。
ボクは先に進もうとするも、奥の道から発せられる殺気に阻まれて

しまった。
　そして、戦闘態勢をとろうとした瞬間、いきなり目の前に現れたチィトに腕を掴まれてしまった。
「う、ぐ」
「何だ、お前らだったのか。てっきり、あの雑魚共の生き残りかと思ったんだがな」
　そう笑いながら言うチィトが指さした先には、武器を持った人間たちが大勢倒れていた。
　しかし、血の匂いや戦闘の形跡らしきものは特にない。
　ボクの頭におぞましい光景が浮かび上がった。
「まさか、殺気だけで彼らを？」
「うそ……　でしょ？」
「フン、奴らもお前の後ろで倒れてる若造もちょっと威嚇しただけでぽっくり逝っちまったよ。はははは」
「この！　手を放しなさい！」
　スズはヘルジャムを解放してチィトに斬りかかるも、一瞬のうちに背後をとられて髪の毛とシュシュを鷲掴みにされてしまった。
「う！」
「んー、いい匂いだ。フフ、朝シャンでもしてきたのか？」
　そう言うと、チィトはフッと姿を消した。
　すると、直後に禍々しいオーラとともに上空から巨大な魔性の火が大量に降り注いだ。
　それにより辺り一面は黒く焼き尽くされ、コンクリートも深々とへこんでいた。
　そのはるか上には、チィトが手をかざしながら浮いていた。
　さらに攻撃をしてくるかと思われたが、ゆっくりと地上に降りたち、ボクたちに近づいてきた。
「さっきの斬撃は見事だったぞ。レベルスリー程度なら風圧でも軽く斬り殺せるだろうが、俺に勝てると思うのは大きな間違いだ」
「うそでしょ。何て速さなの」
「これ以上の抵抗は無駄だし、ここらでさっさと降伏すべきだと思う

がな。ニシ、松永スズネ」
　ふざけるなと一蹴したいところだったが、それはチィトとここで戦うことを意味しており、言うに言えなかった。
　このままの状態が続けば、いっそチィトの下についてしまいたいというくらいの恐怖がボクにのしかかっていたのだ。
　それでも何とか自我を保ち、棍棒ガドッグを装備して攻撃を開始した。
「うおおお！」
「わお、すごい汗だくだな。戦うならそれはそれでいいけど、どうせなら楽しく戦おうぜ」
　チィトは最初こそテンポよくボクの攻撃を避け続けていたが、しばらくするとそれも飽きたのか、完全に無防備な状態となって身構えるのすらやめてしまった。
　そして、小指で手招きし、まるで「好きなだけ攻撃していい」と言わんばかりの態度をとりはじめた。
「カモーン」
「ふざけるなぁ！」
　ボクは声を荒げながら、チィトの頭めがけて棍棒ガドッグをふりおろした。
　だが、小傷一つつけることができなかった。
　その後も攻撃を繰り返すが、やはり結果は同じ。
　しまいには攻撃しているボクの方がばててしまった。
「くそ、なんで」
「ああ？　なんでお前の方がへろへろになってんだよ。これ以上のサービスはできないぞ、汗だくのニシくん」
「はぁ、はぁ。どういう事だ。これがこいつの能力なのか。いや、でも魔性具らしきものは持ってないし。という事は本当にボクの攻撃が効いてないだけ」
「ふぅ、つまらんデジャブはごめんだぞ」
　チィトはもうこれ以上の戦いは無駄だと判断したのか、至近距離からボクに殺気をあびせて威圧した。

何とか恐怖をおさえこんでいたボクもこれには耐え切れず、膝をついてしまった。
そのまま気を失いそうだったが、駆け付けたスズに叱咤されて何とか持ちこたえた。

「あ、うう」
「ニシさん、しっかりして。力に飲まれたら終わりよ」
「松永スズネ、そいつを置いて逃げたんじゃなかったのか。いい具合に外道になってくれたと思ったのに」
「力を蓄えていただけよ。あなたを完全に消し去るためにね」
スズはヘルジャムをかざすと、辺りを覆い尽くすような巨大な爆炎を放出し、チィトに飛ばした。
これなら、まず耐えられるはずがない。
だが、ボクの目に飛び込んできたのはそこには悪夢のような光景だった。
周りのコンクリートはすでに跡形もなかったが、チィトの方は普通に立ち尽くしていた。
全身には爆風による汚れがついており、爆発に巻き込まれたのはたしかだったが、傷らしきものは一つもついていなかった。
そして、さっき同様に魔性具らしきものは持っておらず、チィトにはただ単にヘルジャムの爆炎が効いていなかったということになる。
もはや、絶望という他なかった。
「なんでだよ。いくらなんでも今の攻撃で無傷だなんて」
「大した威力だったよ。ま、俺には意味をなさないが」
「そ、そんなバカな。こんなことがあるはずがないわ。あの爆発で消し飛ばないなんて」
「あーあー、そんなバカな、そんなバカな」
「だから言ったろ、無駄だってよ」
チィトは余裕たっぷりにこちらへと迫ってきた。
あれだけの爆炎を超えるような攻撃なんてボクにはできない。
絶体絶命かと思われたその時、大量の黒煙がチィトの周りを覆い始

めた。
　そのスキをつくようにボクとスズは乱入してきた黒服の男たちに手を引かれ、この場を逃れた。
　その後、行き着いたのは薄暗い廃墟のようなところだった。
　中では縛られたデビレンや人間たちが拷問されていて、血の匂いが充満していた。
　そして、その奥の部屋で待ち受けていたのはかつて戦った私刑王ブガイだった。
「ひさしぶりじゃな、ニシ。そっちの色白のお嬢さんははじめましてになるかな？」
「ニシさん、知り合いなの？」
「この人は私刑王ブガイ。ほら、悪人やデビレンを残虐な方法で処刑している組織のボスだよ。前にキミが離れてた時に一度会ってるんだ」
「あの時はすまんかったな。じゃが、これも平和のため。許してくれよ」
「なぜ、ボクたちをここに？　ここはあなたのアジトでしょう？」
「仮のアジトじゃ。どうせこいつらを始末したあとは捨てるつもりでいる。しかし、驚いたな。チィトの殺気に耐え抜く奴が他にもいたとは」
　ブガイはかつて自分がチィトと戦った時の事を話してくれた。
　その際に判明したのは、まず普通に戦っても無駄だという事。
　レベルファイブであるチィトの全身はチートスケイルという古代にのみ存在していた特殊な物質で覆われており、ほとんどの攻撃は難なく防いでしまうという。
　さっきの狂った防御力から考えると、世界中の兵器を集めていっせいに攻撃しても傷はつかないのかもしれない。
　しかし、チィトのかつての仲間である古代のデビレンたちの骨を加工して武器を作れば、大なり小なりダメージを与えられるのではないかという事が後に入手した資料により分かったそうだ。
　古代のデビレンたちも今のチィトほどではないが、強固な体を持っ

ており、人間たちの持つ通常の武器ではなかなか決定打を与えられずに一時期は無敵を誇っていたらしい。
　そのまま人間の完全敗北となるかと思われていた時、デビレン間で内輪もめが起こり、戦闘に発展した上に一人のデビレンが死亡する事態に発生。
　その一部始終を偶然見ていた村の男がそれを周りの人々に知らせたところ、デビレンの力にはこちらもデビレンの力で対抗するしかないのではという考えに至ったという。
　事実、その死亡したデビレンの遺骨をうまく回収して加工して武器を作って使ってみたところ、その威力は絶大であり、その後のデビレンたちとの戦いに大きく貢献するものになったそうだ。
「そのデビレンたちの遺骨の一部はすでに世に出回っていた。それがお前らのよく知るミミッギュなんじゃ」
「ミミッギュ？　あれは邪気を吸収する物質よ。それが古代デビレンたちの骨からできていたって言うの？」
「正確には他者の持つ邪気を欲して吸い取る物質じゃ。しかし、一つで吸える量には限界がある上に強度も大したものではないし、加工は決して容易ではない」
「だから、大量のミミッギュが必要になるというわけね？」
「だったら、前みたいに強奪する事もできたはず。なぜそうしなかったんです？」
「チィトを倒すのにお前らの力が必要だからじゃ。ワシも奴との実力差は痛感している。一人で勝てるとも思っていない」
　ブガイはボクたちにチィトを倒すための同盟を申し入れてきた。
　実をいうと、そうそう時間をかけてもいられないそうだ。
　理由は、チィトがいる限りデビレンが無限に増え続ける事に加え、抵抗する人間が減っていくことが懸念されていたから。
　圧倒的な戦闘能力、何をしても傷つかない上に不死身。
　これだけの条件がそろっていれば、並の人間なら抵抗しようという心を失いはじめても何ら不思議はなかったのだ。
「そうやって希望を失った人々は奴の下につくために卑劣の素を飲ん

でデビレン化する道を選ぶというわけじゃ。人間として殺されるよりはマシだと言ってな」
「もしかして、チィトがああやって自ら頻繁に行動しているのは力を見せつけて戦意喪失させるためとか？」
「なるほど、単なる暇つぶしじゃなかったわけね」
「レベルフォーが次々とやられて人々が抱き始めた希望を一気に削ぐつもりなのじゃろう。下手をすると、一年か二年で」
ブガイの事を完全に信用したわけではないが、事の重大さは分かった。
ボクは一旦テントに戻り、仲間たちと相談したうえで行動することにした。

第三十三話「悪夢の果て」

「はぁ、うう」
「ニシくん、具合でも悪いのかの？」
「いえ、そんなんじゃないです」
ブガイとの再会から一週間後、ボクは新しく拠点とした河原でマンジイと共に訓練に励んでいた。
しかし、うまく集中する事が出来ない。
というのも、ついさっきまでブガイと手を組むかどうかの議論が行われていたのだが、明確な答えは出なかったからだ。
それに加え、チイトと直接対決するための覚悟が完全に固まっていなかったように思う。
そして、追い打ちをかけるように舞い込んできたのが、チイトに打ち負かされた腕のある者たちが少人数だがデビレン側に寝返り始めているという情報だった。
とても許される行為じゃないが、ボクは不覚にも共感を抱いてしまい、恐怖と理性の間で激しく苦悩し続ける事になった。
「ボクはこれからどうすればいいんだ」
「ニシくん、さっき聞いたことが気になるのは分かる。じゃが、あ、んんん？」
マンジイは急にふらふらしだし、倒れて眠り始めてしまった。
その後、魔性の火がボクの周りを覆い尽くし、さらに巨大化した。
奥の方で手をかざしていたのは、以前に会ったレベルフォーのジェリラだった。
「ひさしぶりね」
「ジェリラ、マンジイに何をしたんだ！」
「ちょっと眠ってもらっただけよ。あなたたち、ボスのありがたい勧誘をいまだにケリ続けてるそうじゃない。そろそろ、ヤキを入れとかなきゃと思ってね」
「うう、で、デビレンの部下になれるわけないだろう。ボクはそんな外道じゃない」

「あら、ちょっと声に動揺が見えるわよ。ホントはもう降伏する気だったりしてね」
「う、うるさい」
ボクはジェリラに飛びかかろうとするも、魔性の火に阻まれた。
そして、続けざまに魔性具で追撃され、武器を装備するヒマすらなかった。
ジェリラはすでにボクが複数のレベルフォーを撃破してきたことは知っているはず。
故に多少の遊び心まじりではあっても、油断する気はないようだ。
「さぁ、どうしたの！　さっさと私を倒しなさいよ」
「言われなくても、そうするよ！」
ボクはジェリラに殴られながらも、その勢いを利用して後ろに後退し、小刀ザクメルを装備して再びむかっていった。
そして、今度は一転して攻めに回り、反撃を開始した。
「マンジイを元に戻せ」
「いい太刀筋ね。さすがはボスが勧誘するだけはあるわ」
「うおおおおお！」
ボクはジェリラがわずかに目を閉じたスキを狙い、腹部を攻撃した。
しかし、彼女は余裕な表情をくずさない。
「はぁ、あなたついてないわ。なまじ強いばかりにこれから苦しまなくちゃいけない」
そう言うと、ジェリラは魔性具を前方にかざした。
別に何かが飛んでくるわけでもなかったが、そのわずか数秒後、ボクは急に激しい眠気に襲われた。
「何だ、これは。うぐ」
「これからあなたは地獄に行くの。フフ、しーっかり楽しんできてね」
「ぐ、ダメだ。も、う」
ボクはなすすべなく、眠りに落ちていった。
しかし、意外にもすぐに目は覚め、どこかの建物の中にいるのが分かった。

奥ではスズがエプロン姿で料理をしており、横ではショウさんとマジェリーがテレビゲームで遊んでいた。
これはあきらかに不自然だ。
スズ、ショウさん、マジェリーはほんの五分前に食糧調達にでかけたばかりだし、それ以前に短時間で河原から建物の中に移動したのもおかしい。
ボクはほっぺたを思いっきりつねってみるも、特に何も起こらない。
今度は頭を柱に何度もぶつけてみるが、やはり同じだった。
「どうなってるんだ。これ、夢なんじゃないの？」
「おはよう、ニシさん。おなかすいたでしょ？　もうすぐごはんできるから、待っててね」
「スズ、ここはどこ？　あ、そうだ、マンジイが大変なんだ。ジェリラにやられて」
「え？　マンジイなら、お風呂に入ってるわよ」
「え？　え？　え？　うそ。何がどうなってるの？」
ボクは状況がまったく分からず、困惑した。
その状態のまま、マンジイとも合流して五人で食事する事になった。

そして、雑談したり、テレビを見てはしゃいだりと賑やかな時間が続いた。
それは、まさに家族に愛されなかったボクにとってあまりに幸せすぎる時間だった。
何だか状況のおかしさも気にならなくなり、ずっとこのままの時間が続けばいいとさえ考え始めてしまった。
しかし、まさに天国から地獄に突き落とすかの如く、辺りを深い闇が覆い始めた。
その後、黒く赤い目をした謎の生物が大勢で室内に侵入し、スズ、ショウさん、マジェリーを機関銃で射殺していった。
ボクはおびえて動くことができず、目の前でマンジイを殺され、深

い絶望の淵に落ちていった。
「あああああああ！　はっ！　あ！」
　気がついたとき、ボクは河原でスズ、ショウさん、マジェリーと一緒にいた。
　さっきまでのはやはり夢で、みんなで必死に呼びかけてボクを連れ戻してくれたという。
　しかし、マンジイの方はすでに深い眠りに入っていたようで、眠ったままだった。
　どんな音や衝撃を与えても効果はなく、時間と共に顔色はだんだん悪くなっていき、死へと近づいているのがわかった。
　ボクは声がかれるくらいに必死に呼びかけた。
「マンジイ、マンジイ！」
「よし、こうなったら、全身の骨を粉々にへし折って起こしてやろう」
「ヤケをおこしちゃだめよ、ショウさん！　そんな事したら」
「ああ、ボクはどうしたら！」
　混乱する中、ジェリラから無線連絡が届いた。
　それは脅迫も兼ねた悪質な挑発だった。
　まず伝えられたのは、マンジイに起こっている異変についてだった。
　彼はさっきの戦いでジェリラの魔性具ヘルーガに複数ついている目のうちの一つに眼球をにらまれてしまったことにより、深い眠りにおちてしまったのだそうだ。
　そして、今頃はヘルーガの能力により、さっきのボクと同様に自分自身がもっともこわいと思う夢を見ながら苦しみ続けているという。
　もしも、彼がそのまま夢の中で完全に絶望して心を折られてしまえば、二度と目を覚ますことはなく、永遠の眠りについてしまうそうだ。
「醍醐味はまず幸せな夢を見せておいて、そこから一気に地獄に突き落とす。並みの絶望じゃないはずよ。フフ、残された時間は少ないわね」
「流暢に能力の説明をして。余裕のつもりかい？」
「この方があなたたちのバカみたいに驚く顔が見れて楽しいでしょ。

大丈夫よ、私を倒せば能力は解けるから。倒せればね。あーっはっはっは」
そうやって笑い飛ばすと、ジェリラは一方的に居場所だけを告げて切ってしまった。
じっくり作戦を立てなければいけないのに、立てる時間はなく、場はさらに大混乱となった。
「すぐに奴のところに向おう。全員でかかればどうにかなんだろ」
「待って、あたしにいい考えがあるわ。ただ、あたしだけじゃなく、サポートしてくれる相方がいるの。少し危険な役だけど」
「よし、それならボクがやるよ。急ごう、移動しながら聞くよ」
ボクはスズと共にジェリラの指定した工場地帯に向かった。
到着後、ボクは後方にある重機の物陰にて待機し、スズは目隠しをした状態でヘルジャムを持ってジェリラの前へと飛び出した。
まずは音と気配だけをたよりに動いて戦うつもりなのだ。
「さてと、また戦う事になったわね、ジェリラ」
「そう、戦う気なのね。私ともポスとも」
「ええ。さっさとはじめましょう」
「いや、さっさと終わらせる気はないわ。前に煮え湯を飲まされた借りがあるもの。あなたは時間をかけてなぶり殺さないと気が済まないわ」
「おしゃべりはいいから、かかってきなさいよ」
スズは、現状なんとか音と気配だけで周りの状況を把握できてはいるようだ。
だが、はっきりいって、レベルフォーであるジェリラ相手にこの戦法は危険極まりないものだった。
そもそも完璧にものにできているわけではない上に実戦で使うのはこれがはじめてらしく、不安はぬぐいきれないだろう。
「落ち着け、あたし。よく聞いて感じるのよ」
「フフフ、バカな女。音と気配だけでどこまで耐えきれるか試してやるわ」
ジェリラは変則的な移動をしつつ、攻撃してきた。

やはり、最大限に音と気配を消しつつ動いているようだ。
スズの方もジェリラの音と気配だけをたよりになんとか急所を守っているようだが、やはり攻撃すべてを避ける事はできない。
そして、ダメージを受ければ受けるほど、焦りが生じているのか、動きが乱れ始めた。
「はぁ、はぁ」
「あはは、いいツラになってきたわね。さぁ、もっと苦しんでみせてよ」
「うう」
「急所を避けるならそれもよし。なぶり殺す時間が増えて好都合ってもんよ」
戦闘がはじまって五分とたたないのに、はやくも勝敗が見えてきた。
スズは傷を押さえつつ、重機の近くにあるコンテナ置き場に移動した。
ここからがボクの仕事だ。
今いる場所からジェリラの動きを気づかれないようによく見て、スズに伝えなくてはならない。
とにかく、針に糸を通すような気持ちで目を凝らして声に出した。
だが、やはりこれだけ離れた距離からの声をうまく伝えることはできず、戦局は変わらなかった。
スズはヘルジャムを叩き落とされた上、完全に防戦一方となってしまった。
「う、うう」
「このバカ女！　目を閉じた状態で私に勝てるわけないでしょ！　このままなぶり殺して素っ裸にして街中にさらしてやるわ」
「ぐ、うう」
「あ、ああ。スズ」
このままではスズは殺され、マンジイも助からない。
さっき見たあの悪夢が現実のものになってしまう。
ボクは意を決して、ジェリラの前に飛び出した。

「ジェリラ！」
「デブ男、せっかく悪夢から逃れたのに懲りてないとはね。いいわ、今度こそぶっ殺してやるわ！」
「させ……　ないわ！」
　スズはジェリラに背後から飛びつき、激しくもみ合った後、ヘルーガを力ずくで奪い取った。
「はぁ、はぁ。ありがと、ニシさん」
「くっ、まだ目隠しをしてるのにどうして？」
「あなたね、あんな大声でぶっ殺してやるなんて叫べば居場所がばれるのは当然でしょ」
「はっ！」
「まさか、ニシさんがあんな大胆な行動をとってくれるとは思わなかったけどね」
「そうよ、なぜあんなマネができたの？　また悪夢におちるか、目を閉じたとしても一方的になぶり殺される危険だってあったのに」
「キミの見せた悪夢のおかげさ。あれが教えてくれた。仲間を失う以上の絶望なんてないって事を。躊躇していたら何も救えないって事を！」
「ニシさん、あなたのその覚悟は絶対に無駄にはしないわ」
　スズは目隠しをはずした後、ヘルーガを地面に深々と突き刺した。
　ジェリラはそれを引き抜こうとする様子もなく、魔性の火を両手両足にまとって突進した。
　そこからは素手同士による小細工なしの戦いとなり、周りの建物に亀裂が入るほどに発展した。
　単純な火力だけならジェリラが上のようだが、スピードや技量はスズが上のようだ。
　しばらくは互角の戦いだったが、ジェリラの方にわずかな動きの乱れが表れ始めた。
「くっ、私は上級のデビレンよ。人間如きに追い詰められるはずなんて」
「しっかり味わいなさい。あたしの仲間を苦しめた代償を」

スズは正拳突きの連打でジェリラを完膚なきまでに叩きのめした。
続けて、頭突きと手刀とネリチャギのコンボで圧倒。
最後は壁に押し付けて蹴りを浴びせまった後、踏みつけるようにして地面にめり込ませた。
「は、反動であばらがイッちゃったわ。ニシさん、お願い！」
「あ、うん」
ボクはミミッギュをジェリラに注射して人間の姿に戻してから拘束した。
その後は一気に腰が抜けてしまい、スズに手を貸してもらいながら何とか立ち上がった。
「はぁ、はぁ。ごめん、き、緊張の糸が切れたようだ」
「まぁ、無理もないわ。あんな予想外のびっくりアシストの後だものね」
「びっくりしたのはボクの方さ。キミ、刀なしでもすごい強かったんだね」
「あんなイケメンな台詞を言われたら燃えずにはいられないでしょ。さ、帰りましょう。みんなが待ってる」
「そ、そうだった。早く戻らないと」
ボクは大急ぎで河原へと戻り、ちょうどショウさんとマジェリーに支えられながら起きかけていたマンジイの姿を確認し、心から安堵した。
恐怖に打ち勝ったおかげで守れた命と今がある。
ただ本当にうれしくて仕方なかった。
もしも、これがずっと続いたならどんなにいいだろうか。
そう願うと共に、ボクはある決意を固めた。

第三十四話「決戦に向けて」

「さぁ。もう、後戻りはできない」
ジェリラ戦が終わった日の夜、ボクは仲間たちに同意を得たうえでブガイのアジトを訪ねていた。
彼と手を組み、チィト討伐に手を貸すことにしたのだ。
すでに恐怖も迷いも捨ててきた。
ただ、仲間たちとの平和で明るい未来を実現する事だけを胸に秘めていた。
「ブガイ、ボクにできる事なら何でも協力するつもりです」
「お前なら来てくれると思っていたよ、ニシ。ワシを信用してくれるんじゃな？」
「あなたとはやり方は違っても、平和を望む気持ちは同じです。ボクはデビレンとして生き残るつもりなんてない。人間として未来を生きたいんです」
「よく言った。こっちじゃ」
ブガイはボクを連れて、本アジトがある千キロ先の地下シェルターに移動した。
そこにはブガイの仲間たちが武器を手入れしている傍ら、科学者たちが慌ただしく動いていた。
何やら、左右二チームに分かれてアイテムを製造しているようで、まずは右側に移動して説明が行われた。
「ここでは次元切断カプセルというアイテムを作っておる。チィトを倒すために必要な物の一つじゃ」
「え？　この前に話していた武器だけじゃないんですか？」
「あれはあくまでも奴にダメージを与えるためのもの。奴はレベルフォー同様に不死身の肉体を持っている。その点はどうするつもりじゃ？」
「それはいつものようにミミッギュで、あ！」
「気づいたようじゃな。奴の持つデビレンの力は桁違いで、普通のものでは通用するはずもない」

「そう……　ですよね」
「まぁ、理論上はミミッギュですべてのデビレンの力を奪って無効化するのは可能じゃ。しかし、チィトクラスになると、高層ビルほどのミミッギュの塊があっても足りるか分からんじゃろうな」
だが、ブガイはちゃんとこのチィトの不死に対抗する手を考えていた。
それが右で作っている次元切断カプセルだった。
これは対象者の体内に埋め込むことで、別次元に飛ばして幽閉するためのもの。
別次元というとピンとこないかもしれないが、とにかく自力では帰ってこれないような場所の事だという。
ブガイはチィトを倒すためだけに長い時間をかけて仲間たちと共にこのアイテムを作り続け、ようやく今の段階まで仕上げたそうだ。
「すでにテストはうまくいったし、十分に使用できるレベルじゃ。じゃが、戦いに必要な物はもう一つある。それが左で作っているダクカットじゃ」
「これは一体？」
「一定の間、特殊なフィールドを作り出し、デビレンの力を一時的に弱めるものじゃ」
「こんなものまで！　いや、たしかにチィトは人間が到底生きられないような年月をかけて力を蓄えてきた正真正銘の化け物だし、これだけの準備は大前提といえますよね」
「分かっているじゃないか。じゃが、チィトと戦うために必要なものが実はあと一つある。ある意味、一番大事なもの。お前なら分かるな？」
「恐怖に屈しない心なら、もちろん持ってここにきましたよ」
「それでいい」
ブガイはボクの肩をポンと叩いた後、仲間たちを連れて奥の訓練場へ入っていった。
ボクも最後にめいっぱい訓練するために河原へと戻り始めた。
しかし、途中で殺気のようなものに気づき、逆走。

姿を隠そうとしていた角刈りのデビレンを攻撃した。
「気づかないとでも思ったのかい？」
「やるな。前に戦った時よりも強くなったようだな」
「今回はチィトの命令かい？」
「ああ。あの方も誘いを蹴られ続けてそろそろ限界らしくてよ、はっきり言われたよ。もし、次にお前らが誘いを蹴ったら消していいってよ」
「そうか。じゃあ、ボクもはっきり言うよ。デビレンの仲間になるつもりなんてない。絶対にだ」
「言いやがったな。よし、だったら俺は今から街の奴らを襲う。ボスに勝つつもりなら、止めてみろよ」
角刈りデビレンはボクを挑発しつつ、色の薄い霊体のような姿で街の方へと飛んでいった。
そういえば、似たような能力を持ったレベルフォーのデビレンがいるという情報を前に聞いたことがある。
そのデビレンは霊体となった後に人間に憑依してそのままの状態で二十四時間いれば、肉体を奪っていつでも自由に動かせる器に変える能力を持っているという。
これは必ずしも一人だけにしか使えないというわけではなく、霊体化後に最大十人にに分身して一度に十人の人間の肉体を奪って操ることができるというから厄介だ。
敵の能力が分かったのは良いが、器として選ばれているのは老人や子供などデビレンとはとても縁遠い雰囲気をした者ばかりだそうだ。
それに加え、人間が密集した場所ばかりを中心に活動しているらしく、存在をとらえることは非常に困難だといえる。
仮にとらえたとしても、霊体化を解く対抗策までは分からない。
分かっているのは、角刈りデビレンが憑依している間はその人間にはうかつに手出しできずに歯がゆい思いをするだけということだ。
そんな窮地の中、殺気を根気よくたどって憑依されている人間たちを発見するも、予想通りすぐにこちらの劣勢となった。

角刈りデビレンの力は憑依状態でもレベルスリーと同じかそれ以上はある上に反撃など気にしないかのようなノーガードでバンバン攻めてくるので、人間に遠慮して手加減していられるほど甘くはない。
それに追い打ちをかけるように、残りの憑依されている人間たちが加勢に現れた。
そして、言葉を交わす間もなく、持っていた火炎びんであたりを火の海にした。
角刈りデビレンの「巻き込まれたところで、自分の体じゃないんだから」という悪意が込められた実にえげつない戦法だ。
だが、ボクはとっさにある作戦を考えながら逆転のチャンスを待ち、耐え続けた。
「はぁ、あ、ぐ」
「見苦しく粘りやがって。さぁ、観念しろ」
「うう」
「俺の勝ちだ！」
角刈りデビレンが勢いよく前進しはじめたその時だった。
憑依されている人間たちの動きが急に止まり、うずくまりはじめた。
ボクはこの機を逃さず、憑依されている人間たちを次々と押さえこんで拘束していった。
同時に憑依していた角刈りデビレンは苦しみながら逃走をはじめた。
「ちくしょう。ぐ、ぐ、なぜ弱点が分かった」
「逃がすもんか」
「う、うう」
角刈りデビレンはなすすべなく元の姿へ戻ってしまった。
すぐに再び霊体化しようとしていたが、動きがだんだんと鈍くなっていった。
「な、何の悪夢だ。俺がこんなやられ方するなんてよ」
「どんなに強力な能力も使いすぎればツケがが回ってくる。それは人

間もデビレンも同じだ」
「それをお前はあの戦いの中で見抜いたというのか？」
「簡単ではなかったさ。でも、冷静に観察すれば決して不可能じゃなかった」
　ボクはさっきの戦いで憑依されている人間たちの動きが少しずつぎこちなくなっているのが分かった。
　加えて、なんとなく余裕が消えていくのが感じられた。
　そこから、おそらくは角刈りデビレンが能力を連続使用するには制限があるのではと考えたのだった。
「戦いで必要なのは戦闘技術だけじゃない。人間をあまりなめない方がいいよ」
「うううう、ふざけるなぁ！　人間がデビレンに説教とはどんな不届き千万だ！　天罰だ、天罰を与えてやる」
　角刈りデビレンは奇声を発しながら、猛烈な勢いで突進してきた。
　しかし、それは隙だらけで本当に力任せに動いているような状態。
　冷静さをちゃんと保っていたボクによけられないはずはなかった。
「哀れだね。能力が使えなくなった途端にこれか」
「はははは、言いやがったな。そんな安い挑発、もちろん乗ってやるぜぇぇぇ！」
「はっ！」
　ボクは角刈りデビレンの攻撃をかわしていき、至近距離から渾身のジャブを浴びせた。
　そして、すかさず拘束するとともにミミッギュを撃ちこんだ。
「ボクはチィトと戦わなくちゃいけないんだ。ここで負けるわけにはいかないさ」
「けっ、仮にレベルフォーを何体も倒し続けたところでボスには勝てねぇよ。ボスは全知全能。その辺の強者とは次元が違いすぎるんだよ」
「それでも戦うんだ。たとえ生きて帰れないような戦いでもあっても。もう決めたんだ」
「人間らしい考えだな。バカだ、お前は」

「それでいい。バカでもデビレンのような外道に身を落とすよりマシだからね」
ボクは力を失った角刈りデビレンを近くの換金所に引き渡した後、河原へと入っていった。
ここから意識するのは、迫るチィトとの戦いの事のみ。
持っているすべての力を注ぎ込むつもりで訓練を開始した。

第三十五話「チィトとデスビル」

「いよいよだ」
角刈りデビレンとの再戦から一ヶ月後、ボクはブガイから知らせを受け、河原の向かいにある無人のビルに入っていた。
ついにチィトとの決戦の時がやってきたのだ。
この日に備えて戦闘能力は極限といっていいほど鍛えてきたし、覚悟もまったく揺らいでいない。
何の迷いも不安もなく、ブガイから完成した武器を受け取った。
「これがミミッギュを使って作った武器か」
「うむ、ミミナイフとミミ弓。これなら、チィトにダメージを与えられるはずじゃ」
「必ず、使いこなしてみせます」
「それでいい。さぁ、ついてこい。チィトの居場所はすでに分かっている。戦いはもうはじまっとるんじゃ」
ブガイはボクを仲間たちの待つ地下広場に案内し、作戦を話し始めた。
まず、今回の戦いはただチィトを大人数で倒しにかかればいいというものではない。
全滅のリスク低下、周りにいる他のデビレンたちをチィトのそばに近づけさせない事、一般市民を巻き添えにしない事が重要なのだ。
そのため、レベルフォーとやり合えるだけの力を持った者だけがミミナイフとミミ弓を持ってチィトに近づき、他の者たちは他のデビレンや一般市民が近づけないように周りを固めることになった。
ミミナイフとミミ弓の数は限られているし、妥当でいい判断だといえる。
しかし、すでにチィトのすぐそばをレベルフォークラスが固めている可能性も否定できない。
おそらく、今まで考えていた以上に大規模な戦いになることが予想された。
「お前にもお前の仲間にも申し訳ない結果に終わってしまうかもしれ

ん。その時は許してくれ」
「チィトと戦うと決めたときにその覚悟はできてます。何があろうとあなたを恨むつもりなんてないですよ」
「そうか。出発前に話しておきたいことがあるなら済ませておくといい」
「はい」
ボクはマンジイ、スズ、ショウさん、マジェリーを集めた。
ボクとマンジイは同じ班、スズ、ショウさん、マジェリーは別の班としてチィトの元へ向かうため、五人全員そろうのはこれで最後になるかもしれない。
しかし、別れのあいさつなどする気はなかった。
「みんな、今まで本当にありがとう。この戦いが終わったら、また一緒に旅をしてくれるかな？」
「もちろんよ、だってすごい楽しい旅だったもの。ね、マジェリー」
「うん、悪くなかった」
「ま、ギルゴムを倒せたのはお前らのおかげだしな。借りを返さないままってのもしゃくだしな」
「うう。みんな、約束だよ。必ず生きてまた会おう」
ボクはスズ、ショウさん、マジェリーと固く手を取り合い、マンジイと共に出撃した。
目指すのは、ここから十キロ先にある薄暗く荒廃した草原。
待ち受けるのは、自分よりはるか格上の最強のデビレンであるチィト。
だが、さらに先で待つ仲間たちとの再会と明るい未来が強く背中を押してくれた。
「マンジイ、ペースを上げても大丈夫ですか？」
「無論じゃ。足を引っ張っては年長者として立つ瀬がないからの」
「よし、それじゃあ！」
ボクは小刀ザクメルを装備し、一気に加速した。
だが、直後にデビレンの大軍が道を塞ぐように次々と前から現れた。

中心にいたのは、かつて戦ったレベルフォーのギュバ。
すでに魔性具レガーザを装備しており、前のように遊び半分ではないことが伺えた。
「お前らはここで俺が始末する。ボスの元には行かせねぇぞ」
「やはり、ボクたちの動きを多少は掴んでいたようだね」
「俺たちもバカじゃねぇ。お前らが近いうちに何かやらかすことは分かっていたさ」
「ここで時間を使うわけにはいきません。マンジイ、一気に攻撃しましょう」
「いや、その必要はない」
マンジイは槍を装備して、前にいた雑兵たちを攻撃していった。
続けてギュバに突っ込んでいき、力強く押していった。
「ニシくん、何をしとるんじゃ！　今のうちに先に進むんじゃ！」
「え？　マンジイだけを置いてですか」
「ワシらの目的は打倒チィトじゃ。今、他の誰かがチィトと戦っているのなら、一刻も早く加勢に向かうべきじゃ」
「ジジイ、奴を先に行かせたところでボスに勝てるわけがない。無駄な抵抗だと思うがな」
「彼はもう出会った頃とは違う。本当に強くたくましくなったんじゃ。非の打ち所がないりっぱな戦士になったんじゃ」
「マンジイ」
「お前さんなら必ずやれる。ワシの見込んだ男なんじゃ。さぁ、行け」
「はい」
ボクは小刀ザクメルを握りしめ、雑兵たちを蹴散らしながら一気に加速した。
その後は他の雑兵たちによる襲撃が二回ほどあったが、特に足止めをくらうこともなく進む事が出来た。
どうやら、デビレンたちの配置が比較的少ないルートを通れたようで、幸いにも万全の状態で草原に着く事ができた。
少し遅れてブガイも到着し、それを見計らったかのようにチィトがフッと現れた。

そして、反応するヒマすら与えず、ブガイを近くにいたボクごと蹴り飛ばした。
殺しのプロであるブガイもチィトにとっては赤子同然でしかなかったのだ。
「ぐう、貴様」
「なーんか時間稼ぎのような戦い方してると思ったらお前たちの差し金か。私刑王ブガイ、ニシ」
「ブガイ、ダクカットは？」
「ああ、起動させた。じゃが、これだけは覚えておけ。弱体化させても奴の力はレベルフォーの比ではない。心してかかれよ」
「はい」
ボクたちはすぐにミミナイフとミミ弓を装備した。
対するチィトはいつもと違って殺気は出さず、堂々と迎え撃つ態勢をとっていた。
「俺の殺気に恐怖しない人間はおそらくお前らだけだ。要するにお前らさえいなくなれば、俺にたてつける人間はいなくなるってわけだ」
「それはお互いさまじゃ。キサマを倒せば組織は成り立たなくなる。ハナからそれ狙いなんじゃからな！」
まずブガイが先発として戦闘の火ぶたを切った。
ミミナイフでチィトの首を切りつけ、続けざまにミミ弓を連射した。
しかし、わずかに切り傷を与えただけで、あっという間に再生されてしまった。
「やはり固いようじゃな」
「まさか、俺に傷をつけられる武器があるとはな。だが、致命傷には程遠い」
「今じゃ、やれ！」
「うおおおお！」
ボクはチィトの背後に迫り、ミミナイフを突き刺した。
しかし、こちらも皮膚をわずかに突き破っただけですぐに再生されてしまった。

ひとまず、攻撃が通るようになったまではよかったが、これでは次元切断カプセルを埋め込むのは無理だ。
「もっと弱い部分を、急所を攻撃するしかないようですね」
「ああ」
「さて、今度はこっちからいこうかな」
チィトは三又型の魔性具を召還し、攻撃してきた。
それは速くて強く、他のデビレンたちのものとは段違い。
ミミナイフとミミ弓が効いてわずかに持ち始めたこちらの希望を掻き消すかのようだった。
途中まではボクもブガイも何とか応戦できていたが、不意に上空から飛んできた魔性の火に気をとられ、魔性具で斬られた。
おまけに直撃こそしなかったが、魔性の火の火の粉でボクは全身、ブガイは両足に火傷を負ってしまった。
「まさか、ボクたちと戦いながら魔性の火を飛ばすとは。しかも、この威力」
「弱体化させてもこの強さとはな。ぐぐ」
「はははは！　まだこんなものじゃないぞ」

魔性の火はその後も降り注ぎ、チィトの追撃もやまない。
火傷薬を使う暇もなく、ボクたちはひたすら耐えながらチャンスを待った。
「やはりボクらと戦いながらじゃ単純なコントロールしかできないようだ。だんだん見切れてきた」
「そろそろ通用しなくなってきたようだな。だったら」
チィトは一旦攻撃をやめると、魔性具を天に向けてかざした。
そしてしばらくすると、上空を雲が覆いはじめ、ひどい嵐となった。
「な、何じゃ、急に」
「うっぷ、これじゃあ俺まで戦いづらいな。少し弱めとくか」
チィトが手を元に戻すとやがて嵐は少しづつ弱まり、かわりに固い雹がボクたちめがけてふりはじめた。
散弾銃のような強力な威力に加え、数もスピードも十分で、完全に

ガードしきることはできなかった。
「ぐ、うう」
「天候をコントロールする。それが奴の魔性具の力というわけじゃな」
「さぁ、どんどん行くぞ」
「くっ、どうすればいいんだ」
さすがに雹に気を取られながらチィトと戦うのは厳しく、ボクたちは動きを制限されはじめた。
それに追い打ちをかけるように魔性具の先端からゲル状の物体が次々と飛び出し、雹に手こずっていたボクの右腕にくっついた。
「な、何だ、こ、ぎゃあああ！」
「フフ、それは人体にとりつき皮膚から体内に入って細胞を食い荒らすのさ」
「どういう事じゃ。まさか、奴の魔性具は」
驚愕するブガイにもさらに巨大な雹が襲い掛かる。
後退しようとするも、広範囲におよぶ雹から逃げ切れはしなかった。
「く、くそ」
「さ、追いかけっこは終わりだ。とどめはこれだ」
防戦一方のブガイめがけて魔性具の先端から巨大な大木が飛び出し、圧迫した。
これは無機物を魔性具の中にしまい、自由に出し入れする能力のようだ。
「直撃はしなかったか。はぁ、やっぱり一つずつしか出し入れできないし、はずれ能力だったかな、これ」
「ぐう、天候を操る能力の他に二つも。何なんだ、どうなってるんだ！」
「フフ、困惑しているようだな。俺の魔性具デスビルの力にな」
チィトは高らかと魔性具の事を話し始めた。
何と、魔性具デスビルには他のデビレンの魔性具を取り込み、奪ってしまう力があった。

そうすることによってデスビルには奪った魔性具の能力が宿り、以降は自分のものとしていつでも使う事ができるのだという。
そして、魔性具はデビレンにとって分身のようなものであるため、魔性具を奪われたデビレンはそれと同時にデビレンとしての力も失う。
つまり、デビレンとしての死刑宣告のようなものと考えて差し支えない。
チィトはこれまでに反逆心を持っていたデビレンや失態が多いデビレンの魔性具を奪い、自分のものとしていたそうだ。
ただ正直なところ、チィトにとっては別にどちらでもよかったようだ。
自分に尽くしてくれるならそれでよし、そうでないなら力を奪ってしまえばどちらにせよ自分の利益になるのだから。
「俺が今まで奪った能力は五つ。辛かったよ、仲間殺しなんてね」
「まさか、デビレンを増やしていたのはそのためか。最終的に力を奪うつもりだったんじゃな」
「さぁてねぇ。ただ、俺の思い通りにならないバカ者はそうなるってだけの話さ」
「大した外道ぶりじゃ。さすがはデビレンたちのボス」
「く、これはうずくまっている場合……じゃないね」
ボクは右腕ごとゲルを攻撃して殺し、両手にミミナイフとミミ弓、口に小刀ザクメルを装備した。
そして、すばやくチィトの背後から接近し、ミミナイフで右肩を攻撃した。
「はっ！」
「おおっと、危ない」
「ちっ」
「うう。これはまずいな」
かすっただけだったが、チィトはあきらかに右肩を庇っていた。
さっきの戦いでもそんな仕草が何度かあったし、右肩が比較的脆い急所だと見てとれた。

「じゃったら、そこを集中的にたたけば」
「かすっただけであの程度だし、おそらくクリーンヒットさせたところでたかが知れてるかもしれません。でも、やる価値はあると思います」
「フフフ、おもしろい、おもしろいぞ。こんなワクワクする戦いは久方ぶりだ。もっと楽しませろ、もっと興奮させろ」
チィトは魔性の火を全身に纏い巨大化させながら、前進してきた。
空は禍々しく曇って雷が鳴り、地面は力を吸われるように干からびていった。
まるでこの世の終わりを告げるかのような絶望的な光景。
だが、ボクは絶対に飲まれはしない。
仲間たちとの約束を胸に力を込めて立ち向かっていった。

登場人物紹介

登場人物紹介
ここでは「四十二歳の異世界冒険記」に登場するキャラクターたちを人間、デビレンに分けて紹介しています。

・人間

（人間たちは、凶悪なデビレンたちの住む危険すぎる環境で生きていくため、常に強く
あらなければいけない。おのれの手でデビレン達と戦い続けるか、それとも金で強い人間たちを雇うかだ。そんな過酷な異世界の住人たちを紹介）

デブで不細工でいろいろ残念な四十二歳の男性。
日本でどん底の生活を送っていた中、不幸にも
異世界に飛ばされてしまい、時に戸惑いながらも
デビレンたちとの過酷な戦いに身を投じることになる。

デビレン狩りをしながら生計を立てている老人。
槍術を得意としており、雑兵やレベルスリー程度
なら複数が相手であっても戦えるほどの高い実力
を持っている。

デビレン狩りの名門スバゲスタン大学の女子大生。
剣術の達人で、レベルフォーともほぼ互角に戦える。
明るく人懐っこいが、凶悪な犯罪者やデビレンは
絶対に許さず、強い怒りを露にする。

仲間たちを殺したデビレンを追って旅する男性。
主にこぶしを使った戦いを得意としている。

電気エネルギーを糧にして動く改造人間。
元々はデビレンたちの支配下に置かれていた。

悪人とデビレンのみをターゲットにしている私刑屋の男性。
悪を徹底的に憎み、悪は根絶やしにすべきと考えている。

・デビレン

(デビレンとは、猿が人間に進化していく過程で邪心を持った一部の猿が分岐する形で生まれたとされる邪悪な悪魔のような生物。かつて人間たちとの長い争いによってほぼ全滅したが、唯一生き残っていたチィトの手で再び勢力の拡大に成功し、過去以上に人間社会を脅かすほどになった。強さはレベルファイブ、レベルフォー、レベルスリー、レベルツー、レベルワンの五つに分かれており、レベルファイブに近いほど強く、父子の肉体、千里眼の他、魔性具という特別な道具を使える)

すべてのデビレン達の頂点に君臨している魔王のような存在。
実力はまさに強力無比で、並の人間なら直接戦うまで
もなく軽い殺気だけで容易に殺害してしまえるほど。
肉体は非常に強固で、まともに攻撃をしても、傷一つつかない。

第三十六話「決着の時」

「はぁ、はぁ。うぐ」
「ニシ、まだ倒れるな。倒れては今までのすべてが無駄になる」
「は、い」
チィトの弱点を見つけたボクは、ブガイと共に終わりの見えない長期戦を続けていた。
戦闘開始からどれだけの時間が経過したか分からない。
まるで隔離された別の次元にいるような感覚がする。
本当に苦しくて苦しくてしかたない。
不本意にも、いっそはやく倒れて楽になりたいという気持ちさえ芽生え始めていた。
だが、膝をつこうとしたところで何とか気持ちを押さえ、戦闘を続行した。
「はぁ、はぁ」
「す、こし、まずいかもしれん」
「お前ら、ばててるヒマはないぞ。デスビルの能力はまだ発動中だ」
チィトは上空から容赦なく魔性の火や雷、雹で攻撃してきた。
ボクは長時間の戦闘が続いた影響で体が悲鳴をあげ、ブガイも限界に近かった。
かといって、立ち止まったりすれば、また例のゲルにつかまるし、もしくは別の能力がとんでくるかもしれない。
そう考えている内にも、避け損ねた攻撃が次々とこちらの肉体を傷つけていった。
「う、ぐ」
「ニシ！」
「さぁ、もうあきらめろ。苦しみが長引くだけだぞ」
「ニシ、動きながらでいい。ワシの話を聞いてくれるか」
「手短にお願いします」
ボクはブガイから話を聞くと、その場に立ち止まり、迫ってきたチィトにカウンターを狙い応戦した。

しかし、それも簡単に見切られてしまい、さっきの二の舞となってしまう。
さらには、体勢を立て直すヒマもなく、デスビルの猛攻に圧倒された。
「ぐ、うううう」
「変だな。右肩を狙ってくると思ったが、そうしない。フェイクのつもりか。ん？」
次の瞬間、ブガイが死角からはなったミミ弓がチィトの右腕に命中した。
ボクはそれとほぼ同時にミミナイフでチィトの右腕を切りつけ、ひるんだスキにデスビルを奪い取った。
「はぁ、はぁ」
「よくやった、ニシ。絶対にはなすなよ」
「なるほど、狙いはデスビルか。でも、お前が使ったところで能力は使えないし、発動中の能力を解除する事もできないぞ」
その言葉通り、上空から降り注ぐ雷や雹はまだ止む気配はない。
しかし、ボクの狙いは別にあった。
「魔性具はデビレンにとって分身のようなもの。だったら、こうすればいいんだ」
ボクは右手にミミナイフ、左手にデスビルを装備し、チィトの右肩を力一杯貫いた。
デスビルに宿る能力こそ使えなかったが、単純に武器として使用するだけなら話は別。
強固なチィトの皮膚も自分の分身であるデスビルの攻撃は防ぎきれなかった。
「ちっ、まさかな」
「思ったとおりじゃ。自分の魔性具で自分を傷つける事なんてありえないし、おそらくこれはチィト自身も知らなかった事じゃ」
「今、チィトの心は乱れ始めているはず。このチャンスは逃さない」
もはや、ボクもブガイも限界などとっくにこえていたが、気力だけで持ちこたえ、戦い続けた。

今度はちゃんと急所である右肩を狙われていると分かっているのか、チィトの余裕ぶった遊び心は消えているようだ。
しかし、それでも持ち前のパワーとスピードで応戦するなど決して押されているわけではなかった。
「ハンデがあるとはいえ、ここまでオレを追い詰めるとはな。ははは！」
「やはり、こいつはワシたちより格段に強い。じゃからこそこの機会を逃すわけにはいかない」
「絶対に勝つ」
ボクは激しく流血しながらもデスビルをふるい、気迫でチィトを押し始めた。
そして、ミミナイフとの同時攻撃をあびせた直後に倒れ込んだ。
「ぐ、げ、んかいだ」
「よくやった、あとはワシが」
「うう、低俗人間共が」
ふらついたチィトの右肩にブガイのミミナイフが突き刺さる。
そして、傷が再生しきる前に続けて次元切断カプセルを埋め込まれた。
「これは、そうか、俺を別次元へとばすつもりか」
「これでキサマも終わりじゃ」
「ぐ、ぐおおおおおおお」
チィトの右肩周辺の空間が少しずつ裂けていき、肉体を飲み込み始めた。
ブガイはふらつきながらも、倒れているボクをかついでその場からはなれた。
「はぁ、はぁ。勝ったぞ、ニシ」
「やり……　ましたね」
「くだらない。何か秘策を考えているとは思っていたが、こんなくだらないものだったとはな。どうせ、時間限定だろ？　その場しのぎにしかならないぞ」
「十分じゃ。その間に我々はキサマが帰ってきたときに備えて戦力を

整えられる。今回と同じ状況になると思うなよ」
「いいさ、楽しみはとっておいたほうがいいから。でも、残念だよ。お前たちともっと楽しく遊びたかったのに」

チィトは笑いながら別次元へと消えていった。
それと同時にデスビルも消滅し、ボクとブガイの命を賭した戦いはようやく幕を閉じたのだった。

「ずいぶん、時間がたったように感じる」
チィトとの戦いの後、ボクはブガイのアジトに運ばれてベッドの上で傷を癒していた。
今、一番気がかりなのは別行動していた仲間たちの安否。
新たな怪我人たちが運ばれてくる度に不安が頭をよぎった。
「ああ、もうだめだ。じっとしてられない」
ボクは耐え切れず、傷を押さえながらベッドからおりた。
そのまま外へ飛び出そうとしたが、出口の前でブガイに押し戻されてしまった。
「はなしてください。仲間が、仲間が心配なんです」
「聞け。ショウとマンジロウにはさっき会ってきた。深い傷を負ってはいたが、命に別状はないようじゃ」
「本当ですか！　あ、スズとマジェリーは？」
「お嬢さん二人は軽傷だったので、負傷者たちの搬送を手伝っておる。じゃから、お前が心配する必要はないんじゃ」
「はぁ、よ、よかった」
「とりあえず、中に戻るぞ。お前の方が仲間たちよりもずっと重傷なんじゃから」
ブガイはボクをベッドに戻した後、改まって話し始めた。
それはボクを仲間として勧誘するものだった。
もちろん仲間たちも一緒でいいし、ずっと願っていた旧友への復讐も手伝ってくれるという。

今さらブガイの仕事を否定するつもりはないし、決して悪い話ではないように思う。
でも、私刑屋の仕事はボクには荷が重すぎる気がする。
今回はデビレンが相手だったからしっかりと共闘できたが、人間相手では詰めの甘さが露出してしまう可能性が高い。
おそらくは、遅かれ早かれ衝突して内部分裂してしまうだろう。
「そうなったら、また無益な争いが起こるでしょう。それは絶対に避けたいんです」
「お前らしいな。しかし、復讐はもういいのか？」
「ええ。正直、果たせなかったとしても仕方ないかなというのが本音です。あの事件のせいでひどい目にはあったけど、おかげでこの世界に来て大切なものを手に入れましたから」
「大切なもの？」
「強さと素晴らしい仲間。ボクにとって一生の財産ですよ」
「そうか。お前は今、幸せなんじゃな」
ブガイは少し落ち込んだ様子だったが、最終的には納得してくれたようで、話を無理に進めようとはしなかった。
その後はやってきた部下たちと話をしながら、淡々と武器をまとめ始めた。
「さてと、こうしちゃおれん」
「もう行かれるんですね？」
「そうじゃ。別の土地で戦っている部下たちの応援に向わなければならん」
「また会えますか？」
「お互いに生き残っていればな」
「もし、力が必要な時は言ってくださいね。必ず力になります」
「ああ。前に言ってくれた通り、ワシらは平和を望む者同士。共に戦った戦友なんじゃから」
ブガイはボクと固い握手を交わしたのち、遠征地へと旅立っていった。
ボクも負けていられない。

戦いはまだ終わっていないのだから。

最終話「未来のために」

「ふぅ。さて、休憩……　にはまだ早いかな。がんばらないと」
ブガイと別れて三か月後の朝、ボクは訓練に励んでいた。
その周りは本当に寂しく静かで、仲間たちの姿はない。
本当はまた五人で旅をするはずだったのだが、重傷を負っていたマンジイの治療に三年という月日が必要だった。

この厳しい世界で三年もの間ただ待っているというわけにはいかず、一時的に別行動をとることになったのだ。
マンジイは、スバゲスタン大学内の療養所で四十時間以上に及ぶ大手術の末に入院が決定。
今は懸命に辛いリハビリに励みながら、再起をはかっている。
ショウさんは死んでいった仲間たちの墓にギルゴムの件を報告した後、恋人の待つ遠い土地へと帰還。
一か月ばかり滞在した後は、また一人旅をしながらデビレン狩りを続けるつもりなのだそうだ。
マジェリーはスズと一緒に家族を探すための旅を開始。
最近届いた便りによると、手掛かりが少ないために難航はしているものの、旅自体は楽しいらしく、ポーカーフェイスだったマジェリーが以前よりも笑顔を浮かべる時が多くなったと書かれていた。
ボクはマンジイの元を訪ねつつ、デビレン狩りを再開した。
だが、それから今日までに遭遇したデビレンの数は以前の半分ほど。
おそらく、ボスであるチィトを失ったことで組織内に亀裂が生じて分裂して個々が孤立化し、目立った行動がとれなくなったのだろう。
そのおかげで各地の村や町ではだんだんと活気が戻りはじめ、デビレンの存在そのものが忘れ去られようとしているように思えた。
もちろん良い事ではあるなのだが、決して忘れてはいけないこともある。
今回戦ったデビレンたちの中には元々人間だった者も少なからず

いて、彼らが悪い誘いにのって悪事に加担したことが事件を拡大させたという事実も忘れてはいけない。
チィトがいつか復活した時、また同じことを繰り返さないようにするためには、ただ戦力を強化するだけでなく、誰もが悪に屈しない強い心を持つことだといえる。
それをこれから生まれてくる者たちに教えて未来へ送り出さなければならない。
この先、今回と同じような事が起こるのか、それとも違う未来が待っているのかは今を生きる者たちにかかっているわけだ。

だから、ボクはこれから仲間たちと共にさらに成長して後輩たちに恥じないような立派な戦士になる。
そして、必ず真の平和をつかみとってみせる。
そう心に強く誓いながら、力一杯に訓練を続けるのだった。